

K2A-58

Z32-B88

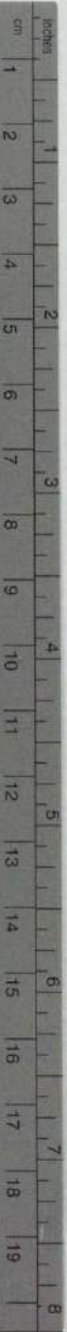
金の星

昭和二十一年一月一日発行

大附録 少年世界偉人家族合せ



新年號 第十卷第一號



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

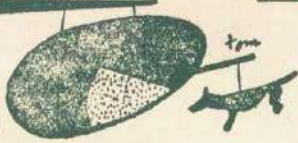


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



未明童話集

小川未明著

川上四郎挿繪・村山知義裝幀

第二卷

菊判美装四四〇頁
定價八・凸版三四枚
送料廿七錢

罕にみる純情と良心の所産である未明童話集の第二巻がここに完成されました。すべて四二篇、一つ一つの作品が語る思想は、やがて全的未明氏の表現であつて、成人にも子供にも共通する童心の世界を感ず耕して、そこに善と美の一致を見せ居ります。村山さんの機智に富んだ獨特の装幀と川上さんの落着いた挿畫、またこの第二巻を飾るものです。

童話集

鹿島鳴秋著 四六判背クロス三四頁
布目敏行裝畫 着色版八・凸版挿繪二八枚
定價二圓 送料十八錢

新しい発見と教化とを念頭に
におかれた童話集創刊

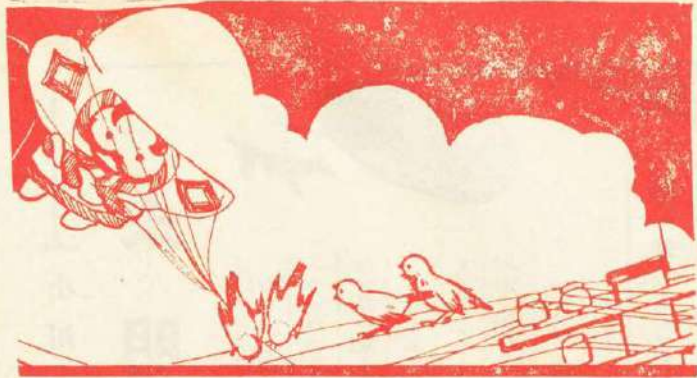
創作童話の少人形のお使
改訂版の少人形のお使
改訂版の少人形のお使
改訂版の少人形のお使

第一卷

既刊 武井武雄 嶺初山 滋
定價三圓 送料廿七錢

モヤブツのお家

東京日本橋通
丸善株式會社
丸善・田早・田三・田神・東京



少年少女 新年大附録
世界偉大家族合せ

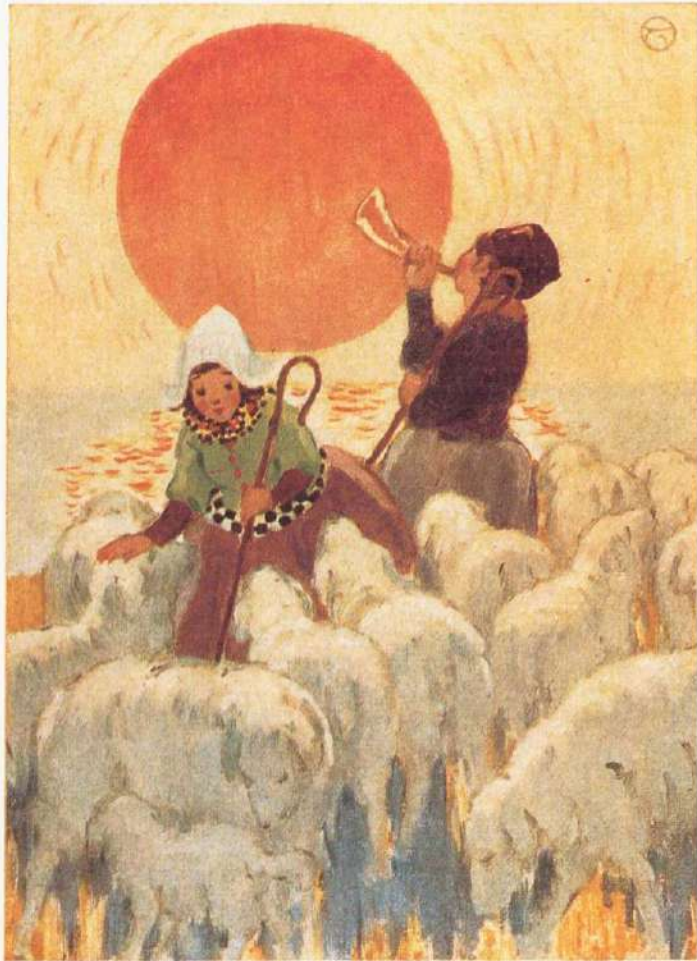
ひ 一郎さんの知らない話 (童話) (一六) 野口雨情選
 頼光の四天王 (長篇) (一七) 川崎春二
 積んだ雪消えた雪 (童話) (一八) 西川喜平
 正直愛ちゃん (童話) (一九) 横田貴美衛
 魚 一 王國を争ふ (長篇) (二〇) 野口雨情選
 二 小島政二郎
 お 正 月 (童話) (二一) 小島政二郎
 三 木露風
 世界童話欄 (二二) 三木露風
 行者と職業師と遊藝者(日本) シャクタンタラ姫物語(印度)
 謎を解く王(子)(長篇)



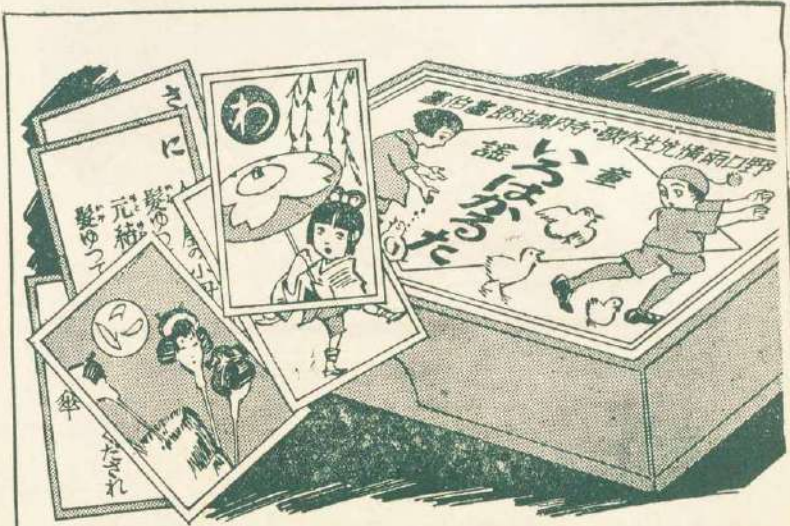
鐘よ響け (表紙・石版) 岡本歸一
 初日を迎へに (口繪・三色版) 寺内萬治郎
 鳥 羽 繪 (童話) (一) 野口雨情
 同 作 曲 (二) 本居長世
 源 八 栗 (童話) (三) 沖野岩三郎
 新 ぼら博士 (童話) (四) 三井信衛
 人 斬り彦 齋 (童話) (五) 野口雨情選
 小 山 寛 二
 舜 天 丸 王 子 (長篇) (六) 三島霜川
 魔法くらべ (童話) (七) 高橋里江
 ひとつぶ栗が (童話) (八) 野口雨情選
 ナイヤガラ の 冒 険 (童話) (九) 立石美和
 河原の大坊主 (童話) (一〇) 樺山千代



てへ迎を日初



畫郎治萬内寺



童謡いろはかるた

野口雨情先生作歌

寺内萬治郎先生畫

昨年さねの『金の星きんのかほし』新年號大附録として添へ
ました野口雨情先生と寺内萬治郎先生の合
作になつた『童謡いろはかるた』を箱入の
立派なかるたに作り上げました。新年のお

遊びに是非此の『童謡いろはかるた』をお
使ひ下さい。壹萬部だけ作りました。實費
金貳拾五錢(外に送料六錢)にてお頒ちしま
す。御入用の方は至急にお申込み下さい。

◆野口雨情生新著

▽好評如湧……

注文殺到▽

童謡教本

正風童謡の正道

童謡教授の要諦

童謡創作の指導

流行喧騒の時期を過ぎた「童謡」は今や落ちつくべき所に落ちついた。今後の使命は、童謡の教本としての指導にある。時に落ちついた童謡を高く唱えるのが、童謡界の最高権威としての野口雨情先生の著作たる本書である。本書は各年度の適宜の注を創作者の指導等、切に講じて、又假令、各教材毎に鑑賞の本として、現下作曲家として児童の指導等、しる好適のものである。尚、末には附録として、藤村、水野、加へ童謡書としての完璧を期したものである。

尋常一・二年用 (新刊)
尋常三・四年用
尋常五・六年用 (近刊)
上製各冊金壹圓
送料十銭

文學博士 尾上柴舟序
東京 丹羽海鶴序
高師 奥山錦洞著

日本書道史

菊判總布製函入
筆蹟寫真壹百廿
定價參圓九拾錢
送料十八錢

書道研究者必讀書 本書は著者多年の努力に依り、新らしい體系を以て現れたる本邦最系統的に叙述し、其の間古今の能書家三百十餘名の傳記を詳論すると共に、其筆蹟の至るべき適確なる時代的を試みたものである。尚、卷末に能書家年表を添へて、各書家の生歿・筆蹟及び事蹟の主要を一目瞭然たらしめ、又筆蹟寫真百二十餘種を挿入して、研究の便を圖りたるなど、出版界稀れに見る良書である。

發兌 東京市本郷區元町二の六六 啓文社書店

新道教育及圖書館の好評と推賞を受けたいだけ風特選書
 クリスマスや暮お正月に児童へ絶好の贈物

文部博士 森 鷗外
 文學博士 松村 武雄
 赤い鳥主筆 鈴木三重吉
 馬淵 冷佑
 四先生共著

版一廿 日本童話
 上巻 月次 浦島太郎、花吹雪、猿蟹、舌切雀、カチカチ山
 下巻 月次 コフコフ取、鼠の侵入、海月の使者、狼の草紙、文藝茶室

版一廿 日本傳説
 上巻 月次 浦島太郎、一寸法師、姥山、羽衣、金太郎、松山鏡
 下巻 月次 玉取、山椒太夫、田原藤太、輪太、羅生門、牛若

版一廿 日本神話
 上巻 月次 世界の初、黄泉風、天の岩戸、八岐の大蛇、白兔、踏踏引
 下巻 月次 雄のお使、國譲、高千穂姫、命の使、海幸と山幸、張原宮

(錢六税郵錢拾六金各價定冊六全冊二下上各判六四)

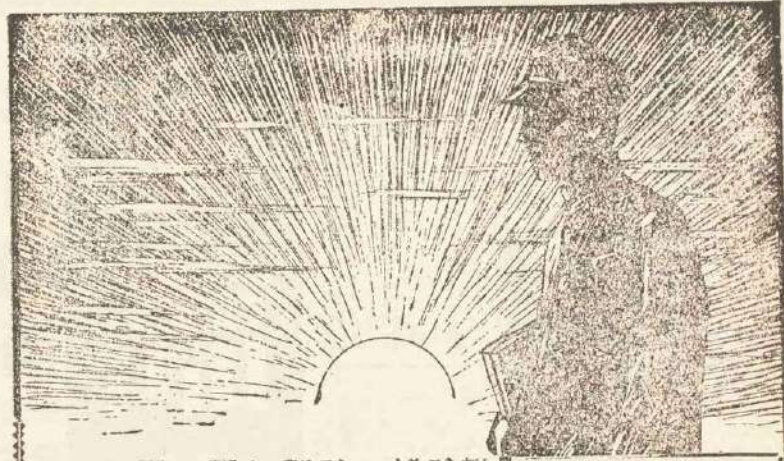
東京高等師範學校教授
阿部七五三吉先生共著
 久米 修二先生著
 著 溪會 推獎
 慶應幼稚舎菊池氏推獎

忽廿九版

花の巻(甘菜)果物の巻(甘菜) 各巻附圖 各冊卅五錢
 風景の巻(甘菜) 各冊卅五錢
 説明附 郵税各四錢
 合本特別製極美
 箱入 蠶用紙附
 定價金壹圓八拾錢
 郵税 十八錢

筆者は新道教育の權威、指導説明の懇篤適切、畫材の變化・豐富、鮮新・製版の巧妙、技術の冨、定價の廉なると共に從來無き教育繪手本として推獎される。書名のとほり、實に教育的價値に富み、ためになる繪手本として學校に家庭に、すばらしい、夢を愛用されてゐます。今般多數の御要望により特に見事なる合本箱入を出しました。教育的贈答品として眞に絶好!

東京市神田區 **培風館** (振替東京) 錦町一丁目 (三二一六七)



創立廿六週年 五十回新學期 **會員大募集!!**

滿天下の **青少年諸君に檄す**

新しい朝が上る
 君よ新しい希望に燃えて
 大日本國民中學會へ入會せよ
 一年の計は元日にあり
 君の一生の幸不幸が今定まるのである。
 學問の大切なことは君も亦よく知つて居るであらう
 さうして癡學でも立派に成功出来ることや
 獨學者の爲には大日本國民中學會の中學講義録が
 一番理想的であることも亦よく君は知つて居る筈だ。
 昭和三年の新春だ。特に君の決心を促す。

に者會入下目 供提典特大五

講義録見本つき規則
 ハガキで申込み次第無代進呈す。

東京 東河臺 **大日本國民中學會**

世界の代表的名作を三種づつ一冊に収め、装幀は寺内萬治郎先生が苦心に苦心をこらした結果出来上つたものだけに立派な事は他に比類がありません。安價を以て誇つてゐる全集本も、本書に比べたら遙かに見劣り

金の星家庭文庫 (1)

ロビンソン漂流記
アラビヤン・ナイト
ガリバー旅行記
定價金貳圓
送料十二錢

金の星家庭文庫 (2)

アンデルセン童話
青い鳥
イソップ物語
定價金貳圓
送料十二錢

金の星家庭文庫 (3)

西遊記
ドン・キホーテ
グリム童話
定價金貳圓
送料十二錢

金の星家庭文庫 (4)

母を尋ねて三千里
小公
奴隸物語
定價金貳圓
送料十二錢

がします。まして、世界の傑作ばかりを集めた本書が、内容に於て如何に優れてゐるか書店にて御覽下さい。この家庭文庫を讀めば、世界の少年少女文學を全部知り得たと云つても過言ではないでせう。



繪入 世界童話集 (ロシアの卷)

菊判箱入美本 定價金貳圓五十錢
内容三〇〇頁 送料十二錢

- 目次
- 一、黄金鳥と灰色狼
 - 二、大蛇退治
 - 三、笑はぬ姫
 - 四、美しのパツシリサ
 - 五、ゼメリアの馬鹿
 - 六、箱の命の水
 - 七、生命の水
 - 八、海の幻
 - 九、魔法の馬
 - 十、金もちロズマ
 - 十一、鴨になつたお姫様
 - 十二、魔法鏡
 - 十三、黄金の都
 - 十四、山の上の國々

繪入 世界童話集 (印度の卷) 定價二圓五十錢
(忽ち再版) 送料十二錢

((書 版 出 社 星 の 金))

日本歴史實傳物語叢書

三島 霧川 先生 著・羽鳥 古山 先生 生
◇ 定 價 各 冊 一 金 壹 圓 ◇ 送 料 十 錢 ◇

1 源 義 經

2 曾 我 兄 弟

3 赤 穂 四 十 七 士

4 小 楠 公

5 信 玄 と 謙 信 (川 中 島 戦)

6 維 新 哀 史 彰 義 隊 と 白 虎 隊

源義經のお話は誰が讀んでもたまらなく面白いお話です。この本は、でたらめの義経の物語とは違つて、歴史によつて義経の生ひ立ちから最後までを書いたものであります。いかに立派な本です。

あはれにして勇ましい曾我兄弟の物語は、日本の物語として永く傳へられるべきお話です。三島先生の苦心の結晶になつたこの「曾我兄弟」はこの物語と共に永遠に傳へられるべき名著です。

三島先生が最もお得意の研究だけに、でたらめな談話などさう遠く、眞に迫つてゐます。大石蔵之助をはじめ四十七士が、血の涙を流して主君の仇を討つたその當時の有様が手に取るやうに分ります。

楠正行のお話で本になつてゐるものが少い中に、この本だけは勇壯な正行の一生を傳へてゐる得難い著述です。父正成の死後、正行はどんなに勇壯な一生を送つたか本書を御覽下さい。

信玄と謙信の幼い頃のお話からはじまつて、この二人の偉い大將が川中島で大合戦をする有様までくわしく書いてあります。一々史蹟をさぐつて書いてあるこんな面白い本は外にありません。

徳川幕府が倒れ王政復古となつた明治維新の物語の中で、有名な彰義隊と、白虎隊のお話を面白く書いたのが本書です。少年諸君はこの本によつてどんなに深い喜びを見出されるでせうか。



日本歴史實傳物語叢書(7) 關原大合戦

三島 霧川 先生 著
羽鳥 古山 先生 畫

四六判箱入美本
内容二〇〇頁
挿畫十五葉
定價金壹圓
送料十錢

天下分け目の大戦争として歴史に名高い「關原大合戦」のお話が、三島霧川先生の非常な苦心によつて、ここにはじめて皆さんの讀物として本になりました。大高評です。
天下の大英雄徳川家康と石田三成とが、智慧と謀をつくし、自分の命を賭けて戦つたのですから、日本の大戦争の中でも特に面白い戦争です。三島先生は例によつて、丁寧親切に、その當時の世の中の有様から、武將英雄達が決死の奮戦をする有様や、大合戦の配陣の模様まで一々細かに説明してあります。皆さんは此の本によつて、歴史上の智識を得るばかりでなく、昔の武人達の立派な精神を知る事が出来て面白いばかりでなく、非常に爲めになります。是非御一讀下さい。

日本歴史實傳
物語叢書

(8) 三島 霧川 先生 著・羽鳥 古山 先生 畫
彰 義 隊 と 白 虎 隊 (大 好 評 忽 再 版)

維新哀史、彰義隊と白虎隊の奮戦から、會津藩城少年勇士の勇壯な最期までを書いたもので、實に勇壯にして涙に満ちた一大物語です。(定價金壹圓)

著名刊新の行發社蘭金

<p>第三編 川名芳郎編 池上浩装幀 黒船の襲來 (ペリー来と幕府事件)</p>	<p>第九編 加治亮介編 池上浩装幀 尊王攘夷</p>	<p>世界名篇物語叢書第十六編 小島政二郎編 池上浩装幀 ナポレオンを捕へる (附録 ナポレオンを救ひに)</p>	<p>少年少女科學大系第八編 松平道夫著 池上浩装幀 兒童鑛物學</p>	<p>世界童話叢書第十一編 豊島次郎編 高坂元三裝幀 スペイン童話集</p>
<p>四六判箱入美本 本文約二百頁 原色版二枚</p>	<p>凸版刷挿繪豊富 定價各金一圓 送料十二錢</p>	<p>四六判箱入美本 本文百八十頁 原色版凸版豊富 定價金九十錢 送料十二錢</p>	<p>四六判箱入美本 ドイツ式裝幀 本文百九十頁 定價金一圓 送料十二錢</p>	<p>四六判箱入美本 本文三〇〇頁 原色版凸版豊富 定價金一圓半錢 送料十二錢</p>
<p>三百年といふ長い太平の夢を食つてゐた徳川幕府も、嘉永六年に米國の水師艦隊ペリーが四隻の軍艦を率ゐて浦賀の港に現はれた時、その驚きやうはどんなでせうか？ さうでなくしてさへ、やうやくその謎のあやうくなつて來た幕府の屋敷裏は、それをきつかけに一層怪しくなつて來ました。折も折、京都を中心として起つた尊王派の人々は、時こそ至れりと、尊王攘夷の大旗を押し立て、その勢は一日と盛んになつて行きました。かうして明治維新の大業と一歩は一步と近づいて行つたのです。(本書書内内容見本御入用の方は御一報下さいまし)(次刊 新撰編)</p> <p>一代の英雄ナポレオンも敗軍の將となつては眞にみじめなものです。ナポレオンを捕へると獨逸軍の精銳の中から特別に選ばれた九人の騎士の爲に、あはれ殺の身とならうとした時陛下の身代りに立つたジェラルド大佐の活躍こそ誠に目撃しいものでした。(次刊 前世界物語)</p> <p>日常生活に必要欠く事のできない金・銀・銅・鐵を始めとして金剛石、紅玉等の寶石類に至るまで、その形や性質は無論の事、どうして地中から掘り出されどして實用化されるか、例によつて興味深く記した本書こそ、必ずや多大の御満足を與へる事と信じます。(次刊 兒童電氣學)</p> <p>ドンキホータを讀んでもお分りになるやうに、スペインの童話には軽い滑稽の内に、昔ながらの騎士道的仁侠と正義に對する、燃ゆるやうな熱情とが到る所に現はれてゐます。そして又此の國の童話位明るい氣持ちで、讀む事のできるものは他にないでせう。(次刊 日本童話集)</p>				

東京市外 東上駒込 八二番 蘭金社 振替東京一〇七六一番 電話小石川五六六番

金の星



(通卷第九拾八號)

鳥 羽 繪

作 詞 野 口 雨 情

作 曲 本 居 長 世

羽 音

はうきかづいて ヤツサノサ - ヤツサノサ
 ますをたたいて ヤツサノサ - ヤツサノサ

ねず-み ぞ - せ - - へば
 ねず-み は - せ - - けば

にげてねずみは ヤツサノサ -
 もうもおもちは ヤツサノサ -

き - - ず の - - せ - - せ か た た た た た た た た
 ひ - - - せ - - せ せ せ た た た た た た た た

鳥羽繪

野口雨情

箒かづいて

ヤツトサノサ

鼠を追ひば

チウ〜チウ

逃げて鼠は

ヤツトサノサ

榊の中

チウ〜チウ

榊をたたいて

ヤツトサノサ

鼠に聞けば

チウ〜チウ

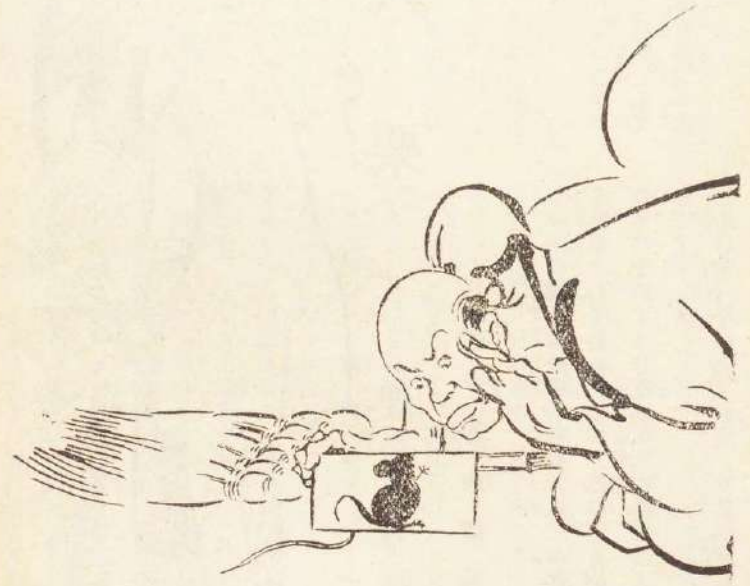
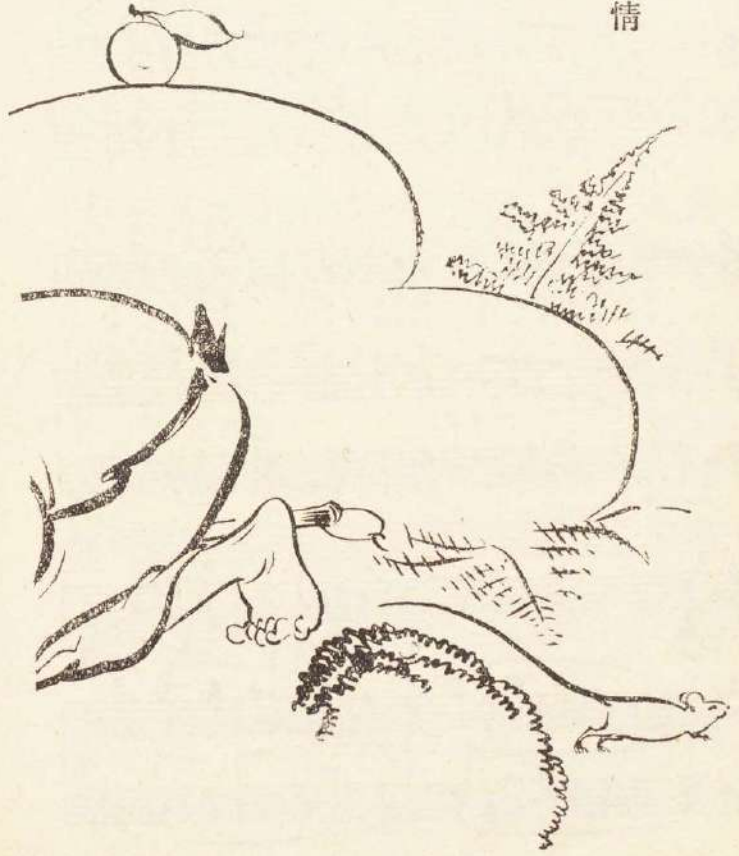
もうも お餅は

ヤツトサノサ

食べませぬ

チウ〜チウ

岡本歸一齋





源 八 栗

沖野岩三郎

寺内萬治郎畫

モーリ博士は港の汽船會社から當惑した顔をして歸つて來ました。それは午後一時に出帆する管の汽船が四時に延びたからです。

モーリ博士は今晚の八時から、次の町で講演をする約束をしてあります。けれども四時の汽船に乗つては十時すぎにしか次の町へ着くことが出来ないのです。船に乗らないとすれば、八里の陸路を歩かなければ

なりません。しかも其の陸路といふのは険しい峻しい山路です。

約束を重んずる博士は、其の険しい八里の山坂を越えて次の町へ行くことに決心しました。

博士は自転車をもつてゐました。で、それに乘つて行きましたが、僅か二十町ばかり行きますと、もう路が険しくなつて、自転車を乗ることも出来ません。そこで自転車を押しながら坂を登りました。

二里ばかりも來たと思ふ頃、路はますます険しくなりました。その険しい路の兩側には一抱へもあるやうな大きな杉や檜が生ひ茂つてゐます。しかも、これが何里續いてゐるか知れないのです。

博士は少しく恐ろしくなりました。枝と枝とが茂り合つて、トンネルのやうに薄暗くなつてゐる坂路を、息を切らせながら登つてゐますと、一町ばかり前の方に、どうも人間らしい黒い影が見えます。「人だ。人が歩いてゐる！」

淋しい山路ですから、博士は人影を見てうれしかつたのです。で、急いで坂を登つて行きました。間もなく博士は其人に追ひつきました。そして後から、「今日は。」と聲をかけますと、黙つて後を振り向いたのは、色の黒い、眼の玉のぎよろりと光る、とても人相の悪い大きな男でした。

「今日は。」と云つて、男はぢろりと博士の方を振り向きました。手には太い棒ちぎれを握つてゐます。男の顔を見た時、博士はすぐ、「これは泥棒だな。」と思ひました。けれども、今さらどうする事もできませんから、「御免なさい。」と云つて、男の前を通り抜けて、さつさと歩きました。

博士は後を振り向かないで、ずん／＼歩きました。もう後から呼び止められるか、もう聲をかけられるかと思ひましたが、男は何にも言ひません。

少しく安心した博士は十分ばかり歩いたあとで、後を振り向いてみますと、男は杖にすがつて、とぼと

ぼと苦しうに歩いてゐます。
博士は其時始めて、其の男が病人であることを知りまして、ほつと安心しました。

「あアよかつた。泥棒でなくつてよかつた。」

博士は獨りごとを言ひながら、また自轉車を押し坂を登りました。

それから一時間程後でした。峠に登り着いた博士は、坂の方を見返りながら、

「たしかに病人だつた。可愛さうな病人だつた。それに私はあの人を泥棒だと思つて、不親切にしました。本當に私は悪い事をしました。もう一度引返して、手を引張つてあげようか知ら……いや、私は今晚の八時までに、どうしても次の町まで行かなければならない。しかし、あの方は氣の毒だ。こんな險しい坂を、あの苦しうな歩きぶりで……」と吐いてゐました。けれども時計を見ますと、もう愚圖愚圖してはゐられませんか、博士はまた自轉車を



押して坂を下りました。

二三分ほど歩きますと、向ふから一人の魚屋さんが來ました。平べつたい籠に、鯛だの鯖だのといふ乾魚を二三十入れたのを擔いでゐます。

博士は立停つて、「魚屋さん」と聲をかけました。

見知らぬ西洋人から呼び止められた魚屋さんは、びっくりして立停りました。そして黙つて博士の顔をのろ／＼眺めてゐました。

博士は、ポケットから五十錢銀貨を一枚取り出して、魚屋さんに渡しながら、

「魚屋さん、すみませんが、私のあとへ一人の病人が來ますから、此の五十錢を上げて下さい。私少し急ぎますから……左様なら」と云つて、さつさと坂を下りました。

二

魚屋の藤六さんは貧乏でした。毎日朝はやく問屋

へ行つて、魚を一圓だけ買ひ出します。そしてそれを賣つて五十錢づつ儲けるのです。資本が一圓五十錢あれば七十五錢儲かるんだが、どんなにしても一圓五十錢のお金を残すことはできません。のみならず、うつかりすると資本の一圓が八十錢九十錢になりさうです。

藤六さんは悲觀してしまひました。朝から晩まで山を越え谷を渡つて、山の中の一軒屋を、あちらこちらと廻り廻つて、「乾魚はいりませんか、ひものはいりませんか。」と言つて賣りあるいて、一圓五十錢の賣上げをもつて歸る事は、並大抵の苦勞ではありませんが。こんな商買を何十年してゐたつて、貧乏を卒業するといふ見込がないので、思ひ切つて死んでやらうと思つたことがありました。

藤六さんは或日、家の屋根裏に細紐をかけて、首を縊らうとしました。高い踏次を持つて來て、細紐を屋根裏の梁にかけました。しかし考へました。

「此の紐を首に引つけて、ぶらさがる。紐がきれて落ちる。私はひどく腰を打つて怪我をする。怪我をすれば明日から魚を賣りに行けない。」

そこで首を締ることを止しました。

其の翌る日は四十銭しか儲かりませんでした。藤六さんは又た悲観して、今度は川へ入つて死なうとしました。

川の傍へ行きました。川原に草履をぬぎました。

それから着物を脱ぎました。裡體になつて、ざぶざぶと水の中へ入りました。眼から涙がほろ／＼落ちます。

段々深い所へ入つて行つて、もう水が藤六さんのお乳のあたりまで来た時、雨がぱら／＼と降つて来ました。藤六さんは川原の方を振返つてみました。そして、

「大變だ、雨が降つて来た。たつた一枚しかない着物が濡れる！」と云つて、大急ぎで川原に駆け上つ

て、着物を着てお家へ歸りました。

それから四五日経つて、またお魚を賣残して来たので、今度は山へ行つて首を締つて死なうとしました。

山には藤葛がありました。その藤葛を切つて、それを輪にして木の枝に引つけました。そしてその輪に首を引つけて、ぶら下らうとしましたが、藤六さんはまた考へました。

「待てよ、こんな葛に首を引かけたなら、きつと首の皮が摺り剥ける。さうすると膏藥を貼らなければならぬ。膏藥代がいるから尙さら貧乏になる。」

そこで藤六さんは藤葛の輪を、木の枝に引つけて置いたまゝお家に歸りました。

その翌る日でした。藤六さんはいつものやうにお魚を賣りに行つて、もう半分ほど賣つた頃でした。

これから山の向ふまで越えて行かうと思つて、籠を擔いで坂を登つてゐますと、上から一人の西洋人が

降りて来ます。ごと／＼と自轉車を押して石ころ路を歩いてゐます。

英語を知らない藤六さんは、何と云つていいかわかりませんから、黙つて路を除けてゐますと、西洋人の方から聲をかけました。

「魚屋さん、すみませんが、私のあとへ一人の病人が来ますから、此の五十銭を上げて下さい。少し急ぎますから……左様なら。」

西洋人は五十銭銀貨を藤六さんの掌に載せて置いて、さつさと坂を降りてしまひました。

藤六さんは、西洋人の見えなくなつた時、につこり笑ひました。

「うまいうまい！ 五十銭銀貨が不意に天から降つて来たやうなものだ。これは、おれが毎日々々正直にして一所懸命に商買をしてゐるから、神様がこれに此の五十銭銀貨を下すつたんだ。ありがたい、これで明日の朝は一圓五十銭の資本で買ひ出しが出来



る。さうすると七十五錢は儲かる。ありがたい、ありがたい。』
藤六さんはその五十錢銀貨を、財布の中に入れて坂を登りました。

三

源八さんは鐘詰會社の職工でした。手早くつてよく働くので、毎日三圓から四圓の賃金を貰ひます。けれども、源八さんには二つの悪い癖があります。それは酒を飲むこと、酒を飲むと酔つぱらつて喧嘩をすることです。

町の會社で三年ほど働いてゐましたが、儲けたお金はすつかり酒代になつてしまひました。その上時々喧嘩をするので、みんなから憎まれてゐました。そのうちに源八さんは、ひどい脚氣病にかゝりました。どうしても働けないので、國へ歸らなければなりません。けれどもお船に乗るだけの船賃があり

一
二
ませんから、遠い遠い陸路を、腫れた足を引摺りながら、歩いて來ました。

港の宿に泊つて、宿賃を拂ひますと、もう財布の中に二錢銅貨一つしかありませんでした。けれども致方がないので、杖にすがつて上り下り八里の險しい峠を越しにかゝりました。

淋しい山路ですから、朝から正午すぎまで誰一人にも會ひません。もうお腹が空いて足が引けなくなつた時、後から人の來る足音がしますので、振返つてみますと、一人の背の高い西洋人が自転車を押して、上つて來るのです。

源八さんは町の工場に居る時、酒に酔つぱらつて、停車場の廣場で西洋人を殴つた事があります。その西洋人はノルエーから來た鯨捕りの漁夫で、滅法力の強い喧嘩好きの男でした。源八さんは、それと知らずに殴りつけたのですから、今少しの事で、ひどく殴り返される所を、交番の巡査さんに助けて貰つ

たのでした。

「さつと、あの捕鯨船の男だ。おれが工場をやめて國へ歸るときいて、自転車を追つかけて來たに相違ない。今となつては、もう致様がない。殴られて樹の幹に縛りつけられるか、それともピストルで……」そんな事を思つてゐるうちに、西洋人は近寄つて來ました。源八さんは杖を堅く握つて立寄りしました。「今日は。」と西洋人は云ひました。源八さんも「今日は。」と云つて、西洋人の方をぢろりと見ました。そのうちに西洋人は、さつさと源八さんの前を這つて坂を登りました。

「あの男では無かつたか。」

源八さんは安心しました。そして暫く歩いてゐると、向ふから一人の魚屋さんが來ました。

魚屋さんは源八さんの姿を見て、びたりと立寄り

ました。
「あなたは御病氣ですか。」

魚屋さんは問ひました。

「はい、私は脚氣で困つてゐます。」

「さうですか、それはお氣の毒ですなあ。」

言ひながら魚屋さんは擔つてゐた籠を道の上に卸しました。そして財布から五十錢銀貨を取出して、「これをなあ、西洋人があなたに上げておくれつて、おれに頼んで行つたよ。あなたが難儀して歩いてゐるのを見て、氣の毒になつたのだらう。さあ、五十錢、貰つて置きなさるがよい。」と云ひました。

源八さんはびつくりしました。殴られるか殺されるか、どつちかだと思つてゐた西洋人から、五十錢銀貨を貰つたのですから、びつくりするのも當然です。のみならず、それを預つた魚屋さんが、それを黙つて自分のものにしたつて、誰も知らない筈なのに、正直に自分にそれを渡してくれた事が、どうも不思議でたまりませんでした。

もう二錢銅貨一つしか持つてゐないんですから、

その五十錢銀貨を押しこめて財布に入れました。そして魚屋さんに別れた時、源八さんは思ひました。

「あれは人間ぢやあ無い。神様だ。あれがいつも酒を飲んだり喧嘩をしたりした揚句、こんな病氣にかかつて困つてゐるので、これから心を改めるやうにと云つて、神様が魚屋さんに化けて来て、おれに此の銀貨を下すつたんだ。さうに違ひない。」

源八さんはそんな事を思ひながら、夕方の七時すぎに山の麓の小さい木賃宿に辿りつきました。

その宿には猿廻しと小間物屋さんが宿つてゐました。二人とも酒を飲んでゐました。

源八さんは酒を飲みたくつて致様が無かつたのですが、神様から頂戴したお金で、酒を飲んで、また喧嘩なんかしたなら、どんな事になるかも知れないと思つて、酒の代りに唾を飲み込んで置きました。

四

源八さんの鐘詰の商標は、五十錢銀貨の上に西洋

人の顔と魚籠とが描いてあります。

魚屋の藤六さんの村には購買組合が出来ました。



商賈に経験があつて正直な男を販賣係にしたいと云つて、誰彼と詮議した結果、藤六さんが適任者と認め

源八さんは、たうとう國へ歸りました。國の人たちは、飲んだくれの源八さんが歸つて来たこと云つて、誰も相手にする人がありませんでした。ところが源八さんは病氣が癒つて達者になつても、お酒一口飲みません。無論喧嘩などいたしません。

どうして、あんなに改心したんだらうと云つて、みんなが驚きました。其のわけをさしますと、源八さんは、

「あれは酒を飲んで喧嘩をしたに拘らず、おれの困つてゐる時二人の神様が、おれを助けて下すつたんだ。あれはもう、死ぬまで酒は飲みませんよ。」と云ひます。

それから源八さんは自分の家を工場にしました。工場で鐘詰を作りはじめました。

源八さんの國は栗の名産地で、毎年々々澤山の栗を諸所方々に送り出します。源八さんは其の栗の實を鐘詰にしたのです。

められて、販賣係に推薦されました。

藤六さんは時々町へ行つて、いろんなものを仕入れて來ます。その品物の中で、一番よく賣れる物は「源八栗」といふ栗の鐘詰でした。しかし藤六さんは、その鐘詰を何所で誰が製造してゐるのだから、ちつとも知りませんでした。

モリ博士は、其後間もなく西洋へ歸りました。長く日本にゐた博士は、日本流に町の左側を歩いてゐました。ところが其國は右側通行の習慣でしたから、町の曲り角で自動車にぶつかつて大怪我をいたしました。

病院で一ヶ月あまり養生をしてゐるうちに、急に日本が戀しくなりました。で、看護婦に日本製の食物を、何でもいゝから買つて来て下さいと云つて頼みました。一時間ばかり経つて、看護婦は鐘詰を一つ買つて歸りました。

博士は喜んで其の鐘詰のレツテルを見ました。レ

ツテルは「Gempachi-Kuri」と書してあります。日本に長くゐた博士は、くりといふ意味はわかりましたが、げんばちといふ意味がわかりませんでした。

博士は日本語の辭書をひらいてみました。たんに「げんばち」といふ言葉はありませんでした。が、「げんばちくり」といふ言葉はありませんでした。

商標を見ました。けれども博士は、そこに描いてある五十錢銀貨と西洋人の顔と、魚籠とが、此の源八栗に、どんな關係があるのだから知りませんでした。

博士はその鐘詰を看護婦さんに開けて貰つて食べてみました。實に旨い栗でしたから、もつと買つて来て下さいと頼みました。

間もなく博士の病室には源八栗の鐘詰が三十も四十も集まりました。それは博士が此の鐘詰が好きだといふので、みんながお見舞ひに持つて来て下さつたのです。

或時二人づれの見舞客が来た時、源八栗の商標を



新ぼら博士

三井 信衛

水島 爾保 布 畫

お日様の國に、大きな巨きな綿の製造會社が出来る時分、言ひかへると、綿の屑が何萬と私共の上

に落ちる冬のこと、一人の友達が私の家へ遊びに来て、胸に様々の勳章を、勳章かけのやうに釣つた、

面白い顔をした一人のをぢさんを紹介してくれました。
「この人は大日本ぼら博士といふ名前なのだ。生れた時にお父さんからつけて頂いた名前も、皆がぼら博士、ぼら博士と呼ぶものだから、いつの間にか

見てゐた一人が、

「此の繪に描いてある人の顔はモリー博士をつくりですネ。」と云つたので、博士も、看護婦も、聲を揃へて一度に笑ひました。しかし博士はそれ以來、商標に描いてある顔が自分の顔であるやうに思はれてなりませんでした。

「あのネ、私の顔を商標にしてある、日本の栗は本當に旨いのですよ。あれをお買ひなさい。」

博士は會ふ人毎にさう申しました。

いつの間にか、その國では源八栗のことを博士栗といふやうになりました。

日本では源八さんの工場が、段々盛になりました。

藤六さんは、もう悲觀など決していたしません。

裏の山では、樹の枝に引つかゝつた藤葛の輪が、まだ其のまゝに風に吹かれてぶら／＼してゐます。山雀や頬白が其の葛の輪に宿つて面白い歌を囀つてゐます。
(をほり)

本當の名を忘れてしまつたと云ふことだ。」私の友達

はかう説明しました。氣がつくと、ぼら博士の胸に釣つた勳章が七つ八つ、折柄の窓から洩れた日の光に、目のくらむ程光つてゐました。

ぼら博士は、私たちの思ひもつかないやうな、奇抜な、冒險や功勞をしたさうです。一度私はぼら博士からお話を聴きたくて、そればかり待つてゐましたが、たうとうその目的がかなひました。大日本ぼら博士は、エヘンと咳拂ひをしながら緩りと語り出

しました。

日本海の大戦

私の十五の時でしたかな。ほら、御存じでせう。明治三十七年から八年にかけて、世界一の強國の一つであつた露西亞と日本とが、たうとう戦争をいたしました。大變な大戦争でしたよ。その時分私は日本海の真中も真中、佐渡ヶ島の方に住んでをりましたが、さあ日本海の大戦が始ると、大砲の弾が私の家の上を、グユ、グユと云つて飛んで来るし、どうかすると鐵砲の弾が、毎朝食べる味噌汁の中から出て來たりなんかすることも、三日に一週や二週はありました。お汁のことを、ジウと讀むのは、やつぱりこの鐵砲から來たのかとも、後から思つたりしたものです。

ところが、毎日々々家の周りへ飛んで來る鐵砲の

一八
彈を、ガラス罫の中へ入れて貯めておきますと、二日三日四日と日が経つて行きますにつれ、もう一杯になつてしまつて、ガラス罫にも入り切れなくなりました。

あなたは貯金をなされたことがありませんか？
物を貯めると云ふのは、なかなか楽しみなものですよ。鐵砲の弾が、毎日々々貯つて行つて、ガラスの罫からお鍋になる、お鍋がこんどはトランクになる、トランクがお次は麥酒箱になる……全く塵も積つて山となるといふ諺は、本當のことを言つたのだとその時初めて、つくづくわかりました。

どうでせう。一月ばかり経ちますと、私の家の庫いづばいに弾が貯つてしまつたものです。

「よし、よし。これを溶かして、大きな世界一の鐘でも拵へてやらうかな。」

私は庫を見上げて、私の母にさう申しました。ところが私の母は、生れつき愛國家でした。

コロツブの彈丸

「いえ、いえ。こんな戦争の場合に、日本が勝つか負けるかといふやうな危機一髪の國家の大事の折にのんきに鐘なんか拵へては國に申譯がありません。今日日本では鐵砲の弾が足りなくて大變困つてゐるのですから、これを、陸軍か海軍に送らうではありませんか。」

私の母は熱心にかう私に言ひました。私はもう立處にそれに賛成いたしました。早速その彈を船に乗せて、砲兵工廠へ持つて行つたのでした。おかげで私は戦争が終つた時、陸軍省と海軍省から、

「日本がロシアに勝つたのは、一つにはあなたの力が加はつてゐるも同じことである。こゝに厚く感謝の意を表し、永く日本帝國の軍事美談として後世に残して置く。」

といふお禮のお手紙が送られて來ました。いつ何時たりともその手紙をお見せ申しますよ。

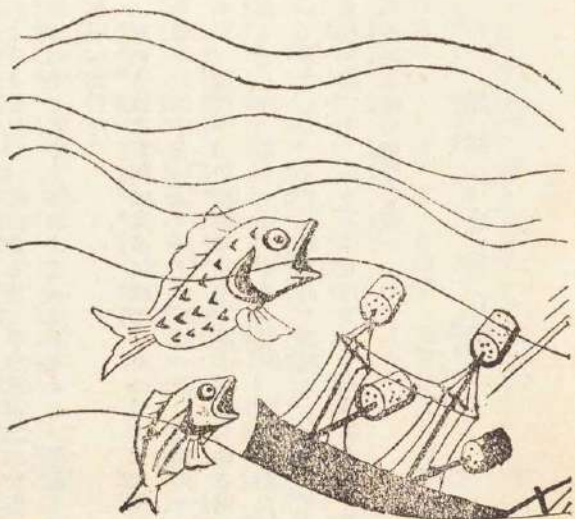
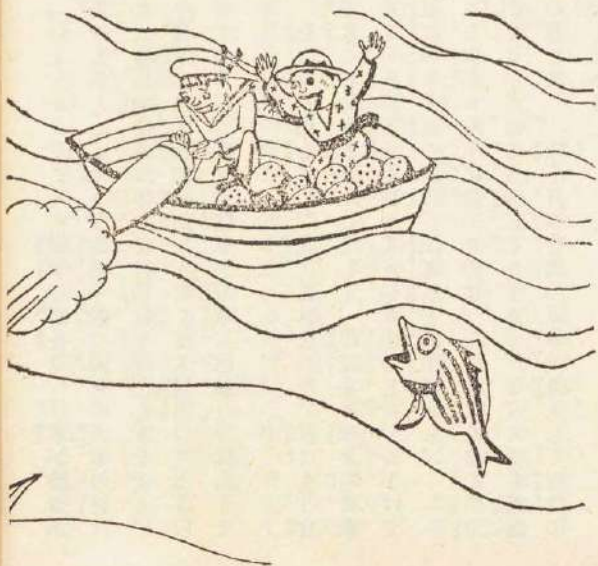
これもやつぱりその時分の話なんです。私が或る曇つた朝、島の岸のところに立つて沖を見てをりますと、八哩程の沖合に、突然ヴォーン、と云ふやうな音がしまして、空の真中頃まで、黄色い水煙りが上りました。

「はて可笑しいぞ。鯨の潮吹にしては少し黄色過ぎる。」

私は不審に思つて、直ぐに家に驅けて入りました。それから双眼鏡を手に持つて沖を眺めますと、さあ私は頭から零下五十度ぐらゐの水を浴せかけられたくらゐ驚きました。今しも日本の旗を甲板に立てた一艘の日本汽船が、敵國の海中水雷にかゝつて、沈没しようとしてゐるではありませんか。

汽船は沈んでしまひました。私はもう残念で耐り

ません。思はず海岸の白い砂の上に尻もちをついて
オウ、オウと泣いてしまつたものです。
後で父から聞きますと、それは軍用品や大切な秘



と手紙を出しますと、間もない大きく大砲を一臺、
船に乗せて持つて来てくれました。私はその船にキ
ルクの弾をいやと云ふ程たくさん積んで、恰度あの

110
密書類を乗せて、五島沖を出た三笠艦に途中で會つ
て、その重要書類を手渡すことになつてゐたらしい
のです。

「沈没して死んだ乗組員を助けることはもう出来な
いが、せめてその大切な書類だけでも出したいもの
だ。」

私は一人で、くよくよ思案しましたね。二日の間
と云ふものは、夜も一時間程しか眠りませんでした。
その時私は前に云つたやうに、まだ満十四歳八月の
少年でしたが、余り心配したために、白髪が生え
ました。

神様は私に、いつも苦しめるだけは苦しめておい
て、その後で素晴らしい知恵をお貸しくださいます。

私は早速東京にある大きなキルク會社へ、キルクで
拵へた大砲の弾を、何千といふ程注文したのでした。

それから譯を話して、陸軍省へ、

「大砲を一つ貸して下さい。」

日本の汽船が、水雷にかゝつて沈んだ沖の邊りへ、
用心しながら進んでまゐりました。

「全乗組員集れ。」

船の沈んだ真上の邊へ着きますと、私はかう云つ
て、咽喉の潰れる程の大きな聲を出しました。總て
の乗組員が私の前で、氣をつけた姿勢をして集りま
すと、そこで私は、

「沈没した船に向つて、キルクの弾丸を打て！」

と命じました。四十五度の角度に海底を向いた大
砲の筒口から、一分間おきに一度の割合で、例のキ
ルクの弾が、ヅ、ヅ、と飛んで出ました。その
痛快さつたらありません。いや、痛快など、云
つては當りません。只もう珍しいやら美しいやら、
弾が出る度に私はばんざいを唱へました。

キルクの弾は、あるものは水に浮き、又あるもの
は一向水上に浮いては來ません。浮かない時は、一
層ばんざいを唱へました。

と一 恰度、九百九十五發目のキルクの彈丸が、カンガルウの啼くやうな音を出して、大砲の筒口から飛び出したその刹那でした。

私はもうこのまゝ、海の中へ入つてしまひたい程嬉しくなりました。乗組員も皆、手の林が出来た程、兩方の手を高く／＼擧げて、「成功々々！ 萬歳！」を唱へました。

私の奇抜な計劃は見事に成功したので、大砲から撃つた何千といふキルクの彈は、沈んだ船のマストや、煙突や、甲板の手摺や、有りとあらゆる處に刺りました。そしてキルクと一緒に、次第に船は浮いて來ました。大切な軍用品や書類は、無事に船から出たのです。かうして私はまたも海軍省から、勳八等功七級の勳章を頂いたのです。

斥候になつた話

と一生懸命に頼んで見ました。士官もさすがに私の熱心に膽をつぶして、許すとも許さぬとも別に言ひませんでしたので、そのまゝ私は陣屋に寝起をしてゐました。

私は何とかして、斥候に出たいものだ、日が出て入つても、そのことばかり思つて、何度とも知れない程、私が斥候に出てゐる夢を見ました。

何しろ露西亞の兵隊は、標騎兵だとか、コサツク騎兵だとかつて世界に有名な程強いのですから、一寸やそつとの計略では、中々やり込められさうにはないのです。

私はそこで例の通り、三日三晩續けて大思案をしました。私の人並外れた知慧は、大抵思案し出してから、二日乃至三日のうちに現れて來るのがならはしです。

私の頭の中に、ダイヤモンドのやうな、輝きに充ちた計略が、はたと浮んで來ました。私は夜なかに

南山の戦ひが始まつたといふことを聞きますと、私はもう到底ヂツとしては居られませんでした。何とかして私も戦争に出て、もつとこの上に、素晴らしい功名手柄をして見たいと、寝ても起きてもそのことばかり願つてをりました。

けれども幾ら頼んで見たところで、二十一歳以下の私など、なか／＼戦争に出しては貰へません。私は決心して、こつそり家を抜けました。そしてお父さんの漁船に乗つて、苦心艱難の末たうとう南山から三十五哩程離れた日本の陣營に着きました。味方の軍にゐた一人の士官は、私の姿を見て「早く家に歸れ、國家につくす途は、戦争に出るばかりではない。もつと外に少年の爲すべきことが山程あるのだ。」と心をこめて私に言ひ合めました。

「それぢや僕は、日本軍に加へて下さいとは云ひません。とにかく戦争の有様を、見せるだけでも見せて下さい。」

カンガルウのやうに起き出して、それから陣屋の附近にある、いろんな草をむしり取つて、木の箱に土を入れ、その上にむしり取つた草を植えました。又手頭の土のかたまりや礫を拾つて、一つの盆栽を拵へました。そして苦心して、日本の兵隊が、鐵砲を持つて寝てゐる大きな五分位の人形を、二三十拵へてその盆栽の上に並べました。勿論、盆栽の草の間に、小さな聯隊旗や、小さな木で刻つた大砲を、置いておくことも忘れませんでした。

私はその盆栽を、背囊の中へ入れて、只一人こつそり陣屋を抜け出しました。その夜の中に、何哩歩いたでせうか。明る朝、桃色の太陽が、にこ／＼と笑つて現れる時分、私は敵の陣營にもう一哩足らずと云ふ近さまで来てをりました。

すると案の定一人の見張りの上等兵が、二十三サッチの大砲の彈のやうに、私のところへ飛んで來てその邊の森の葉を落す程大きな聲で、

「止め！ 止め！」と叫びました。
私はおつかかなびつくりをしてゐるやうな恰好で、
その場に立ち止りました。するとその露西亞の見張



兵は、危かしい日本語で、
「お前は日本軍の間諜か。」と語るのです。
「いえ、いえ、さうではありません。どうぞお許し
下さい。」

私は手を合して拜みました。敵兵は、
「都合によつては許してやらないこともないが、其
の代りには日本軍の居どころを、俺に話すか。どう
だ！ それとも命を奪つてもらふか。その二つに一
つだ。」

と、兀鷹のやうな怖しい目をしました。私はそこ
で、日本軍の居どころを話すから、何卒命だけは助
けてくれと頼みました。

「そんなら日本軍は何處にゐるのだ。」

私は、手を伸して、日本軍の陣屋とは、恰で反対
の方を指しました。敵の見張兵は何度も、私の言つ
たことが嘘だらうと云つてさへません。私は今こ
そ！と思つて、

盆裁を持つて、見張兵の見てゐる、双眼鏡の前に出
したのです。

「やあ！」敵兵は途方もない聲を出して、尙も熱
心に双眼鏡から盆裁を見てゐました。

「あゝ日本兵が集つてゐるやうだ。一時も早く知ら
さなくてはならない。」囁くが早いか見張兵は、私
のことなども見向きしないで、敵の本陣の方へ走
つてゆきました。私は韋陀天の速さで馬に股つて、
味方の陣屋へ戻つて來ました。

それから大舉して、敵の陣營に日本軍が突進した
時分、敵兵は皆私の教へた方角に進んでしまつてゐ
ました。日本軍は目出度くそこを占領してしまつた
のです。私は、大功をしました。南山が陥落し
たのも、やつぱりその一つは私の力なのです。

戦争がすむと私は勉強のために、東京へ出ました
が、そこでも又面白いことを種々やりました。それ
は今度お話しつたときお話し申させよう。

「そんなにお疑ひになるのなら、双眼鏡で見て御覽
なさい。」と言ひました。

敵兵は双眼鏡を眼に當てようとしてしました。その隙
に私は、背囊の蓋をあけて、すばしこく右手にあの



こほろぎ (推薦)

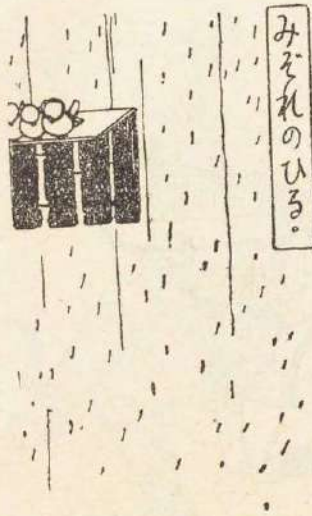
福岡 武田 幸一

土間のくらがり

ころくと

ひそんでなくのは

みぞれのひる。



こほろぎこ

寒さが来るから

しみるから

羽をふるはせ

ころくと

ないて夜明けて

日が暮れて

秋もゆきます

こほろぎこ



みぞれのひる (推薦)

大阪 古村 徹三

さらり みぞれに

ひつそりして

さんくわ さんくわ

さあむいな

ひるげのけむりは

みぞれぞら

しづかに みぞれと

なるのかなあ

すゝめも ふくれて

ひつそりして

さんくわ さんくわ

さあむいな

古井戸 (推薦)

不明 太田 秀穂

地藏さんの
古井戸 草の中
つるべは底抜け



はねつるべ
地藏さんの
古井戸 水がない
水が飲みたい
地藏さんは
一日井戸中
のぞいてた

コスモスの
ひなたんぼ (推薦)

愛知 森 ほたる

コスモスよつたかつて
ひなたんぼ
ひなたんぼ

むんぶり

やまが (推薦)

岐阜 伊藤 益平



あしがしびれる
むんぶり
むんぶり
みんながしびれる
むんぶり

白い霜きた
山家ちや
チロリ
夕日がチロリ
夕日のたんぼに
お婆さが

チロリ
子守でチロリ



人斬り彦齋

小山寛二

羽鳥古山畫

元治元年の七月十一日のことです。眞夏の焼きつく様な暑い日が、かんと白つぽい埃りの路や、ひからびた家々の屋根瓦の上に照りつけて、三條佛光寺通り、木屋町河岸には、人通りさへまばらでした。

往來の側らに一軒の茶店があつて、そこに二人の武士が腰を下ろしてゐました。どちらともそまつな木綿の紋つきに、長い黒鞘の刀を落し、笠をぬいで

懐ろをひろげながら、さも曇さうに扇子で風を入れてゐます。右手の方の武士は、背が高く、骨組ががつしりして顔も鍛らみ、見るからに強さうですが左の方の武士は、背も低く、顔色があをさめて、何だか頼り無い位にやせてゐます。ただ、眼の色が妙にきら／＼光るのが、背の高い方の士の、おとなしげな顔つきにくらべて、氣味悪く見えました。

二人はしきりに何か話してゐますが言葉がよくわからないので、茶店の爺さんは、變な顔をして、じろ／＼と、その方をぬすみ見して居ます。……大方これも九州あたりの浪人者であらういやに物騒な様子をしてゐるが、面倒なことが起らねばいいが……爺さんは陶の中で、そんなことを思つてゐるのでした。

全くその頃は物騒な世の中でした。

やれ浦賀に異國の黒船がやつて來たのだ、浪人が戦争を起したのだ、勤王だの佐幕だのと恐ろしい話ばかりが傳つて來ます。わけて京都は勤王の志士と幕府方の士との衝突が烈しく町人や百姓は生きた心もなかつたのです。

ふと、かつ／＼と、威勢のいい馬のひづめのひびきが往來に聞えて來ました。ひよいと振向いた背の高い方の武士が、

『おや、佐久間だぞ』と連れの士にささやきました。背の低い武士は、その聲につりこまれた様に、直ぐ往來に目をむけましたが

『おう、佐久間だ、ちく生、威張つて來やがるな』と舌打ちしました。

『憎い奴だ、日本を異國の紅毛に賣る不忠者のめが』と背の高い武士もいまい

ましけです。

と、背の低い武士の眼が、ぎよろりと烈しく光りました。蒼ざめた燐の光りにも似た、はだ寒い目の色です。そして咳く様に、

『よし、やつつけてやる！』

『よせよ。ここは往來だ。それにこの眞晝間に、そんな亂暴なことが出来るか』

背の高い武士は、突立上つた背の低い武士の、袴をつかんで止め様としてゐます。

茶店の中で、こんなことがあつてゐる様とは、知るや知らずや、馬の主は次第に近づいて來ました。

黒い絹の肩衣に、紺色のマチ高袴、西洋風の馬具を置いた大きな馬にゆりりと跨がつて、右手に細い朱塗りの鞭を持ち、左手に手綱かいくつて、ゆつ

たりと進んで來る人は、その頃日本に名高い大學者、佐久間象山でした。佐久間象山は松代藩の士で、非常に學問に勝れ、殊に西洋の事情にくはしく、つまらない内輪同志の喧嘩はやめて早く外國と交りをむすび、向ふの文明を取り入れて、日本を進歩させなくてはならぬ、といふのが此人の説でした。

併しこの立派な考へも、何も知らないその時の志士の一部の人からは、日本を西洋の屬國にでもし様とする議論かの様にはき違へられて、佐久間は都合な奴だ、西洋かぶれをしたでも學者だ』と憎まれてゐたものでしたが、段々世の考へが進んで來て、漸く象山の議論も天子様に認められ、今日は山階宮のお招きで御殿にお伺ひして、國のまつりごとに就いての色々な意見を



申述べての歸途でした。

馬は茶店の前に近づいて参ります。

此の曇さにもめげずに、六尺近くの大
きな身體を日の光りにさらして、にこ
やかなほゞえみを口許に浮べた象山の
姿は、今から進み開けてゆく日本の將
來を思つて、心を躍らせてゐるかの様
に見えます。

『止めるな小橋』

丁度茶店の中では、背の低い武士が
掴まれた袴をふり切つて、腰かけの上
に敷いてある薄べりを、むづと左手に
取つた所です。

『でも……』

小橋と呼ばれた背の高い武士が、も
う一度止め様とした時、背の低い武士
はもう往來に飛出してしました。

シーンと静まり返つた眞夏の晝です。
何處かでシュー〜と、ものうい聲で油

罫がないてゐます。恐ろしい事が、こ
の静けさを破つて、今起らうとしてゐ
るのであります。

二

『待て佐久間！』

左手に持つた薄べりで、自分の顔を
隠し、右手で馬の鼻面をおさへて、背
の低い武士は叫びました。

路端から飛出してはかにかに自分の馬
を止めたこの得體の知れぬ男を見た時
象山はハツとするものを感じました。

『不禮者、何奴ぢや』

と鞭をあけて、男の手を打ちます。

『俺だ、肥後の河上だ』

さう言ふと、ばらりと左手の薄べり
を投げ、馬の鼻面取つた右手を放して
刀の柄に手をかけた背の低い武士は、
まりの様に、地上三尺ばかりをかるが
ると躍り上りました。その途端、

三

『あッ！』と喚く聲がしました。

見よ、今二度目の鞭を振り上げた象
山は、右手を高く空に延ばしたまゝ、
うーんと呻いて、眞逆様に馬からころ
け落ちたではありませんか。そしてそ
の腰から股に掛て、眞赤な血潮がた
ら〜と流れ出てるではありませんか
『やつた！』

見てゐた小橋は吾知らず叫びました。

落ちた象山が起上らうとして、半ば
身體を起した時、素早く河上はぶすり
と刃を立てました。咽喉を目かけて、
止めの一さしをやつつけたのです。

象山は血潮にまみれて、二言と言は
すことされて了ひました。

それ人殺しだ！いや喧嘩だ！と何處
からか大勢の人が集つて來ました。そ
して、町役人も飛んで來ました。
がその時には、もう河上の姿も、小

橋の姿も、そこら邊りには見られませんでした。

半時（二時間）程後に、祇園神社の出入りしい鳥居の前に一つの立札が立ちました。それにはこんな意味の事が書いてありました。

『佐久間象山といふ奴は西洋の學問にかぶれて、日本をおろそかにする不忠者である。その上、近頃は天子様に入つて天子様の御威光を損ふ様な企みを爲してゐる。それで自分は三條佛光寺通り木屋町河岸で叩斬つた。本來なれば曝首にしなければならぬ奴だが、眞晝間でそれが出来ないのが残念だ。元治元年七月十一日 皇國忠義士』

三

象山の甥に林一學といふ人がありました。この人も勤王の志士でありましたが、伯父が殺されたのを非常に残念

に思つて、何時か仇を取つてやらうと血眼になつて相手を探しました。

斬つた者が肥後の河上だといふことは、その時見てゐた茶店の爺さんの話で直ぐ判りました。河上といふのは、名を彦齋と云ひ、志士の間でも名高い短氣者でした。根は正直でしたが、非常な西洋きらひなので、同じ志士の中でも、象山やその弟子達の、進んだ考へにはどうしても賛成が出来ず、かねがね「文明黨の奴等は國賊だ、幕府と同じく悪い奴共だ」とふんがいつてゐたのです。象山一派のことを世間で文明黨となへてゐました。彦齋は反対派の人とさへ見れば、誰彼の嫌ひなくきつと斬つたものでした。そのくせ彦齋は、格別劍術の達人でもなく、力が強かつた譯でもありません。ただ、思つたことは石にかじりついてもやり通

三四

すといふ、意氣と膽つ玉ばかりでしてゐた仕事だといふから、奇體ではありませんか。幕府の家來はもとより、志士達の仲間でも彦齋のことを「人斬り彦齋」と云つて、おじけを振つてゐました。

その中に九門の戦（長州の兵と會津の兵との戦争で、俗に蛤、御門の合戦といひます）や、長州征伐が起り、世の中はいよゝ騒がしくなつて、元治元年の年が暮れ、慶應元年が來ました。

或日、一學は志士の集會があつて、洛外の眞光院といふ寺に出かけてゆきました。集つた者は、土佐や長州や薩摩や佐賀などの人が主で、その中に肥後の人が三人居ました。

一學は、その肥後の中の一人で高田源兵衛と名乗る、顔色の蒼い小柄の男

方は？

「私は佐久間象山の甥の林一學です。今彦齋は何處に居りますか、御存じなら教へて下さい」一學は何氣なく言ひ乍ら、すはといへば抜打に様と、左手を、膝の下の刀にかけました。

「あゝさうでしたか。成る程、仇敵討ちですな。それは〜」

源兵衛はつと身を起して、改めて一學の顔をじろ〜見乍ら落着拂つて、

「あの男は風の様な男で、今日此處に居るかと思へば、明日はよそにゆきますので、居所はしかと判りませぬが、未だ京都に居ることだけはたしかです」二人の對話に、何故か一座はシーンと静まつて、重苦しい沈黙が落ちて來ました。皆一様に二人の顔を見比べてゐます。

『ですが……』源兵衛はさびのある聲

で續けました。「あの彦齋といふ男は、もと〜細川侯のお茶坊主上りで、劍術も何も知らぬ、唯の無茶者ですから唯會ひさへすれば、討果すに手間暇は入りませぬまい。瘦せてひよろ〜した小男で、左様、一寸私とよく似てゐます。顔色の青い所など、私そっくりですよ。あゝいふ亂暴者は、早く斬つた方が、國の爲ですから、私もせいせい氣をつけて、居所が分つたら直ぐお報せ致しますせう」

案内顔色も變へずに、怪しい態度がないばかりか、ひどく親切に言つてくれるので、一學は張りつめた氣もゆるみ、ははあ、これは自分の誤が間違つてゐるな、と思ひました。『有難う御座ります。どうぞ宜敷お願申上げておきます』

一學は禮をのへました。

目をつけました。その男は先刻から皆が盛んに議論をしてゐるのに、唯一人腕をくんで眼をとちた儘、壁にもたれてもくねんとしてゐます。あらまじ話が終つた頃、一學はその男の傍によつて行つて聲をかけました。

『もし、一寸お尋ねしますが、あなたはたしか肥後の方だと仰言つた様ですな』

その男は、身じろきもせず薄目をひらき、懶げに答へました。

『左様。肥後の高田源兵衛と申します』

『では定めて河上彦齋を御存じでせうな』

づばりとさう言つて、一學は源兵衛の顔色を鋭く眺めました。

男の眼がざらりと光りました。だが聲だけは靜かに、

『よく知つて居ります。——そして貴

集りが果てて、源兵衛は外の肥後の人と一緒に帰ってゆきました。一學もその後から、戻らうとして門の所まで来ると、後ろから肩を叩いた人があります。それは長州の桂小五郎といふ、

頭分の志士でした。
「おい林、うまくと一杯くはされたな。」
「えッ？」
「彦齋め、くそ度胸の坐つた奴ぢや。」



三六
のうのうとして、自分のことを話してゐる。私とよく似て居ります。なんて、本人だもの、似てゐる筈さ」
「あ！」一學はのぞけ返らんばかりに驚きました。そして「うぬッ！」と叫んで、まつしぐらに駆出しました。
眞暗な夜でした。森の蔭を、急足でゆくのは、小橋元雄と、高田源兵衛と、もう一人の肥後の武士でした。
「驚いたな、君の藝當には」さう云つたのは小橋です。するともう一人の武士が、
「いや全くはら／＼した。君が河上だと知つてゐる者は、皆呆れた顔をしてゐたぜ」
源兵衛は黙つて笑つてゐます。
高田源兵衛と名乗つてゐる男こそ、河上彦齋であることは、言ふまでもありませんでした。



三七
たたた……足音が近づいて来ました。三人は立止りました。
「待て、高田源兵衛、いやさ、河上彦齋ッ！」
走り乍ら一學は叫びました。
「應、ばれたか」源兵衛の彦齋は、振り向いて刀を抜かうとします。
その時でした。森の蔭から、ばらばらと黒い人影が、およそ二十人ばかり飛出して来て、ものも言はず、走つて来た一學もひつくるめて、四人を取囲み、烈しく斬りかかりました。
「あ、新撰組だ」小橋と今一人の武士は叫んで、逸勢釋としましたが、もう其時は駄目でした。幕府方たる新撰組の網にかつたのです。
「よし、戦へッ」と彦齋の聲。
今は仇敵討どころの騒ぎではなく、四人が力を併せて敵を防がねばならぬ

くなりました。

闇の中に散る火花。双のふれ合ひ

びき。四人は一生懸命に戦ひます。

『残念ッ！』誰か倒れる音がしました

たしかに一學の聲です。彦齋はそれ

を聞くと、

『おい小橋、後を頼むぞ』

と聲をかけて倒れた一學の傍に近寄

ると、一學をひつかついで、追つて來

る敵を斬り拂ひ下ら、森の中に逃げこ

んでゆきました。

暗い夜がしん／＼と更けて、その中

に、双の音は次第に静かになつてゆき

ました。物凄いい呻聲と、睡い血の香

りだけがそこらに漂ふてゐます。誰が

勝つたか、誰が斬られたか。

聞空の星は、しきりに瞬きました。

四

『おい、しつかりしろ林。傷は浅いぞ』

此處は森の奥の一軒のあばら家です。

行燈の灯がほんやりと、三つの影を

壁にきざんでゐます。

手負の一學を膝に抱いて、名を呼び

つつ、介抱してゐるのは、彦齋です。

そのそばにおづ／＼とひかえてゐる百

姓は、此家の主でせう。

遠くの方で自分の名を呼ぶ様な気が

して、一學はほつかり目を開けました。

と、まごまごと、目の前一尺の所に映

つた、仇敵彦齋の顔――

『お、おのれッ、』

一學は助けぬ身をもがきました。が

彦齋の聲は、あくまで静かでした。

『あせるな、彦齋は逃げはせぬ。仇敵

はいつでも討てる。先づ、おぬしの命

をとりとめることぢや』

一學は齒を喰ひ縛りました。

併し何故か、その眼からは、大粒の

涙がはら／＼ととめどなくはうり落ち

ました。

X X X

其後また月日が流れました。

一學は二度と仇敵討ちのことを言出

しませんでした。

明治元年の秋、河上彦齋は、幕府が

倒れて其後に新しく出来上つた政府に

さからつた爲に、東京の小塚ヶ原で首

を斬られました。

其事を聞いた時、人知れず泣いたの

は、一學でした。一學は、彦齋の話の

出る度に、人に申しました。

『人斬り彦齋など言つて、世間では何

も判らぬ亂暴者の様に思つてゐるが、

あの人こそ、まことに武士の道をわき

まへた、立派な／＼男であつた』と。

(をはり)



秘 琉
史 球

舜天丸王子

三島 霜川
寺内 萬治 郎 畫

一、赤 潮

赤い潮が、遠い、南の洋から流れて來ました。
太陽の光は、赤く動ずむで、この熱い、日本、
南方の國を照らしました。風も赤い、地も赤い――

空も地も、燃えてゐるやうでした。今から、ざつと
八百年前、虬の國と云はれる琉球に起つた話です
が……
悪神、來れり
海潮、清からず。

悪神、來れり
白沙、蟹と化す。

南風原から與那原、中城の方につらなる海岸にかけて、琉球の國の子どもたちは、さう云つて、無心にうたひました。さうして、その悪神を怖れました。怖れて、そして、その無氣味な童謡を、うたひました——もちろん、童謡なんて名は、ついてゐませんでした。が……

悪神といふのは、嘘雲國師のことを指したのです。嘘雲國師は、不思議な「幻術」をつかふ、そして、不思議な「神通力」のある妖僧だと、一ツぱんに、知れ渡つてゐました。

「あれが、出て来ると、きつと、國に禍がある。そして、めい／＼の身の上にも、きつと、何か災難がある。」

と、皆なが、さう思つてゐました。そして、それは、眞とのことでした。

は、「虬塚の神」に祈つて、「占」をしたり、不思議な「呪と咀」をする凄い巫女でした。

ところで、この凄い巫女の婆アさんが、近頃、その本性を現はして、ある恐ろしい「陰謀」を企み、國王の、たゞ一人の王女、寧王女を殺して了はうとしました。が、失敗して、國王も、さすがに、すつかり憤つて、妖婆を宮殿から放逐して了ひました。その上、「あの、怪しい、虬塚のやうなもの、この國にあるから、阿公のやうな妖婆があるのだ。塚を發掘して丁へ」

と、云つて、虬塚を發掘かせました。さうして、自分も、その發掘くところへ出かけました。

虬塚は、何千年前からある、古い／＼塚でした。この國の先祖が、この國を「開闢」いた時に大きな虬（この虬は、きう／＼山といふ山を巻いて、一とまわりしたほどすてきに大きな、蚯蚓の化物だつたと云ひます）を退治して、それを埋めた塚でした。つまり、國の「禍」を埋め

その妖僧、嘘雲は、何處へ行つたのか、久しい間その行方をくらましてゐました。恰ど、あの、鎮西八郎爲朝が、金札のついた鶴の行方を、この國へ探しに來た頃からのことでしたが……

古い／＼頃の琉球の人たちは、その嘘雲のゐなくなつたことを、どんなに悦んだことでしょう。「禍が去つた、禍が去つた」と、云つて、皆な、ほつとして、明い心もちになりました。

ところが、國王だけは、どういふ譯か、「國師は、どこへ行かれた。何が氣に適はんで、姿を隠されたのだ」

と、云つて、國民とは、あべこべに、大そう、嘘雲をお慕ひになりました。ひろん、國王は「國師、國師」と、敬つて、非常に、嘘雲を信じて居られたのでした。

嘘雲が行方をくらましてから、國王は、久らく、「阿公」と、いふ、妖婆を信じて居りました。阿公

で、再、禍が、この世に出ないやうにと、樂いた塚でした。

で、その頃の琉球の人たちは、その塚に、手を觸ることさへ怖れてゐました。それが「神聖」だからといふよりも、觸れば、何か、祟がありはしないかと思つて——ところが、その塚を掘崩すといふのですから、大へんでした。皆な、青くなつて、わなわな慄へながら、その塚を掘つてゐました。

すると、しばらく掘つてゐるうちに、はたして、天地が、大地震でも起つたやうに、鳴動して、塚がグラ／＼、動き出しました。多くの人夫どもは、氣絶して、倒れて了ひました。とたんに、塚のなかへ、白い煙が、フワ／＼と立登つて、その煙と一緒に、嘘雲が、煙が、人影が解らないやうに、スートと現はれました。

「オ、嘘雲國師……」

と、國王は、驚きながらも、大そう悦びました。

そして、妖婆の阿公のことを話して、「こんなところに隠れてゐないで、また、以前のやうに、宮殿へ、やッて来てくれ」

と、お頼みになりました。

「ア、さうでしたか。その阿公といふ奴は、わたしの弟子でしたが、不都合なことがあつて、破門した奴です。ナニ、それだからと云つて、この虬塚を發掘く必要はないでしょう。とにかく、今日は、このまゝ、お歸りになるが宜しい。そのうちに、たぶんわたしが、あなたのところへ參らなければならん用が出来るとしよう。その時は、あなたの方から、お招きがなくとも、わたしの方から參ります。この國では、また、わたしが、必要になつて來たやうですから……」

と、云つて、曠雲は、軽く、笑ひました。怪しい鳥でも啼くやうに、變な、鋭い聲で。そして、白い毛虫のやうな眉の下に、蛇の眼のやうに、小さい、



慧しい眼を光らせながら。

國王は、怪しい妖婆がゐなくなつて、曠雲の現はれて來たことを、國に取つて、非常な「幸」だと信じました。そして、御機嫌、うるはしく、宮城へ歸りました。

この頃、國王について、一切、國の政にあづかつてゐた毛鼎國は、武勇がすぐれて、その上「誠實」に奉公の道をつくしてゐる忠臣でした。で、虬塚を發掘くといふことについても、ずいぶん國王に「諫言」をしました。が、とう／＼、聞入れられませんでした。だが「ア、仕方がない」と、云つて、そのまゝ、冷たんにしてゐることは出来ませんでした。

「國王の御身分で、軽々しく、そんなところへお出かけになつて、どんな間違があるかも知れぬ」

と、毛鼎國は、それが、心配でした。そこで、誰にも知らさないやうに、獵師に姿をやつして、國王の後から、一人、虬塚へ出かけて行きました。

すると、塚のなかへら、曠雲が現はれました。

「ア、悪い奴が……」

と、毛鼎國は、ハツとしました。そして、やはり誰にも、氣のつかれないやうなところに隠れて、じつと、曠雲の様子を見てゐました。

「うのれ、討取つて、國の福を擡つてやらう」と、毛鼎國は、さう決心しました。

國王が歸ると、曠雲は、崩しかけた塚の上に、恰も、坐禪を組むやうにして、靜に金の鈴を振つて、何やら咒文を唱へてゐました。咒文は、よく聞取れませんが、金鈴は、りん、りんと、ませんでした。が、鈴蟲が啼いてゐるやうに、爽に、響き渡りました。曠雲は生きてゐるのか、死んでゐるのか解らないやうに、寂でした。眼も、つぶつてゐるやうでした。

毛鼎國は、峻しい山路を傳つて、谷を一ツ渡りました。そして、矢頭をはかる足場を求めて、たゞ一

矢に、嘘雲を射殺して了はうとしました。もちろん半弓の名人と呼ばれた彼には、その「自信」もありました。さうして、間もなく、その身を隠して、拳下がりになり、射下ろすやうな、崖ばなの好い足場を見つけた。

日は、沈みかけました。毛鼎國は、都合よく、その映々しい光を受けました。「欺討のやうにするのは、卑怯だが、嘘雲には、幻術がある。何んでもかまはぬ、國のため、退治さへ丁へば可いのだ」毛鼎國は、自分にさう云ふ申譯をしました。そして、さんざんもんの神、その他の神々に、祈念をこらして、矢をつがひ、さりと引きしぼって、切ッて放さうとした、その刹那……あッ！ 弓は、三ッに折れて飛散り、その身は、はづみを喰ッて、崖をはなれて、真ッ逆さまに落ちて了ひました。恰ど、その時、その崖の真ッ下。こんもりと茂った榕樹の根固に腰をかけて、何かの見取圖といふや

を加へました。嘘雲の鈴の音は、まだ、りん、りんと鳴りひびいてゐました。

二、舜天丸

毛鼎國は、この異國の少年の手厚い介抱を受けて不思議に息を吹返へしました。だが、たゞ、介抱だけで、息を吹返したのではありません。少年は、いへいや鳥の「鶴の仙人」から「丹」の靈藥を授けられて持つてゐたので、それを飲ませて、「活氣」を入れたのでした。

しかし、毛鼎國は、強く胸を打った上に、手足にも、ひどい打撲傷がありました。で、歩くどころでない、起つことも出来ませんでした。そこで、少年は、かるく、と毛鼎國をよぶッて、峻しい山路を、東の方の麓へ下りて行きました。もう、日が暮れて瑠璃のやうに晴れ渡った南國の空には、星が美しく煌いてゐました。

うなものを見ながら、りん、りんと、静に響いて来る鈴の音に耳を傾けてゐる少年がありました。年は、十六七、少し日に焼けてゐても、きつとして隆い鼻、りんとして、涼しい眼、その「輪廓」からして、どツかに、氣高いところがりました。そして、その身なりも、日本の、田舎武士の子でもあるやうに見られました。

少年は、毛鼎國が、つい、鼻の先へ、芋俵のやうになつて、轉げ落ちて来たのを見て、「何んだ」と、軽く、驚いて、まづ、その見取圖のやうなもの、手早く折りたくひで、ふところへ入れながらその正體を見極めました。

「ア、崖を踏みはずしたのか」

と、少年は、ツカノと、毛鼎國のところへ立ちよりました。即死か、氣絶か、毛鼎國は、グタリとなつてゐました。

少年は、毛鼎國を抱きかこして、いろく、手當

すると、どこから現はれたか、忽然と現はれた怪しい獸——牛かと思へば、顔が虎でした。虎かと思へば、體が牛でした。その、すてきに大かい怪獸が、足音を立てないで、しかも、とツ、とツ、とツとツと、飛ぶやうに、少年の後を追ッかけました。二町、一町、半町と、その影のやうな怪獸は、少年に迫りました。

少年は、先きを急いでゐたのと、足音がしないので、少しも、それに、氣が付きませんでした。が、打撲傷に呻いてゐる毛鼎國が、その苦しい神經に、何か後ろから、急々に襲ひかゝつて来るやうに感じました。

「氣をつけて下さい。何んだか、後ろから、ヤツて来るやうです」

と、毛鼎國は、少年に囁きました。少年は、ひよいと振り返る。と、影のやうな怪獸が、もう、十間あまりのところまで迫ッて、さツと

風を起して、飛んで来る——少年は、ハツとして、狼狽しました。兩手は、毛鼎國をぶつて使はれませぬ。逃げれば、踏殺されるか、噛殺されるか。毛鼎國をおろして防げば、毛鼎國の命が危ない。またその暇もない位に怪獸が飛蒐つて来る……らんくたる眼、白い牙。

その瞬間、少年は、猛然として、三足、怪獸にぶつかる勢で進みました。「あッ」と、毛鼎國は、眼をつぶって、「駄目だ！」と、思ひました……とたんに、少年が、「エッ」と、かけた「靈感伏敵」の「氣合——これも「鶴の仙人」が、少年に傳授した「舍身護身」の大秘術でした。

不思議や怪獸は、何かに躓いたやうに、グラリと前に踏みました。そして、前足を折って、ベタベタと、そこに倒れて了ひました。少年は、しばらくく瞬もせずに怪獸を見据えて、恰も、磐石の上に

が、この幻術で、國を亂さうとするのです」と、毛鼎國は、身悶して、あの力の及ばないことを憤がいました。

「ア、さうですか。今の獸が、嘘雲の幻術なんですか。わたくしも、父から、この國に、嘘雲といふ妖僧の



彫刻された人のやうに身動もしませんでした。怪獸は、耳を俛れて、苦しうに、熱い息を喘ぎ出しました。と、その喘ぐ息が、白い息になり、白い息が、白い煙のやうになつて、その煙と一緒に怪しい人の影が、ス——ツと、怪獸を離れて行きました。

「うのれ、嘘雲……」

と、毛鼎國が、少年の背で叫びました。

少年は、ハツとして、「ナニ嘘雲……」

と、息を抜き、體を、くづしました。すると、その僅の隙に、怪獸は、むっくり、起上がつて、三足ほど後退りしたかを見ると、忽ち、兎のやうに飛上がり、くるりと回つて、いはゆる「脱兎の勢」——四足を宙に躍らせて、逃出しました。同時に、そのあたりから湧立った霧が、見る／＼うちに、ひろがつて、そこらぢふが霧の海のやうになりました。

「ア、あいつの幻術です。嘘雲の幻術です。あいつ

る話は聞いてみましたか……」

と、少年は、もう、ケロリとしてゐました。

「さうです。實は、わたくしは、あいつの幻術に、やられたのですが、實に恐るべき奴です。しかし、あなたの畜で、危いところを、のがれました。かさねくの御恩、お禮を申し上げる言葉もありません。あなたは、實に、英雄です。もし、あなたのやうな英雄が、一人でも、わたしの國にゐたらば、あんな妖僧も出なかつたでしょう」

と、毛鼎國は、さう云つて俯きました。

「いえ、しかし、正しい者は、きつと勝ちます。邪魔は、いつか、破れます」

と、云つて、少年は、霧の路を探り、麓の方へ下りかけました。この少年こそ、鎮西八郎爲朝の一人子。八町礫の喜平次に抱かれて、沙魚に乗り、いへいや島に漂着した、舜天丸でした。

毛鼎國は、舜天丸にあふはれて、館へ歸りました。毛鼎國は、獵に行つて、大怪我をしたところを、舜天丸に助けられたのだと云つてゐました。それで、奥方も、長男の「鶴」も、次男の「龜」も、また、家來の者も、大そう、舜天丸を大切にしました。

しかし、舜天丸は、誰にも、その身分を打明けませんでした。また、何んのために、琉球に渡つたかといふことも。

「わたしは、日本の者で、名を舜天丸と云ひます。難船して、いへいや島へ流れついて、それから、とらへ、こつちまで渡つて來るやうになりました」と、たゞ、さう云つてゐました。

が、毛鼎國は、その言葉信じませんでした。「あの、英雄少年が、たゞ、ブラリと、この國へ渡つて來るものか。何か、大きな望があるのだらう。以つとすると、この國の實情を探りに來たのかも知れない

れ

と、さう、疑つて見たりしました。けれども、非常に、舜天丸を尊敬して、異國の「貴公子」として出來るだけの優遇をしました。

もちろん、その頃の琉球は、まだ、日本の琉球ではありませんでした。

それから二三日すると、曠雲が、虬塚から現はれたことが、國民、お互の耳から口へ、口から耳へ傳へられました。そして、毛鼎國が、重い病氣で、中城の館に引籠つてゐるといふことも。

ところへ、赤い、潮が、遠い南の洋から流れて來ました。太陽の光が、赤く艶ずむで、この南方の島から島を照らしました。

悪神、來れり
海潮、清からず。
悪神、來れり
白砂、蟹に化す。

この童謡が、この南方の洋の上に、繩のやうに長くなつてゐる島から島へと、ひろがって行きました。すると、舜天丸が、毛鼎國の館のお客様になつてから、恰ど、七日目のことでした。妖僧、曠雲が、いつ、來たともなく、ひよつくり、國王の前に現はれました。そして、「今、赤い潮が流れて來たり、日がこんなに赤く照らすのは、まことに凶いことです。たぶん、國を護る二ツの珠のうちに、何か、變つたことがあるでしょう。それに、近頃、北の方から、若い異國の者が入込むで來ました。こいつは、この國を盗まうとする大悪人です。はやく、追拂はないと可けません」

と、説きつけました。

そこで、國王は、青くなつて、「はやく、中婦君と寧王女とを呼んで、二ツの珠をあらためよ」と、云つて宮殿内は、頓に大騒になりました。(つづく)



魔法くらべ

高橋里江
岩岡とも枝 登

一、牛に引かれて夜明け迄

「ミゼリと云ふ女の兄が、着物を縫ふのが大へん上手だといふ噂が、バツと御殿中にひろまりました。それを聞いた、王様の侍従は、高い身分も忘れて、自分も、その美しいミゼリに着物を一枚縫つて貰ひたいものだと考へました。で、夜になるのをまつて、誰にも気づかれないやうに、そつと、番小屋を訪ねて、

「ええ、よろしう御座います。すぐで御座いますから、ちよつと御待ち下さいませ」ミゼリはまた、心よくうけあつて、仕事にかゝりました。

「あつ、妾、とんでもない、大事の事を忘れて居ました。ほんとうに、失禮で、すみませんが、ちよつと失禮して出かけさせていただきます……」

「何んだ、そんな事ですか！ わけはありません。私が入れて来てあげませう！」

「なあに、かまふもんですか、すぐ入れて来ませう！」

小牛の尻尾を、掴むだが最後、いくら、もがいても、あばれても、尻尾は、手から離れません。

「何んだ、そんな事ですか！ わけはありません。私が入れて来てあげませう！」

「あら！ 侍従様の義な、御身分の高い方

で、王様に、農園の、鳥番人が、とても、丈夫なシヨベルを持つて居るから、あれを借りてくれば、立派に機織の代りになるであらうと申しあげました。

すぐに、使者が立つて、『王様のところで、御用だから、すぐシヨベルを御用立てる様に』

『妻の母が、どなたにでも、使ひには手渡してはならないと申しました。それですから、王子様が、御自分で御出にならなければ、御貸しする事が出来ません』

と云つて、ことわりました。そこで、イレガン王子は、仕方なしに、花婿様の妻のまゝで、車から降りて、ミゼリの番小屋を訪ねて、『誠にすみませんが、暫らくの間、御貸し下さいませんか』

と、丁寧に頼みました。ミゼリは、そこで、こゝろよく王子に、シヨベルを手渡ししました。

シヨベルは、すぐに、車に結びつけられました。そして、馬車は、通か初めたのですが、十間と進まない中に、今度は、車の心棒が、真二つに折れて、馬車はそのまゝ、また動かなくなつて終ひました。

物置の、戸の所にぶらさげてあつた、ミゼリの家の、門を思ひだしたのは、あの恥知らずの給仕人でした。

給仕人は王様に、『申上げます！ 農園の番小屋に居ります婿が、それは、素晴らしく丈夫な門を持つて居るのを、私が存じて居ります。あれを御取り寄せになれば、立派に、心棒の代りになると存じます！』

と申上げました。王様からは、すぐに、ミゼリの小屋へ使者が立ちました。ミゼリは、また、前と同じ事を云つて、ことわりました。そこで、花婿の王子は、また馬車を降りて自分で小屋を訪ねました。もちろん、ミゼリは、よろこんで、門を王子に手渡ししました。

た。

心棒を取りかへた、馬車は、勢よく馳け出しましたが、二十間と行かない間に、今度は深い、ぬかるみの穴へ、くひ込んで終つて、一寸も動けません。

花婿を乗せた車は、たくましい六匹の馬が引いて居たのですが、いくら、むちをあてても、何うしても、ぬかるみから、引き出す事が出来ません。仕方なしに、いま六匹の馬が、加へられたのですが、それでも車は動きませんでした。

今度は、侍従が、國王に申上げました。『農園に居ります、鳥番の娘が、それはそれは力の強い牛を持つて居ります。あの牛に引かせれば、わけなく動く存じます。』

で、イレガン王子は、もう一度、番小屋へ鳥番人の娘を訪ねて、『度々、すみませんが、車がぬかるみへ、めり込んで終つて、何うしても動けません。何うか、あなたの所の、牛を御貸し下さいませんか』



と、丁寧に頼みました。『はい、でも、妾の所の牛は、まだほんの子供です。王様の馬が、六匹もかゝつて引けない車を、小牛が何うして引けるでせう。』

『さうで御座いますか！ 御役に立ちますか何うですか！ 何うか御連れ下さい』

や否や、ガラ／＼ガラと、烈しい音を立てて走り出しました。車輪は、クル／＼クル／＼、風車の様に、見る／＼中に、動いて居るのか、ゐないのか、別らない位早く廻り廻めて、ぬかるみも、坂も、見さかれないに引つ張つて、とう／＼小山の頂天に立つて居る、教會堂のまんまへ

送、引きあげて行つて終ひました。
なにしろ、小山の麓から、教會堂迄の道には、眞紅な、絨毛氈が敷きつめてあつて、

兩側には、お出迎ひの役人達が、星の標に居並んで、御持ちして居た所へ、めちやくちやな勢ひで、馬車が飛びあがつて来たので、

皆、脇を冷して驚きました。
花婿さんと花嫁さんは、車から、降りたに

は降りましたが、氣狂ひじみた乗物に、すつかり酔つて終つて、眼がまわつて、暫らくは動けなかつた位でした。

間もなく、行列に加つた一行も、到着しましたので、出迎へた御坊さんに従ひて、花嫁さん會堂へ入りました。

無事に、儀式がすむと、一行は、再びお城へ引き返して、盛大な祝宴を張る事になりました。
一、二粒しかやりませんでした。

「あゝ、すつかり忘れて居た。けふの儀式にいろいろ力をかけて呉れた、番小屋の娘を呼ばなければならぬ！ 誰か迎へに行つて来て、家來に云ひつけました。」

そこで、お招待の使ひが、間もなく、鹿園の番小屋へ、差し向けられました。

御客達が、一同大廣間に、集つた時、美しく着装つたミゼリが入つて来て、一番、下手の、丁度若夫婦達と、眞正面に向ひあつた席につきました。が、御客達は誰一人として、これが、鳥番人の娘だと思ふ人がありませんでした。

それ程、ミゼリは美しく、上品で、どの貴婦人達よりも、恐らく、花嫁さんの、玉女目身よりも立派に見えたからでした。

「どなたでせう？」
「さあ、ついぞ見た事のないお嬢様ですが、なんて、綺麗な方なんぞでせう！」
「ほんとうに！」
女の御客達は、怒ち、ミゼリのうわさ

を噂し初めました。
見ると、娘の兩方の肩には、大きいのと小さいのと、二匹の、可愛らしい鳩が、かざりつめた襟に、おとなしく、とまつて居ます。

斯うして、一人残らず席について、用意の食卓が、まさに開かれやうとした時、末席の娘が、突然立ち上つて、三粒の豆を、大卓の上へ、さつと、撒き散らしました。

すると、今迄、おとなしく、娘の肩にとまつて居た二匹の鳩が、豆の後を追つて、テーブルの上へ、飛び降りましたが、大きい方の鳩が、一人で、二粒取つて喰べて終ひました。

と、娘は、美しい聲で、歌ひました。
「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出し

た！」
「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」
飛んで行つて叫びました。
「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

三、要らなくなつた魔法

その歌の調子は、深く、お客様方の心を動かしました。お客様達は、いまさらの涙に、目を見張つて、この、不思議な娘の姿に見入りました。わけても、花婿さんの王子は、おいつと眼をすえて、穴のあく程、娘の顔を見詰めて居ました。

「妙だ！」
イレガンは、獨り言を云ひました。全く、王子には、はつきりとは、分りませんでした。が、なんだか、この人を知つて居る様な氣がしてなりません。

そして、この娘が、今、歌の中で云つた、ミゼリといふ名は、大體自分に、親しい人の名のように、思へて、ならなかつたのでした。

その時、娘は、再び立ち上つて、今度は六粒の豆を、テーブルの上へ撒き散らしました。鳩もまた、娘の肩を離れて、テーブルの上へ舞ひ降りましたが、今度は、大きい方の鳩が一人で、四粒喰べて終つて、小さい鳩には、二粒しかやりませんでした。

娘はまた悲しい調子で、歌ひ初めました。
「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」

「わかつた！ わかつた！ ミゼリ！ ミゼリ！ 有り難う！ 私は何も彼も思ひ出した！」



物を、二度と見る事も、出す事も出来なくなつて終ひました。その後、ある人が、私に、銀の鍵を下さいました。が、私は、偶然な事から、再び元の金の鍵を手にする事が出来たのであります。

私の手には、いま、二つの鍵があります。そこで、私は、今日の御客様方の、御意見を伺ひたいと思ふのであります。何うか、私に御座らない御注告をして頂きたいので御座います。私は、何方の鍵を使ふのが正しいでせうか？金の鍵でせうか？それとも銀の鍵でせうか？」

「金の鍵！」
御招待を受けた、御客様方は、一人残らず聲をそろへて、さう答へました。

「有り難う！よく教へて下さいました。」
王子は續けました。

「皆様の御注告に従つて、私は、只今限りこの祝宴を閉ぢて、王女殿下との婚約を捨てさせていただきます。頂かなければなりません！もち論御注

告を下された皆様には、御座存のない事と存じますが、改めて、私の正面に、肩へ地をとまらせて居られる婦人と、婚禮の式を挙げなければなりません。あの婦人こそ、私の金の鍵だつたので御座います。私が、魔法の國から、歸る事が出来たのも、また、斯うして、皆様と御目にかゝる事の出来るのも、皆この婦人の御座だつたので御座います。たゞ私が、御座いた日、何も彼も忘れて終つただけで御座います！」

王子は、初めから終ひまで、何も彼も思ひ出しました。が、たゞ一つ、不思議でならないのは、御城へ入つて、御父さんと、御話をして居る間に、突然、何うして、あんなに急に、何も彼も忘れ果て、終つたかと思ふ事でした。

「……それが、變でたまらない！」
王子が、考へ乍らいふのを、ミゼリが聞いて云ひました。



「御忘れになりましたか！御別れる時に、妾が云つた事を、御父様に御話して、妾を迎へて来て下さる迄は、だれとも、接吻をなすつてはならないと云つたのを、ね、さうでせう。お母様が、最初になさうとなさいました。その次に、御母様に抱かれて居た、王子様がなさうとなさいました。けれど、二度とも、貴方は、御させになりませんでした。が、三度目に、貴方が、昔の犬だと思つて、御呼びになつた、犬が、貴方に飛びついて、接吻をしたのです。」

「さうだ！確かにさうだつた！」
「あの犬を、誰だと御思ひになりますか？昔の犬ではありません！」
「いま、花嫁の姿をして、貴方の傍に坐つて居る方、王女さまが犬に化けて居らしたのです！」
これで、すつかり、女王様達の、化の皮が脱ぎ捨てられました。

「……それが、變でたまらない！」
王子が、考へ乍らいふのを、ミゼリが聞いて云ひました。

「……それが、變でたまらない！」
王子が、考へ乍らいふのを、ミゼリが聞いて云ひました。

「……それが、變でたまらない！」
王子が、考へ乍らいふのを、ミゼリが聞いて云ひました。

「……それが、變でたまらない！」
王子が、考へ乍らいふのを、ミゼリが聞いて云ひました。

「……それが、變でたまらない！」
王子が、考へ乍らいふのを、ミゼリが聞いて云ひました。

「あら！もう御忘れになつたの？あの牛こそ、私達を、こゝまでつれて来て呉れた、魔法使ひの、種馬ですのよ！」

「あつ！さうだつたのですか！」
で、早速、家來をやつて、小牛を、お城へつれて来ました。すると、ミゼリは、また王子に云ひました。

「御願ひですから、この牛を、今晩、客間へ裏せて下さい。そして、貴方の、一番美しい着物を、牛の側へ置いてやつて下さい！」

王子はその通りにしました。
「とうとう、今度こそ、私達は、一緒に暮らす事が出来るやうになりましたのね。」

そして、今度こそ、ほんとうに、私が魔法の國で習つて来た、魔法も、いらなくなつて終ひましたわ！妾は、もう、あんな事を、知つて居たくありません。何も彼も忘れて終つて、元の人間に歸りたる御座います。何うか、今晩、私の枕元へ、大きな湯槽に水を一杯入れて、持つて来て置いて下さいまし。

そして、私が、何も知らない様に、寝入つて終つたら、そつと、妾を抱へて、さかさまに水の中へ、突込んで頂きたいの。身體がすつかり、入つて終ふ位、それから、引き出して下されば、妾は、もう、何も知らない、人間の娘になつて終ひますわ！魔法の侍女ではなくなつて終ひますわ！」

王子は、何も彼も、ミゼリの云ふ通りにしました。

次の朝、幸福な花嫁と花婿が、手をつないで、客間へ行つて見ますと、昨日の小牛は、居なくなつて、代りに、若い、美しい王子が立つて居ました。そして、その王子の顔が、ミゼリと、少しも異はない位、よく似て居ました。

その管でした。
それは、ミゼリの、ほんとうの弟だつたのでした。

この、王女と王子の姉弟は、小さい時に、魔法使ひにさらわれて行つたのでした。そして、魔法使ひは、この弟に、姉さんが魔法の侍女で居る間は、元の人間に、なる事が出来ないといふ、呪ひをかけて居たのでした。が、ミゼリは、今はもう、魔法の侍女ではなくなつて、美しい王妃になつたので、呪文が破れて、元の王子になる事が出来たのでした。

間もなく、王子は、自分の國へ歸つて、お父さまの、残して行つた王國の政事を操りました。

こちらでは、七日間も續いて、盛大な、祝宴が張られ、お父様が、位を退かれて、王冠を御ゆづりになつてからは、イレガンは立派な國王になつて、長生をしました。

そして、イレガン王と、ミゼリ女王の御話

は、これで御終ひです。
(をはり)

童心句 野口雨情選

群馬 青柳 花明

○腰あけにひとつぶ栗が残つてた

東京 板谷 令子

○いがの中栗の赤ちやんねんねしてる

東京 小林 一路

こほろぎも淋しくなつた黙つてよ

秋田 多賀谷 三郎

大雨が小雨になつて風がふく

秋田 森田 松之助

豆からを焚いたら豆がとび出した

岐阜 土屋 静文

寒い風呂むしろのすそからお月様

秋田 近藤 恭太郎

蜘蛛の巣に蜘蛛がぶらんこぶらんこ

東京 小島 春男

○稲畑かゝしがなゝめに立つてゐる

秋田 保坂 清治

まめかりがたばねてほん／＼なけていく

東京 山田 三津夫

もすがないた方に柿がなつてたよ

神奈川 榎 葉津子

○青空よ青いな青いなどこまでも(賞)

神奈川 中里 業行

一ツ星ほろりほろりと泣いてるよ

埼玉 香山 落陽

お月様笠着て空で何してる

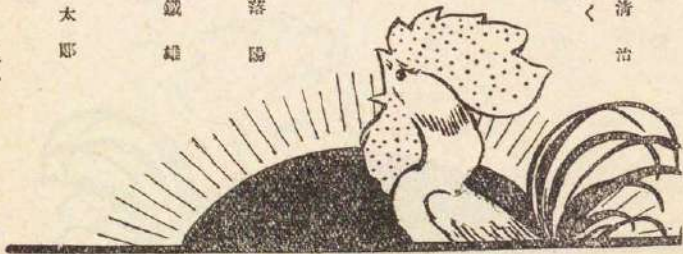
秋田 今野 鐵雄

○にはとりがのき下に居て死んで居た

東京 河合 英太郎

評、ゆふべはひどく寒かつた。

どんぐりの落ちたの誰も知らないよ



茨城 内田みわ路
屋根の草ちゆんちゆん雀がまた種
秋の雨破け風船真赤だな

兵庫 朝比奈 豊
山向ふ畫のお月さん背のびした

東京 篠崎 雀 聲
畫御飯たべにとんびも歸つてく

大阪 中村 正義
ホィ〜と鼻かこはそにねむたそに
評、正ちゃんもこはそにねむたそに

東京 鯨井 卯太郎
海原にわく〜雲のかすいくつ

静奈川 北原まさな
寒いのに子星泳ぐか天の川

宮城 水澤 末子
くもの子が壁の間でねんねする
枯草やこぼろぎぼろ〜つゆぼろ、

千葉 鈴木 晋五郎
先生になかなかいらいとほめられた

東京 富田 君子
驛の前夕刊賣に空ッ風

東京 入口 一雄
〇おゆうやのけむりも長くきえにけり
評、とうふやのワッパも長く消えにけり。

京都 西浦 孝一
近よつてとんびが風と話してる

東京 山田 次郎
引越して喧嘩した子がなつかしい

東京 醍醐 正明
水たまり蜻蛉がしまをかいて行く

山梨 芳野 卓
竹がきに来てひるねするあかとんほ

東京 宗木 街三郎
父さんがあたいのほうしをかぶつてゐる

千葉 瀧田 望月
〇夕やけの火の子のやうな赤とんほ
評、あさからあとからこんできた。

福岡 武田 栄一
菊咲いた垣根に張板たてゝある

大阪 菊地 孝
すゝきからうさぎが月をながめてる

京都 遠谷 幸子
チカチカとお星さん空の紙のよだ

東京 大竹 孝
〇三月月さんはバナ、のやうだおいしそだ
評、ふくろも食べたそにないてゐる。

東京 増田 梅吉
このこと仔牛のおめざめおめざめだ

新潟 佐藤 喬平
お月さんは雲のふとんでねんねです

福島 小林 絳次
コスモスがゆれてとんほが困つてる

新潟 小林 秀雄
いちようの葉小鳥の様に落ちてくる

愛知 鈴田 儉三
〇還足や母に見せたきけしきかな(賞)
評、鈴田さん親孝行ですれ。

東京 土屋 寛
子山羊でもお爺さんだよ髭がある

名古屋 田中 秋夜詩
今の人死んだ母あさに好くにてた

東京 狩野 忠信
稲の穂は泥のふとんにねかされた

千葉 大川 政雄
きい〜ともす寒い朝竹山で

東京 小林 一路
村々の国旗ひら〜お正月

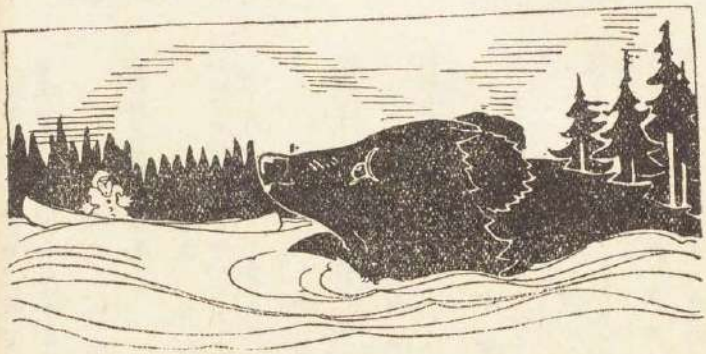


ナイヤガラの冒険

ばうけん

立石美和

岡本歸一畫



一、最初の一聲

ある、暖かい日のお午すぎでした。
米國のナイヤガラ河——御存じでせう。
あの有名な、ナイヤガラ瀑布のある河です。
その瀑布から、ちようど二里ばかり河上にあたる所で、一人の漁師が
岸の近くへ碇を下して、魚を捕つて居ました。
魚を捕ると云つただけでは、はつきり判りませんが、この、流れの早
い大河では、投網を打つたり、糸をたらしたり、日本の漁師がするやう

な、やさしい仕事では駄目らしいのです。

この漁師のやり方は、するどい、長い柄のついた
鉤をふるつて、チラリと姿を見せた魚を、ザクリと
突きさすのでした。

それで、鯛子のいゝ日には、三尺も四尺もある大
鯨を、五ひきも、六ひきも突きさすといふから、ご
うぎではありませんか。

ところが、けふは何ういふものか、一向魚が姿を
見せません。商買とは云ひ乍ら、漁師もすつかり、
飽き／＼して終ひました。

それで、何気なく眼をそらして、向ふの方を見ま
すと、オヤ……不思議な事もあるものです——河の
中程を、一匹の大きな熊が、いかにもだるさうに、
もう泳ぐ力も弱つて、今にも沈みさうな格好をして
あつぷ、あつぷ泳いで行くのが見えます。

「熊？」

漁師は、變な氣がして、暫らく、小手をかざして

見とれて居ました。

併し、見る／＼漁師の眼は輝き初めました。

「面白い！ ようし！」

漁師は、腹の中で叫びました。そして、すぐに碇
をあげると、せつせと櫓をこいで、熊の後を追つか
け初めました。

なる程、ナイヤガラの漁師たちは、急流の中を泳
ぎ廻る魚を、突きささうといふ連中です。

その事を思へば、溺れかけて居る、ノロマの熊を
突く位は、なんでもないと思つたに異ひありません。
そればかりではない。大きな熊一匹の値段は、何
百ひきの魚にもまゝつてゐます。

「占めた！ やつつけてやらう！」

元氣な、冒險好きな漁師が、すぐさう思つたのも
無理がありません。

船は、熊の後を追つて、スイ、スイと波を切つて
進みます。そして、間もなく、二十間ばかりの所を

で追ひつきました。

すると、何んと思つたのか、今まで、向ふを向いて泳いで居た熊が、急に、グルリと向きをかへて、漁師の小船を目がけて、グン／＼泳ぎ寄つて來ました。

「をーッ！ おあつらへ向きだ！」

さう叫んで、漁師は櫂をすすると、素早く銚を取りあげて、ねらひを定めて待ち受けました。

いよ／＼すぐ前まで泳いで來た時、

「エイッ！」

漁師は、叫んで、熊の眉間を突き徹しました。イヤ、突き徹さうとしたのです。が、何んといふ意外な事です。その瞬間、熊は右手をあげて、パツと銚を横にはじきました。

その早さ、そしてまた、その力の強い事、銚は、ボーンとはじかれて、漁師の手からはづれると、五六間も先の方へ飛んで行つて終ひました。

くらぶつてもたゞいでも、痛いどころか、何處を風がふくかといふ様な、平氣な顔をして、ざぐり、ざぐり／＼と船べりへ爪を立て、おそいけれども、確實に、とう／＼、船の中へ上り込んで終ひました。最早も終ひだ。さすがの漁師も、何うしていか手出も出來ずに、呆然として居ますと、これはまた何んといふ意外な事です。

船の舳の方へ上り込んだ熊が、まるで、馴れ切つた飼犬の様に、温なしくまあるくなつて寝そべつて終ひました。

ホツと安心したのと、餘りの意外さに、漁師は、暫らく、坐り込んだ切り、身動きもせず、ぢつとして居ました。

その時、漁師はまた別の事を思ひつきました。それは——きつと熊は、助けて貰ふつもりで、こんなに温なしくして居るのに異ひない。丁度幸ひだからこのまゝ岸へ漕いで行つて、一つ熊公を生捕つてや

「あッ！」

手がしびれて、思はずしりもちをつくはつとして、立ち上つた時には、漁師のたゞ一つの武器である銚は、急流にさらはれて、ずうつと河下へ流れて行つて終ひました。

漁師は、突差の間に、作戦方法を立て直しました。それは、熊が船へ近づけば、櫂でなぐり飛ばして近寄らさないし、長い間、おらして、熊が水を飲んで、へト／＼に弱つた所でやつつけて終ふといふ考へでした。

が、一分の間もありません。

御覽なさい！熊は、今の敵を打つてやるぞと云はないばかりの勢ひで、荒々しい爪を連立てし、ザグリと船べりへ手をかけて居ます。船がかしく……。漁師は、櫂を取りあげました。カ一杯、何度も何度も、熊の頭を殴りつけました。

だが、あされた事には、熊は平氣の平左です。い

らう、——さういふうまい考、なんです。

見ると、熊は、さも／＼満足したやうに、やさしい上眼使ひで、ちいつと漁師の顔を見て居ます。漁師はいよ／＼決心して、立ち上ると、櫂を取りあげて、一生懸命に漕ぎ初めました。

が、これは、飛んでもない思ひ異ひだつたのです。櫂を一押し押して、船が揺れると同時に、舳の方で『ウ、ウ、』といふ、物凄いうなり聲が起りました。

漁師は思はず手を休めて、熊の方を見ました。熊は、不安さうな顔付で、ちいつと、漁師の手つきを見て居ます。

また一押し。

熊は、さつきよりも猛烈な聲でうなりました。ぐつと頭をもたげて、も一度漕いだら、飛びついて來るに異ひない容子をして居ます。

漁師は、困り切つて、仕方なしに、櫂をすて、其處へ坐り込みました。そして、額を汗をふいて居

ると、遠くの方から、ゴーツといふ、物凄い瀧の音が聞えて来ました。いつの間にか、船がずいぶん分河下の方まで流されて、



あのナイヤガラ瀑布の、水の音が聞える所で来て居たのでした。

漁師は思はず飛び上つて、「助けて呉れえ！」

と、ありつただけの聲で叫びました。が、それと同時に、熊もまた「ウオー」と、氣味の悪いうなり聲を立てました。

「助けて……」云ひかけた時、熊はまた猛然として、襲ひかゝるやうな容子をして、前より一層恐ろしいうなり聲を立てました。

「駄目だ！」

漁師はがつかりして、また坐り込んで終ひました。すると、熊も安心した様に温なしくなるのでした。

だが、瀑布の音は次第に近づいて来ました。水の流れば、一刻々に早さをまして来ました。その水の上を、漂々として押し流されて行く小船の



上に、大馬鹿者の熊公と對ひあつて、聲を立てる事も、權を取る事も出来ずに、おつと坐つて居なければならぬ、漁師の氣持ちは何んなだつたでせう。運命——。やがて、世界一の瀑布に巻き込まれてこなみぢんになるに異ひない運命も、わかつて居るのは漁師だけで、のんき者の熊公は、知らないのか

それとも知つて居ても平氣なのか、キョトンとして坐り込んで居るではありませんか！

が、幸せな事には、「助けて呉れ」と叫んだ、漁師の最初の一聲が、仲間の耳へ入つたのでした。仲間達は、すぐ後を追つて来ました。

後ろから一發、ズドンと撃つたねらひ打ちに、熊は、躍り上つて、水の中へ飛び込んで終ひました。ついでに二發、三發！ あやふく沈んで、押し流されやうとする熊の首へ、仲間の一人が、投網をかけて終ひました。

そして、助かる筈のない、生命を助かつた漁師と、頭を打ち抜かれた、大熊の死體は、間もなく岸へ引きあげられたのでした。

二、苦闘十八時間

ナイヤガラの上流に、大きな釣橋があります。



今から七十年前の朝、そのつり橋の上、兩側の岸に、黒山のやうに群つた人達が「ワー、ワー」と云つて騒ぎ初めました。見ると

六八
瀬のやうに、えらい勢いで流れる大河の真中を、ボカリ、ボカリ、浮きつ沈みつする大きな丸太に、一人の男が、しがみついて流れて行くのでした。人々は、すぐに、その可哀さうな男を助けようと相談を決めました。

第一の仕事。それは、可哀さうな男に、元氣をつけてやる事でした。

で、人々は、大急ぎで、大きな看板のやうなものを造らへて、

「すぐ助けに行く」

と、一目で判るやうに、大きな字で書いて見せました。

男は、うれしさうに、片手を舉げて應へました。

人々は、すぐに、船と綱の用意にかゝりました。

これは、後で、いろ／＼調べた上で判つた事です。が、その可哀さうな男は、ずつと、河上の方に住んで居る、アペリイといふ名の人だったのでした。

前の晩、アペリイは小船に乗つて、ナイヤガラ河の上流を渡らうとしました。が、河の中程まで漕いで来た時、えらい勢いで流れて来た、大丸太と衝突して、また／＼間に小船が沈没して終つたらしいのです。

幸せな事に、アペリイは、河で育つた、勇敢な男だつたので、突差の間に、その丸太にしがみついてそのまゝ、今朝、つり橋の近くで、大勢の人達に発見されるまで、流れて居たのでした。

第一番目の船が、岸から手繰り出す綱を引いて、走り出した。

船が走り出したと云つても、人が乗つて居て、漕いだり、梶を取つたりして居ると思ひ異ひをしてはいけません。

この激流の只中へ、何うして人間なんか乗り出せるものですか。それでは、わざと、死に行くやうな

ものです。丁度、子供が空へ紙凧をあげるやうに、人々は、綱をつけた空の小船を、河下へ押し流して居るのです。

併し失敗。間もなく船は横にあほられて、沈んで終ひました。

第二番目の船が押し流されました。

その船は、うまく丸太に追ひつきませんでした。

併し、運の悪い時といふものは、仕方のないものです。ドカンと丸太に衝突して、アツといふ間に沈んで終ひました。

第三番目の船です。

今度は何うやら、うまく行きました。

船と丸太が、すれ／＼に、うまく並んで流れ初めたのでした。

アペリイは、手を伸して、船に取つけた綱を、しつかりと握りました。そして、その綱を、いくらかたるまして、自分の丸太へまさつつけようと思いました。

併し、それは駄目です。あの小さい紙風でさへ、風をふくんで、ビューンと舞ひ上る時には、長い糸が針金のやうに強く張れるではありませんか。まして、恐ろしい急流の上を、綱さへなければ、飛ぶやうに流れて行かうとする船を、さへて居る綱が、人間一人の力で、一尺だつてたるませられる筈がありません。

仕方なしに、アベリイは、確つかりと、綱を掴まへて居ました。

流れは、船と丸太にさへぎられて、白い波を立てゝ怒つて居ます。

人間の死者狂ひ。それはえらいものです。

アベリイは、さうしたまゝ、一時間ばかりも、丸太の流れるのを喰ひとめて居ました。

併し、結局、人間の力には限りがあります。

疲れ果て、もう何うにも、仕様がないうやうに見えた時、岸の人々が、餘り強く、餘り急に綱を引き

てゝから、今の今まで失敗に失敗を重ねながら、人々は、まるで、戦場の様な活動を續けなければならなかつたのです。

「今度こそ大丈夫だ！」

人々は、皆さう思ひました。

元氣づいた人達は、力を合せて、静かに綱を引つ張り乍ら、流れにそよて、河岸を、下の方へ歩き初めました。

筏は、急流に逆らひ乍ら、流され、少しづつ、岸の方へ近づいて來ました。

「もう占めたものだ！」

皆、さう思ひました。

が、さうではなかつたのです。その時、意地悪く凸凹の頭を、急流の中へ突き出して居る岩礁へ、大事の綱が、からみついて終つたのです。

駄目です。駄目です。手繰つて見ても、ゆるめて見ても、遠く離れた河岸からでは、もう何うする事

すぎた爲かも知れません。綱はブツリと切れて、小船は丸太を残して、軽々と、走る様に流れて行つて終ひました。

第四番目の船？ いや、もう船は駄目だ！

人々は大急ぎで、急造らへの筏を造らへました。有合せの板を組み合せた四角の筏。そしてその、隅々々に、大きな樽を一つづつ、結びつけて、その四つの空樽には、また別々に、細い綱を結びつけて、流すのでした。

これは、筏が丸太に追ひついた時、アベリイが、どれでも、一番近い樽に飛びついて、そして、その樽へ、自分の身體を結びつけるやうにしたのです。筏が近づきました。

アベリイは、うまく筏へ飛び乗りました。そして素早く一つの樽へ自分をゆはへつけて終ひました。

——その時、岸の人達は、初めてホッと吐呼吸をつきました。その筈です。「助けに行く」の看板を立



も出来ませんでした。

しかも、其處は、一入の激流で、河水は、渦を捲いて、泡をふいて流れ狂ふて居ます。二分、三分、間もなく綱がボツリと切れて終ふに異ひありません

一刻の餘裕もない！

人々は、急いで、第四の船を流しました。

船が、近づいた時、身體が、もうすっかり疲れ果て、弱り切つて居るくせに、興奮して、氣ばかり荒々しくなつて居るアベリイは、夢中で綱を解いて、船の方へ馳け寄つて行きました。筏の端まで行つた時です。急に片一方が重くなつたので、筏がぐつと傾げました。すべつたのでせう。その瞬間、アベリイは、ざんぶと急流の中へ身を躍らせました。

ああ、けれど、不思議なのは、命をかけた人間の力で、御覧なさい！ その激流の中で、一尺——二尺、アベリイは、抜き手を切つて船の方へ泳ぎ寄つて行くではありませんか！

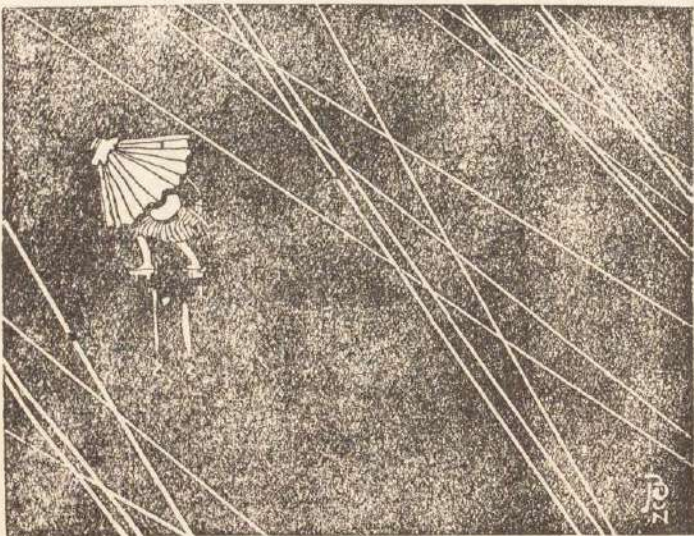
「ウム、未だ大丈夫だ」

人々は呼吸苦しい吐いきの底で、さう思ひました。やがて、アベリイは、さつと、右手をあげて、船邊を掴まうとしました。

けれど、運命の神様は、一寸の空間にも、立ちはだかる事が出来ると見えます。ほんの、ほんの一寸か、ちがつても一寸二分か三分の異ひで、アベリイの手は、船邊へ届かず空を掴んで終つたのです。

「あッ!!」

人々が叫んで見直した時、スウ——イツと七八間矢のやうな早さで押し流される、アベリイの姿が見えたかと思ふと、あとはそのまゝ、急流に吞れて二度と氣の毒な人の姿を見る事が出来ませんでした。前の晩——丸太にかがりついて、今激流にのまれる迄、考へて見れば、十八時間もの長い間、この人は結局効のない努力を續けて居たのでした。可哀想なアベリイ！



河原の大坊主

榎山千代

平澤文吉畫

去年死んだお隣のお爺さんのお話をしませう。だが、これは夜讀んではいけませんよ。晝間、お母さんだの、お兄さんだの、あつしやるところで讀んで下さい。でないと、恐しくて氣絶するといけませんからね。

今は晝ですか？ ほうら！ あなたの後に幽霊が……と云つたところで、ちつともこはくはないでせう？ さあ！ それなら大丈夫、いよ／＼お爺さんの

お話にかゝりませう。と云つて、お爺さんが死んで幽霊になつたわけではないんですよ。お爺さんは、あんまり大膽で幽霊ばかり見て歩いたために、すっかり後に臆病になつてしまつたのです。で、私はこれから、お爺さんが、どんな幽霊を見たか、どうして臆病者になつたかのお話をいたしませう。

お爺さんの名を貞吉と云ひました。貞吉は小さい時、寺小屋に通つて學問を習つてをりました。學問はよく出来ましたけれども、餓鬼大將でしたので、友達には、妬まれたり、憎まれたりして居りました。その日も貞吉は、大勢の子供達を相手に喧嘩をして負かせてしまひました。子供達は、どうかして、この不敵な貞吉を困らせてやらうと思つて居りました。

「あゝ貞吉！ 夜中に河原へ行けるかい？」

一人の子供が良いことを考へついたといふやうに云ひました。寺小屋のある隣町へ行く近道の河原に

「ようし！ きつと行つてやる。行つてやるとも、そして大坊主の正體をたしかめて来てやる。事によつたら、一刀のもとに退治してやらう！」

貞吉は元氣をふるひおこすやうに心の中で叫びました。が、さすがにおそろしい今夜のことを考へると、まるで熱でもあるやうに、體が熱くなつたり寒くなつたりしました。

夜になりました。十時になると、家の人達はみんな寝しづまつてしまひました。十二時近くになると、今まで眠つたまねをしてゐた貞吉は、ムツクリと起き上りました。そして、刀を腰にさすと、そつと家をぬけ出しました。青白い月が、サツと貞吉の全身に降りかゝつて來ました。

貞吉は河原の方へ眞直に歩いて行きました。バサツ・バサツ・／＼と、草履の足音が追つて來ます。やがて貞吉は河原の入口に來ました。その時、貞吉の目の前に、突然眞黒な影が三つ、松林の間か

は、昔から夜中に、大坊主の化物が出ると云つて、夜になると誰一人通る者もありません。

「さうだ、河原へ行けるかい？ あゝ！ 行けないだらう！ 偉らければ行つてみる！」

「やアーい！ 弱虫やアーい！」

子供達は、口々に囁きたてました。今迄じつと黙つて考へ込んでゐた貞吉は、カツとして云ひました。

「誰が行けないと云つた！」

「そんなら行つてみる！」

「うん、行くとも！」

「きつとだな？」

「きつとだとも……」

「今晚だぞ！ 十二時だぞ？」

「いゝとも……」

そこで貞吉は、大人も通らないその河原へ、夜の十二時に行かなければならない破目になつてしまひました。

らヌツと出て來ました。ハツとして身がまへすると

「貞吉か？」

「う、三次だな？」

「うん、正と、市と、俺だ。きつと行つて來るんだぞ、これを町の入口へ立て、引かへして來い！」

さう云つて、三次は一本の竹の棒を差出しました。

「よし來た！」

貞吉はそれをうけとると、悠々として河原にはいつて行きました。

二

貞吉は、鼻の穴にしみ通るやうな冷たい風と、更けるにしたがつて、次第に明るく汗まで來る月光とを正面にうけながら歩いて行きました。

左手には竹籜があり、しげみがあり、松林があり、青白い砂地のむかふには、帯のやうな川が流れて、さゝ波が時々、人魂のやうに、キラ／＼と、青い光

を放つては消えてゐます。

「さあ、来るなら来い！」

貞吉は、走りたいのをやつと我慢して、大坊主が出て来るといふ左手の竹藪などのある方にそふて河原を歩いて行きました。町の入口まで、近いと云つても五丁です。十間、二十間、三十間、一丁、二丁、廣々とした河原には、犬の子一匹通りません。今は風さへ止んでゐます。まるで、死んだやうな静かさです。ゾク／＼と、身にしむやうな寒さと淋しさが迫つて来ます。虫一匹居さうでもありません。生き物が、こんなにもゐないといふ事は、かへつて不氣味です。一その事、大坊主が出て来てくれた方が、まだ、賑やかでいゝやうな氣さへするのです。『早く出て来んか？ 俺は怖がりではないんだぞ、事によつたら、大坊主と大いに談笑してやらう！』三丁四丁、やつぱり何一つ出て来ません。たうとう町の入口にまで来てしまひました。

「なんだ！ むやしないぢやないか？」

貞吉は張合ぬけがしてしまひました。貞吉は、持つて来た竹を砂地に立てました。そして、引かへさうと思つて後をむいた時でした。

サーツと強い風が吹いて来て死人の手のやうに冷たく貞吉の頬をなでました。と、ザワ／＼／＼！と、竹藪が波を打つたと思ふ間もなく、貞吉の目の前の砂地に、一丈もあらうかと思はれるほどの大きな真黒な影がうつりましました。

「アツ！」

貞吉はもう夢中でした。後をふりかへるところではありません。一目散に逃げ出しました。大坊主の影はどこまでもどこまでも追つて来ます。スタスタスタスタと足音をたてながら……

貞吉は、どう河原を通りすぎたか、自分の家にとどりつたか、そして、門を開け、しめ、兩戸をこぢあけて自分の部屋にとび込んだか、一切、さばへ

てきましました。

「出たとも……」

「大きかつたか？」

「大きいにもなんにも一丈もあつた」

「ふん、どんな恰好してた」

三

がありませんでした。氣がついた時には、貞吉は、まるでコンニャクのお化のやうに、ブル／＼、ブル／＼とどめどもなくふるへながら、ヒューヒュー息を切らして、刀をさしたまゝ、寢床の中にもぐり込んで居りました。

「どうだ、出たかい大坊主は！」

次の日寺小屋へ行くと、子供達は貞吉を取りま



「よく見えなかつたが、何でも人間と同じ恰好をしてたやうだ」

「話をしたか？」

ROZ

「話さない、黙つて俺の後からついて来ただけだ」
貞吉は平氣さうに云ひましたが、ふと、今でも後
に大坊主が立つてゐるやうな氣がしてブルブルッ！
としました。

「偉い！貞吉は俺達の大將として尊敬するに足る」
皆は口を極めて貞吉の勇氣をほめた、へました。
けれども、その中に敬一といふ意地悪の子がありま
した。敬一は、中々そんな事で貞吉の手下にならう
と云ひません。

「何だ、ゆふべは月夜ぢやなかつたか？ 月夜に大
坊主の恰好がはつきり分らぬ筈があるものか？ 怖
くて見られなかつたんだらう？ そんなことぢや、
俺達の大將になるわけにやいかん！ 化け物に雨は
つきものだ、雨の日に提灯をもつて行つてよく見と
どけて来い」

敬一がさう云ふと、他の子供達は、やんやと云つ
て、これに賛成しました。

ちてしまひます。

「ようし！ 死んで歸るつもりで行つてやれ！」 貞
吉は竹をうけとると、ギユツと、お腹に力を入れて
河原にはいつて行きました。ザッ！ ザッ！ ザア
ーッ！ ザッ！ 雨は強くなつたり弱くなつたり、
時々吹いて来る風に、唐傘は軽くなつたり重くなつ
たり、まるで、上から幽霊がのしかつたり、持ち
上げたりしてゐるやうです。

三丁、四丁、たうとう、町の入口のところへ來ま
した。貞吉の竹を打ち込む手はふるへて居りました。
引かへさうとすると、今にも、あの大坊主があらは
れさうな氣がしたのでした。

「弱虫！ 何をビク／＼するのだ。俺は苟も武士
の子ぢやないか！」

貞吉は自分を叱つて思ひ切つて引かへしました。
一步、二歩！ けれども大坊主は出て來させん。
一丁も行つた時でした。サーッ！ と横なぐりに

七八
さあ、貞吉は困つてしまひました。月夜でさへあ
んなに恐ろしかつたのに、まして雨の夜に…… 貞吉
は思ひ切つて降参しやうかとも思ひましたが、そこ
が負けず嫌ひの貞吉です。たうとう「いゝとも、何
時でも行つてやる」と答へてしまひました。

四

それはボンボンと霰雨の降つてゐる夜でありまし
た。貞吉は、提灯と唐傘をもつて、しほしほと家を
ぬけ出しました。それこそ眞の闇、赤黄い提灯の火
が、ボンヤリと丸く足許を照らして、霰が斜に光を
よぎつては、土に消えて行きます。河原の入口に來
ると、また、提灯が三つ貞吉を待つて居りました。

「よく來た、さア、これをもつて行つて立て、來い」
さう云つて、敬一が竹をさし出しました。貞吉は
思ひ切つて今、斷らうかと思ひましたが、そんな事
をしたなら、それこそ、明日から貞吉の威勢は地に

強い風が吹いて來たかと思ふ途端、スーッと提灯の
火が消えてしまひました。

闇、闇、闇、風！ 雨！

貞吉は化石のやうに立ちすくんでしまひました。
が、かうしてゐるわけには行きません。

「来るなら來い！ 来るなら來い！」

貞吉は一生懸命に心に叫びました。そして、しや
がんで火をつけようと思ひましたが、風でどうしても
つきません。

「まゝよ、俺は武士の子だ、提灯なしで夜道が歩け
ないでどうする？」

貞吉は勇氣をふるひおこして歩きはじめました。
目になれると、ほんのりと白く、砂地が見えて來ま
した。大坊主は出て來させん。貞吉は、だん／＼、
膽つ玉がすはつて來ました。

「今日はおそいな？ さあ來い！」

けれどもやつぱり大坊主は出て來させん。たうと

う、真吉は村の出口まで来てしまひました。

五

居れば怖い、ゐなければやつぱり物足りない、あれほど決心して雨の中を出かけたのと思ふと、真吉はあきらめられませんでした。次の日も真吉は雨の中を河原に行きました。けれどもやつぱり出て来ません。それから真吉は、毎晩々々河原に行きました。しかし、どうしたのか、大坊主は、あの晩以来どうしても出て来ないのでした。

それは久しぶりの月夜でした。真吉は、今日こそと思つて出かけて行きました。けれども、やつぱり行きには何事もありません。がつかりして、引かへした時でした。

「アッ！」

真吉は思はず叫びました。あの一文餘りもある大坊主の影が……

「ヤッ！」
真吉は電光のやうな早さで振りかへりざま刀をぬいて斬りつけました。けれども、大坊主は何處へ逃げたのか、刀は空しく空気を切つただけで何者の姿もありません。

「畜生！」

真吉は口惜しさうに唇をかみしめながら引かへさうとすると、また大きな影が……

「うぬ！」

が、刀はやつぱり空をきるのみ、大坊主は何處にもありません。けれども、歩さはじめると、また、影が……

「はて？」

真吉はじつと立ち止つて、後の大坊主の氣配をうかゞひました。別に大坊主はとびかゝつて来ようともしません。「どうも分らん」真吉は呟いて、チヨン鬚の頭に手をあげて首をかしげました。と突然真吉

は、「ワツハツハ、」と腹を抱えて笑ひ出しました。大坊主の影が真吉がするやうに、やつぱり大きな頭に手を上げて腹を抱えて、體をゆすつてゐるのです。

「さあ、これで皆さんも、真吉の見た大坊主の正態が何であつたかわかりになりましたでせう？」

「大坊主の出るのは月夜にかぎるぜ。月を後にしてみなさや出やしない」

真吉はさう云つてみんなにその譯を話して大笑ひしました。それからは、大人も子供も、少しも怖がらずに、町へ行くには近道の河原を通つて行くやうになりました。

「幽霊なんていふものは決してゐるものぢやない」
真吉はその時から思ふやうになりました。そしてお化屋敷だの、古寺だのと、幽霊が出るとさへさへ



すれば、正態をたしかめに出かけて行くやうになりました。

が、この真吉が、幽霊のゆの字をきいても真背になるほどの臆病者になつたのはどうしても正態のわから

ない本物の幽霊だと思ふものを見てからだといふことはいふまでもありません。臺灣坊主のお化だの、舟幽霊だの真吉が見た澤山の幽霊話はこの次に。



童謡

野口雨情選

(大人篇)

むくげ

宏 文 (大阪)

お寺のむくげは
赤い花
こぼれてとんぼが
とんでゐた
山の夕陽は
なぜ赤い

子供がならんで
ながめてた

母なし子

鈴木 敏夫 (愛知)

母なし子供は
誰とねる
空のお月と
窓でねる
母なし子供は
何でねる
島の虫の
唄でねる

からす瓜

内田みわ路 (茨城)

藪に眞赤な

からす瓜
鳥が食べる
瓜だとさ

一つ私には

とりたいな

ひびの薬に

なるだとさ

蔓にさわれば

ゆうらゆら

どこかで鳥が

見てるかな

いなご

山田三津夫 (東京)

いなごのおひるね
たんぼ道

仔牛にあんよを
よまれるな
ビヨンビヨンお逃げな
稲のなか

雑木林

狩野 忠信 (東京)

川越 向ふは

雑木山

中に入つて

栗取りだ

雑木林は

赤々と

栗は日に焼く

黒奴だ

雁

根岸 啓 (茨城)

雁が渡つて
行きました
月夜の晩です
夜中です
子供がねぼけた
夜更です
雁が渡つて
行きました
こんこんと山の
山の上
ならんで啼いて
行きました

若穂

木本 一郎 (大分)

こいこい招く
稲の穂 田の穂

こいこい招く

青い穂 若穂

新道朝は

揺れ穂でひやり

青い空

篠原真砂雄 (神奈川)

はるかなはるかな
青い空
夕焼忘れた
青い空
鐘がなつても
青い空
すいきの

伸びても

青い空

いつまで青いの

青い空

からす瓜



ちごく花

大島 秀夫 (愛知)

赤いちごく花

地獄から根が出て
掘つても掘つても
根が出て
地獄から根が出て
赤いちごく花
赤い〜地獄花
地獄のかまどから
根が出て

朝鮮晴れ

河野 牧草 (京城)

今日も朝から
朝鮮晴れだ
お庭にほした
とうがらし
まつ赤だ
まつ赤だ

このころ毎日
朝鮮晴れた
からりと晴れた
秋の空
まつ青だ
まつ青だ

鐘つきとんぼ

宮田 晴良 (美城)

もうひるころだ
鐘をつけ
かわつきとんぼ
鐘をつけ
だんだら畑じや
お百姓さん
おひるも知らずに
草むしり

河瀬

西岡 水朗 (長崎)

ちろ ちろ
河瀬は
蘆のかけ
とほくに
ちんもり
一軒家

ころ ころ

河瀬に
鳴く河鹿
あひとり
星さま
ほーいほい

子狐

篠崎 雀聲 (東京)

小山の小山の
子狐は
こんこん月夜に
ないてゐた
生れたばかりで
子狐は
乳がほしいと
ないてゐた

雁の子

水科 なか (東京)

雁が行きます

八四
月の夜に
父さん母さんに
つれられて
島のお國に
歸ります
たすきになつて
大空を
月夜の路を
迷はずに
山茶花
山茶花
青柳 花明 (群馬)

實がまだ 青い

山茶花 咲いた
紅い花 咲いた

今年の 冬は

山まで 来たぞ

山茶花 咲いた

綺麗に 咲いた

いつもの やうに
かはらず 咲いた

夕ぐれの秋

矢田 篤三 (大分)

ごみ焼くけむりか
日がくれて
一めん流れた

白いけむ

空には
月があると見え
ぼろと明るい
森や海

父さんかへりか

川ばたで

牛に水やる

音がする

雨の音

澤波 吉彦 (山形)

雨の降る日の蛇の目傘
誰かがよんでる
ポットリコ
雨の降る日のふみ石に

誰がくるのか
ポットリコ



かゞし

小林 直次 (愛知)

かゞし鎌もち
いつまで立つた
稲が花咲き

穂に出るまでか
かゞし鎌もち

いつまで立つた
稲がかられて

霜降るまでか

眞赤つか

川島 秀雄 (東京)

夕やけ小やけが

眞赤つか

お山のもみぢも

眞赤つか

熟れてる柿も

眞赤つか

空の雲さへ

眞赤つか

みんな夕やけ

眞赤つか



一郎さんの知らない話 (推薦)

小 牧 昌 徳

岩 岡 と も 枝 齋

八六

夜がふけました。晝の間働いて疲れた者は、みんなぐつすり深い眠りに落ちました。

一郎さんのお家でも、お父さんもお母さんも、静かに寝入つてをられます。一郎さんはお姉さまと一緒に、仲よくスヤ／＼と安らかな寝息を立てゝゐます。

一郎さんのお家の食堂には、誰か置いて行つたのか、赤い／＼葡萄酒の入つた小さなコップがテーブルの上に置かれてあります。暗いお部屋の中に、真

白いテーブル掛けが際立つて見えます。この暗い暗い、一郎さんがゐたら怖い／＼と言ふに違ひない淋しい夜更に、眼を覺してゐるのは、小猫の玉と、おいたの好きな小鼠と、通る人ごとく吠えるボチと、大きな眼を持つた氣味の悪い鳴き聲をする森の中のふくろ位なものでせう。

お月さんが何時の間にか出たのでせう。淡い光が暗い食堂をぼんやり照らしました。赤い／＼葡萄酒が、月の光に眼を覺して眩きました。

「誰だらう。私をこんな淋しい處へ忘れて行つたのは。あゝ怖い！ 早くよつばらひが来て飲んで来ればいいのに、よつばらひさんはどちら？」

暗がりから小鼠がチヨロ／＼と出て来て、小さなコップを倒しました。コトンと音がしたので、小鼠は驚いてテーブルを飛び降りましたが、すぐに小猫の玉につかまつてしまひました。

赤い／＼葡萄酒は白いテーブル掛けが飲んでしまひました。あいたな小鼠は、お母さん鼠の名を呼び乍ら、玉に食べられてしまひました。

朝が参りました。お日さまがキラ／＼とカーテンを明るく照しました。一郎さんのお家では皆起きになりました。

第一番にこの室へ入つて来たのは、昨夜よく睡つたので生々した顔の一郎さんでした。次は姉さまで、一番お終ひがお父さんとお母さんでした。

「ちやつ、コップが倒れてゐらあ。」と、一郎さんが

言ひました。

「あら、私何か踏んだわ、まあ鼠のしつぽよ。」と姉さまが、飛び上つて、氣味悪さうに叫びました。

お母さんはベルを押して女中をお呼びになりました。テーブル掛けが替られて、朝のお料理が運ばれました。皆さんは朝の挨拶を致しました。「誰方が、こゝへ葡萄酒なんかをお忘れになつたのでせう。」とお母さんが訊かれました。

「僕知らないよ。」「私も知らないわ」と一郎さんも姉さまも言ひました。

「忘れたのは、僕だよ。」「お父さんは頭を下げて言ひました。」「お祈り。」「一郎さんは小さな手を合せました。」「一郎さん、なんてお祈りするの。」と姉様がかさしました。

「僕よく知らないの。幼稚園の先生は、僕の知らない言葉でエス様にお祈りするんだもの。」「

——エス様今日一日を幸福に過しませすように。



「エス様、今日一日幸福に過しました。有難う御座います。」

「あくる朝、一郎さんの靴下が片方なくなつてゐました。一郎さんは誰にも黙つてゐました。朝の食事が始りました。一郎さんはしよげてゐました。その内に、姉様が、食堂の隅から、一郎さんの靴下を見つけ出しました。靴下は底が破けてゐて、姉様がお持ちになると、そこから半分になつたチョコレートが、コトンと床に落ちました。」

「まあ、一郎さんは。」と母さんが仰いました。

「今朝は僕は知らないよ。」と笑ひ乍らお父さんも申されました。

「私も知らないわ。」とお姉さまも言ひました。

「一郎さんは朝のお祈りを致しました。」

「エス様、僕の靴下を、誰があんなにしたのでせう。エス様、お教へ下さい。アーメン。」

(作者住所 東京市小石川區指ヶ谷町三六)



お食事がすみますと、お父さんは會社へ、姉様は女學校へ一郎さんは女中に連れられて、幼稚園へ行きました。お母さんはひとり淋しく、お家のご用をあれこれとなさいました。ご用がすんで、お火鉢の側に、ポカンと坐つてゐますと、一郎さんが歸つて來ました。お母さんは袋戸棚から、おいしい／＼チョコレートの菓子をお出しになつて、

「御ほうびよ。」と言つて一郎さんに上げました。一郎さんは大喜びで洋服を脱いでお母さんにふだん着に着せかへていたじやました。が、靴下を取る時、何と思つたか、こつそりチョコレートを一つ、靴下の中へ入れて置きました。

その内に、姉様もお父さまもお歸りになつて、お夕飯がすむと、また、一郎さんの知らない夜が來ました。一郎さんは、靴下の中へ入れたチョコレートの事なんか、すっかり忘れて、姉様と一緒に楽しい寢床に入りました。



頼光の四天王

— 長谷詣りの土産 —

川崎 春 二

羽鳥 古山 畫

その當時名高かつた二人のお公卿さまの中、野盗たちのため一人は殺され、一人は指を切り落され、あやふく生命をひろひ、折りも折り、頼光の軍兵がそこへ駆けつけたといふのですから、久我頼光の追刺の評判は大したものでした

「今度は頼光さまも、拘りあひになつたことだしするから、必と源氏の大将に袴垂征伐の命令が下るだらう——」
「はやく頼光さまが、袴垂たちを退治して呉れるとよい——」
京中の人達が、皆かう噂をしたり、のぞんだりしました。
野盗たちの方でも、さうした風

説を聞いては、そこ、この野山にうか／＼してゐる譯にゆかず、近江の高島といふところに要害堅固な山寨をかまへ、國中の野盗どもをかり集めて立籠つてしまひました。
朝廷の役人たちは是までのやうに、いゝ加減な人数を討手として差向けることも出来ませんから、

やはり頼光に軍勢を出させるといふことに決めました。

しかし頼光には、ほかに考へがあつたのでした。

頼光は朝廷に参り、
「……高島の野盗ども征伐の詔りは、何卒私の家來藤原保昌に仰せ付け下さりますやう、お願い申し上げます。世間で評判する通り、袴垂の大將は保昌が、弟、前の右京亮保輔がことで、副將はまた保昌が、甥前の右兵衛尉齋明がことに相違ござりませぬ。保昌はこれまで朝廷の御ためにも大功を立て、二人となし功臣でござります。保昌は私の家來とは申しながら、天下の武將としても働いてをります。

私は彼の苦しい心の中を見てゐられませぬ。今度は是非とも保昌に功名をたてさせ、せめて弟と甥との罪をつぐなひ、天下の人々に向つて顔の立つやうに致させたいと存じます。」と、ねがひ出たのでした。
朝廷の役人達も「それは情義に富んだ尤もな願ひである——」として、袴垂征伐の詔りを左衛門尉藤原保昌に下すことにしました。
保昌は涙を流して打ち喜び、直に四百餘騎の軍勢を率ゐて近江の國へ向ひました。——その中には頼光の援兵として、四天王中の酒田金時を將とする百騎ばかりの精兵が、ひそかに加へられてをりま

した。
二
保昌の軍勢が近江の高島に着いた時、意外な一通の書状が待ちうけてゐました。
「村の百姓が、袴垂の大將から固く預けて置くぞ——と頼まれてをつたものとのことにござります。」
郎黨の一人が、かう言つて保昌の前に差出したのでした。
それは次のやうなことでした。
「私はどうしたものか、あなたと戦ふことを好かない。とりわけ、今ではあなたと剣を合せる勇氣はない。あなたのためには、この不幸者の首を差しおのべて参りた



くも思ふ程であるが、まだこの世の中に生きてをりたくも思ふ故、さうも出来かねる。で、私はこの山寨を齋明等にまかせて、一人で遠方に、脱けて行くことにした。」

今度こそは、袴垂の一派を根たやしにして、天下の人々に申諍をしようと思つて来たのに、また保輔に運じてしまはれたので保昌は大そう力を落しました。

「いやは、なまじつか兄弟の情なぞを持つてゐる保輔めが、怨めしS……」

保昌は、かう言つて涙をのみました。

「しかし、山寨には齋明をはじめ多くの手下どもが籠つてゐるので

すから、それらを討ち平げれば十分に面目は立ちます。」

一人の近臣がかう言へば、他家来達も、

「たとへ、袴垂の大將にもせよ、手下を失くしてしまへば蟹がはさみをもぎられたとおなじこと、是れからは何にも仕出来せないのでござりませう。」

「その中、必ず袴垂を私達の手で捕へることが出来るでせうから。」

など、主人の心中を慰めるのでした。

保昌は直に山寨をとりかこんで烈しく攻めかゝらせました。

賊は百五十人ほどでしたが、山寨が要害の堅固な上に、常に山野

を住み家として押しまわる野盗の群のことですから、合戦は思つたより以上に難儀でした。

平地の戦争では決してひけを取るやうなことはない保昌の軍兵もこゝではもどかしい程働さが出来ません。たゞ一人、酒田金時だけは保昌の全軍に代つて、大そうな働きぶりを示しました。

足柄山の奥で、鳥や獸を相手に育つた金時は、岩から岩へ、断崖から断崖へ、恰度猿や狼が飛び廻るやうに、谷を超え、險阻を躍り越て目ざましく戦ひ続けました。

二日夜が間、保昌の軍勢は新し手を入れかへ、差しかへしながら烈しく攻め戦ひましたが、なかなか山寨を落すことが出来ませんで

した。

保昌は名もない野盗どものために、郎黨の尊い生命をむざ／＼おとさせるのは残念である。と言つて、いたづらに目數をかさねることもならぬし、一工夫しなければならぬ——と考へました。

三

袴垂の副將齋明は、剛勇な上に配下の者どもを手足のやうによく使ふことが自慢でした。手はじめの合戦に、寄手を可成いためつけたのでいよいよ勝ちほこつてゐました。

ところへ、寄手の方から書狀を結びつけた鎗矢が飛び込んで來ました。上書には、

「進上 前右兵衛尉殿 左衛門尉 保昌」と認めてありました。

今の齋明には、以前の官名で呼びかけられたことが、昔の身の上を思出されて何となく嬉しい氣がしたのでした。

書狀には、
「頼光公の取りなしと、世間に對する義とで、今回討手の大將を拜命して來た吾等が心の中を察して貰ひたい。二日二夜の烈しい合戦で討手としても面目は立つから、この上親類同志で戦ひを續けたくない。しかし大命を受け來た以上、あくまで援軍を呼び、新手を差しかへて攻め落さなければならぬ。自分としては甥の首をさらしものにして、世間の物笑ひの

種になりたくない。保輔は承知の通り、一戦にも及ばないで山を下りて行つて呉れた。其方も、はやく山を落ちて姿をくらまして呉れまいか。今夜の夜半過ぎに、北方の通路の圍みを開けて置くから、その鎗火の消えるのを合圍に、目だ、ぬやうに落ちのびて貰ひたい——」と認めてありました。

齋明は——尤もな忠告である。叔父上は、やはり骨肉の情を忘れずにゐて呉れたか——と、大そう喜んだのでした。

手下どもは、もとより山寨籠りなどはしたくもなかつた連中ですから、怪我のない中に落ちのびられるといふので大賛成でした。

その夜の夜半過ぎ、矢文の通り

死もの狂ひになつて暴れまはりました。

その中に鎗火が、眞晝のやうに焚かれはじめました。

この時、酒田金時が三十貫の鐵の棒をふりかざして現れました。

「坂田金時が袴垂の副將を生捕つて見せる。他の者は手出しをいたすな。二人の賊を捕へろ！」

「珍らしや、坂田どのとやら。相手にとつて不足はない！ 齋明が大太刀の切れ味を見せて呉れる」

三十貫の鐵の棒と三尺五寸の大太刀、剛力と剛力、早業と早業と、火花を散らして戦ひました。——物凄の一騎打が半時近くも續きました。が、まだどちらも疲れだした様子も見せず、何れが勝つとも負ける

裏手の通路が一筋だけ鎗火が消えました。——齋明は「義濃の各務で待合せるのだ——」と固く言ひつけて、三人五人と落ちてやりました。

しばらく様子をかゞみました。が、騙し討ちに逢ふらしい様子もないので、自分も二人の配下を連れて脱け出しました。

一里ばかり來ると、原中を膝さりくらの小川が流れてゐました。山塞かこみの寄手が取り壊して置いたと見て、橋がなくなつてゐました。

「私がお渡しいたしませう。」
一人の配下が、かう言つて脊を差出しました。

「いや、それはいけない。誰に見

咎められないとも限らぬ。目立たぬやうに、要心することが肝心だ——」
齋明が、かう言ひ終るや否や、突然、側の鐵かけから、

「ぶら——く……」と、ほらの貝が鳴り出しました。

と同時に、その先々の道筋からも「ぶら——く……」と、天にも響けと貝の音が起りました。

「しまつた！」
齋明が叫び出した時には、二三十騎ばかりの胃武者に、ぐるりと取りこめられてゐました。

かすかな星明の下で、烈しい斬り合ひがはじまりました。野盗とは言へ、名高い袴垂の副將、二人の配下も一二の腕きゝでしたから

とも見えませんでした。
しかし、如何なる隙があつたものか。

「え！」と一聲、金時は鐵の棒を放り出して齋明の手に飛びこんで、むんづとばかり組みつきました。

齋明も太刀を放して組合ひました。が、組み討ちとなれば金時に勝てる者はありません。

「え——、や！」と、三振り四振りもみ合ふ中に、齋明は忽ち組みしかれてしまひました。汗を握つて見てゐた武士達は、ドツと開をあけて讚めをやしました。

その時には、二人の配下は夙に生捕られてをり、前に落ちて行つた賊ども、道筋から起つた伏兵の

ために、一度に取りこめられ、或は討たれ、或は生捕られてしまひました。

四

保昌は計略によつて、味方の軍兵に大した損害も蒙らずに、袴垂の強賊どもを討ち平げることが出来ましたが、肝心な大將保輔を捕へることが出来なかつたので、朝廷からは褒美をいたゞつき、世間からはその功名をうたはれながら却つて面目なく思はれてなりませんでした。

「一日もはやく、保輔をさがし出して捕へなければならぬ——」と、家來たちを方々にやつて様子を探らせましたが、皆目そのかく

れがをつきとめることが出来ませんでした。

「保輔は奈良にかくれてゐるさうだ——」

「播磨國で手下を集めてゐるさうだ——」

「いや、吉野の奥に袴垂らしい賊どもがこもつてゐるさうだ——」

さうした噂を聞く度に、保昌は腹心の家來たちを問者としてし、ばせましたが、何時も風説だけに過ぎませんでした。

此のころでは、前年、西洞院高辻で出會つた折に討ち果さなかつたことが、後悔されてなりませんでした。

頼光は、それを大そう氣の毒に思ひ、

五

けれども次の瞬間、貞光の乗馬はびたりと歩みを止めました。と同時に、

「お待ち下され！」と、大聲で喚鳴りました。

「拙者をお呼びかの？」

貞光は、ちらり後を振りむいただけでました。

「はて、物分りのに、い方ぢや！」

「でも拙者は貴殿を知らぬ！」

「知らなくとも用事がないとは限るまい。」

「何の用事かの？」

「まづ、馬から下りて下され！」

「そいつは少し面倒ぢや。このままで聞かせて下さらぬか。」

「——不敵な保輔のことだから、きつと今に姿を見せるに、相違な。その時こそ、すばやく手配りして捕へるやうに、四天王達にも十分申付けて置いたから、そのやうに心配することはない——」と、保昌を尉めてをりました。

あなじ年の秋のことでした。

碓井荒太郎貞光は、頼光よりしばらくのいとまをたまはつて、大和の長谷寺へ、お詣りに行きました。年ごろののぞみであつた物語でのごとくでしたから、へり下つた氣持で、従者と言つては馬の口取りの若者一人、本當にお寺詣りにふさはしい遣出でした。

お詣りを了へた貞光は、からりとした秋晴れの大和路の景色にう

つとり見とれながら、歩むがまゝに駒をうたせました。

古河野邊といふところに差しかけた時、逞ましい武家姿の者が行きさがひました。——互に顔の知らない間から故、貞光は氣にも止めず、遠くつゞいた野や林を打ちながめてゐました。

しかし、徒歩の武士は立止つて貞光の後姿を見送りました。

「うむ、立派な馬ぢや——」

貞光は、彼がさう一人言したとだつて勿論知りませんでした。

「しばらくお待ち下され——」

貞光は、かう呼びかけられたやうにも思ひました。

が、氣に止めるほどでもありませんでした。

「まづ、下りて下されー」
その日の貞光は、別人のやうに
温和しい武士でした。心の中では

最前から、此奴、何を働くつもり
か？と興味を感じてゐたのです。
「では、その御用の筋を承ると



いたさう。」
貞光が馬を下りると、彼の男は、
「それは辱けない。馬から下りて
さへ下されば、もはや貴殿に用事
はござらぬのでー」

「ほう、驚いた。用事がなすー」
「いや、貴殿にはござらぬが、
この馬にはあるのぢや。」

かう言ひも終らず、男はひらり
とばかり貞光の馬に飛び乗り、走
り出さうとしました。

しかし、そんな手に乗せられる
貞光ではありません。

「待て！ 無禮者め！」

今度は貞光が、彼の男の太刀の
をびとりをぐつと握まへて、馬も
人もびくとも動かしませんでした
「放せ！ 馬をもうし受けるのぢ



や。馬を惜しんで生命を落すな！」
「馬鹿者め！ 左馬權頭の身内に
て四天王と呼ばれる碓井貞光の乗

馬がかたり奪れると思ふか！」
「あゝ、さては汝が碓井荒太郎で
あつたか！」

かう言ひながら男は、鎧をけつ
て馬上から貞光に躍りかゝりまし
た。——が、元來大剛の貞光に難
なく組みしかれてしまひました。

貞光は刀をぬきかけましたが、
ふと考をかへて、高小手にふん
縛り、自分の馬に抱き寄せ、兩足
を鞍にしつかり縛りつけ、若者に
馬の口をとらせて、後からまた長
閑な氣持になつて歩き出しました
道筋の人々は垣を作つて、この
珍しい光景を見物しました。怪
しい武士は、組みしかれてから一
言も口を開きませんでした。見
知つた人々がだん／＼現れ、
「袴垂の大將軍！ 保輔ぢや！」
と騒ぎ出しましな。

(つづく)

積んだ雪、消えた雪

西川 喜平

水島爾保布畫



江戸時代に、奈良茂と紀文と云ふ二人の大金持がありました。
この二人は金のあるにまかせて、いろ／＼の遊びをしつくし、はてはお互に、人の真似の出来ない、變つた珍しい事をして、自慢をし合ひました。
ある時二人はつれ立つて、瀬野川の紅葉を見物に出かけました。そして途中の道灌山の上に来かゝりますと、晴れた西の空に、クッキリと白く浮き出

したやうに、富士山が見えました。
『ア、いゝ景色だ、こゝではまだ紅葉

か盛りなのに、富士の山はもう真っ白になつた、奈良茂さん、今年の初雪に面白い趣向がありさうなものだね』と紀文は云ひました。

奈良茂は『ム、面白い、お互にアツト云はせるやうな趣向を考へやう』と話し合ひました。

紀文はそれから、奈良茂を驚かせる雪見の趣向を考へてみると、一と月ばかり立つたある朝、奈良茂から使が手紙を持つて来ました。

その使が、笠をかむり、合羽を着て草鞋をはいてゐるのを見て、紀文は奈良茂が、何か面白い趣向をしたのだなと思ひながら、その手紙を読んで見ると「この前お話しあつた今年の初雪

を見たいから、すぐにおいでなさい」と云ふ文句が書いてありました。

紀文は『ハ、ア奈良茂は、わしにまけまいと初雪の趣向を考へたな、彼奴は風流な男だから、上手な繪かきに、床の間の掛物や、屏風に雪の繪でもかゝせたのを見せて、自慢をしゃうと云ふのだらう』と笑ひながら出て行きました。

紀文は奈良茂の家へ来て、座敷へ通りますと、掛物や屏風には、別に變つた趣向もありません「ハテナ何を見せるのだらう」と思つてゐると、奈良茂が出て来て、

『紀文さんこの雪によくおいでなすつた、小さな庭ですが、この雪景色を見て下さい』と云つて、障子を開けますと、紀文は「アツ」と驚きました。庭一面に、植込みの木の枝から、石

燈籠、敷石まで、眞白に雪が積つてゐました。

それが、縮でも、鹽でもなく、ほんたうの雪なので、サスガの紀文も、『奈良茂さん、初雪の趣向は恐れ入つたものだ、これにはわしも感心してしまつた。』と云ふと、奈良茂は自慢をかくして、

『ナニちよいと初雪を見せたのさ、今度は紀文さん、面白い趣向を見せて下さい、今日はこの雪を肴に一杯飲みませう。』と云つて御馳走をしました。

奈良茂が、初雪と云つて庭へ積らせたのは、遠い山の方から、わざ／＼雪を運んで来たのでした。今なら汽車もあり、電車もあり、また自動車でも運べますが、その頃は雪を樽づめにして馬の背へつけて来たのですから、大へんな事でした。それも何百樽も持つて

来たのですから、奈良茂の自慢をするのも、紀文の驚くのも無理はありません。それから奈良茂は庭の雪を大勢の人に見せたものですから、これが市中の評判になりました。

紀文は、奈良茂の初雪の趣向に感心しましたが、今度はモット珍しい變つた趣向をして、驚かせやうというべく考へてゐる中、とう／＼ほんたうの初雪が降つてきまして、大雪になりました。紀文は

『この大雪にひとつ面白い事をして見たいが、ぐず／＼してゐる中に、奈良茂に先を越されては残念だ、思ひ切つて變つた趣向をして、奈良茂の自慢の鼻を挫いてやりたい。』と考へてゐるところへ、ふだん紀文がひるきにしてゐる吉兵衛と云ふ男が来ました。

この吉兵衛と云ふのは、形體は小さ

ら、ヘイこの通りなんて云ふのではな

い橋の雪を消したら、奈良茂さんも驚

いか。』
『冗談ではありません、あなたの見てゐる前で一刻の間に、奇麗に消して御覧に入れます。しかしその趣向は今はお話しが出来ません。首尾よく行きましたら、ウント御褒美を下さい。』と笑ひながら云ひました。

『しかし何所の雪を消すのだ、まさか一坪や、二坪の雪を消すのではなからう。』

『何所でもお望み次第です。淺草の觀音でも、日本橋でも、なんでも往來の多い賑はふ所がいゝのです。』

『ハテナよつほど面白い趣向と見えるな、丁度雪も降りやんだから、わしは龜井戸の天神へ参詣をしたいと思います、その通り道ではどうだらう。』
『それでは兩國橋にしませう、あの長

いが、知恵のある男で、しじう紀文の相談相手になつてゐました。

『吉兵衛よく来た。今お前を呼びにやらうと思つてゐたのだ、この大雪に變つた趣向で、奈良茂を驚かし、自慢の鼻を折つてやらうと思ふのだが、中々考へがつかない、お前の知恵で面白い事をやつてくれ。』と紀文が云ひますと吉兵衛は

『昔の孔明、楠の生れ替りと世間では云はないが、自分だけはさう思つてゐる私の事ですから、キツト面白い事は出来ますが、先づあなたのお考へを伺ひませう。』と云ひました。

紀文は
『わしにいゝ考へがないから、お前に頼むのだが、この前には奈良茂が雪を積らせたから、今度は雪を消して見せたいと思ふのだ、この趣向はどうだ

う。』と云ふと、吉兵衛は手を拍つて

『私の考へも身通りです。先代の奈良茂さんの時に、奈良茂さんが、雪見をしてゐたところへ、あなたのお父さんが来て、雪の一杯降り積つた往來へ小判や小粒のお金を澤山に、バラ／＼とまいて、往來の大勢の人に拾はせて大雪を消した話があります。』と、それはお金の力でなまつたので、趣向は面白いが、お金のある方なら誰でもやれます、私のお金を遣はずに、往來の雪を消して見せます。』と自慢さうに云ひました。

紀文はうなづいて

『その話しは親父が金づくでやつたのだが、お前の云ふ通り面白い事じゃない。しかし金を遣はずに往來の雪を消すとはどうするのだ、お前一人で雪をかいて、いゝ天氣になつて溶けてか

い橋の雪を消したら、奈良茂さんも驚

きませう。』
『それは面白からう、それでは、萬事たのむからうまくやつてくれ、これから奈良茂を誘つて出かけやう。』と、紀文は奈良茂の家へ行きました。

やがて紀文と奈良茂の二人は駕籠に乗つてやつて來ましたが、ビクリと駕籠の止つたのは、大川にかゝつてゐる兩國橋でした。

そこには、吉兵衛が一人で待つてゐました。

吉兵衛は、紀文と奈良茂の駕籠の傍へ来て、
『恐れ入りますが、紀文の旦那お一人でこの橋をお渡り願ひたいので。』と云ひました。

紀文は、この大雪の積つてゐる橋を渡るの迷惑と思ひましたが、吉兵衛

の云ふ通り駕籠から出て長い橋を渡りました。

紀文に奈良茂は、江戸で評判の大金持ですから、外へ出るにはしじう大勢の供をつれてゐました。それで今日はこの大雪に、珍らしく二人つれ立つて駕籠で兩國橋へ来て、紀文一人が歩いて渡るのですから、往來の人も、橋の近所の人も、不思議さうに見てゐました。

『奈良茂さんと紀文さんと、二人つれ立つて何所へ行くのだらう、それにこの大雪の積つてゐる長い橋を、紀文さんと二人歩いて渡るとは何か趣向があるのかね。』

『ナニ二人とも、今まで何所の名所の雪見でもしつくしてゐるから、この橋の上から雪見をしゃやうとやつて來たのだらう。』と往來の人や、近所の人

「ア、出た〜。」
 「草鞋の切れたのが出た〜。」
 「フザケルナ、そんな物は川へ打捨つてしまへ。」
 「オイ〜むやみに雪を川へ入れるなその中に落し物があると大へんだぞ。」
 「橋中の雪をかき集めて持つて行けばあるに違ひない、持つてけ〜。」



「二人で欲張るな、その雪を半分よこせ。」
 「はやくやれ〜。」と橋の上は、ワア〜と大騒ぎになりました。
 長い兩國橋の上に、降り積つた雪は大勢の力で、一刻も立たない間に、ス

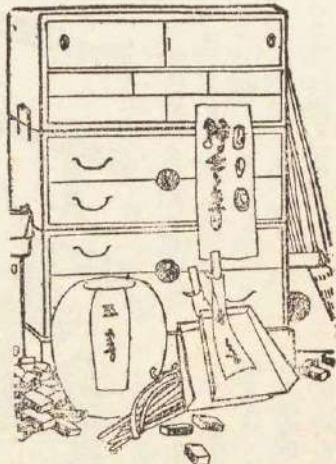
「ア、出た〜。」
 「草鞋の切れたのが出た〜。」
 「フザケルナ、そんな物は川へ打捨つてしまへ。」
 「オイ〜むやみに雪を川へ入れるなその中に落し物があると大へんだぞ。」
 「橋中の雪をかき集めて持つて行けばあるに違ひない、持つてけ〜。」



「二人で欲張るな、その雪を半分よこせ。」
 「はやくやれ〜。」と橋の上は、ワア〜と大騒ぎになりました。
 長い兩國橋の上に、降り積つた雪は大勢の力で、一刻も立たない間に、ス

ツカリ奇麗に消えてしまひました。ところが、隠井戸の天神へ参詣した紀文と奈良茂は、駕籠へ乗つて歸つて來ました。兩國橋へ來かゝると橋の上の雪は奇麗に消えてゐました。紀文は奈良茂

「雪を消したのは、この男ですよ。」と指さしをしたのを見ると、吉兵衛がニコ〜として橋の袂に立つてゐました。紀文は吉兵衛に、澤山のお金を褒美にやりました。スルト吉兵衛は、貰つたお金を、橋の上の雪をかいた大勢の人達に、「御苦労〜、お骨折り〜。」と云つて分けてやりました。
 大勢の雪をかいた人達は、探がし物が出ないので、ガツカリしてゐる所へ吉兵衛から金を貰つて喜んで歸りました。これがまた市中の大評判になりました。
 (をばり)



正直愛ちゃん

横田 貴美衛
岩岡 とも枝 畫

今年も暮れに近づいて町では賑やかな賣出しが始まりました。愛子ちゃんも二枚の福引券を持って出かけました。一枚はお家ので、一枚はお隣りのおばさんからことづかつたものでした。

『もしおばさん家にいゝものがあつたら、愛子ちゃん家の景品ととりかへてもいいわ』

おばさんは笑ひながらかうおつしやいました。

『あら、おばさん、ほんと？』

愛子ちゃんが顔をまるくして念を押しますと、愛子ちゃん

のお母さんが、

『まあいやな愛ちゃん、そんなに慾ばつてゐるといゝものがあたらぬことよ』

とおつしやいました。

『大丈夫、あたしお家のおばさん家のも両方ともいゝものであてゝ来るわ』

愛子ちゃんは、勢よく町へ出かけました。いかにも年の暮れらしい寒い風が音高く吹きまくり、空は一枚の大きな硝子張りのやうに青く澄んで、店々の屋根の上高く張り巡らされた。しかしこの箆笥をあてた者はまだ一人もなかつたのでした。

『あのお箆笥があたしにあたつたら……』

愛ちゃんの目はどんな物でも引きつける強い磁石のやうに光りました。

『あたしにも福引を引かせて下さい』

愛ちゃんが福引券を渡しますと、世話人は

『さあ、いゝのを引いとくれよ』

といつて太い團の束を愛ちゃんの目の前にさし出しました。愛ちゃんはちよつとためらひましたが、心の中で

『どうぞ一番があたりますやうに』

と祈りながら一本の團を引きました。そして胸をどきどきさせながら、世話人に渡しました。

『よう七等さん、大當り』

世話人の聲があまり大きな元氣のいゝ聲だつたので愛ちゃんはびつくりして、どんないゝものが當つたのかと思つてゐる

れた小さな萬國旗がきやつきやつと舞ぎたつてゐるやうに見えました。どのお店もみな赤い幟や提灯で美しく飾られ、若い店員達は向鉢巻に紅褌で威勢よくお客を呼びたてゝゐます。大きな呉服店の三階では樂隊が賑やかな曲を奏して、浮々した人々の心を一層そり立てゝゐました。それは愛ちゃんの好きな「天然の美」といふ曲でしたが、今日の愛ちゃんは福引のことで頭がいつぱいですから樂隊にあはせて歌ふどころのさわざではありません。でも目つき足つきは他の多勢の人々と同じやうにいつか樂隊に合せてうきうきしてゐました。町のまんなかのアーチがたてられ、紅白の幕をはつた小屋があつてそのまわりはいつぱいの人ばかりでした。そこが福引券の引換場で、小屋の前には青い圓竹で手すりをかねた團ひがあり、恭く羽織袴をはいた世話役らしい人が、四五人居て團を引かせたり、引換番號を見てやつたりしてゐました。そしてたまに、番號が出る多勢の人々に聞かせるやうに「大當り、二等」とか「大福二等」とか景氣よく呼び立てました。その度に人々は自分が當つたかのやうにハツとした顔つきで、座敷に飾つてある景品の山を見ました。そこには、マツチ、紙、たわし、洗濯はさみ、などの小さいものから、洋



ると

『へい、七等さん』

といつて愛ちゃんの目の前につまみ出されたのは、ひよつとこじろしのマッチ一箱でした。

『まあこんなつままないもの』

愛ちゃんはくやしさに世話人の顔をにらめながら

『あたし、もう一本引くのよ』

と、もひとつの福引券を出しました。愛ちゃんの胸は前よりよけいにわくわくして、顔を引く手がぶるぶるふるへました。

『どれどれ、見てあげよう』

愛ちゃんから顔を受けとつて開いてみたお爺さんの世話人は、ちよつとの間、息が詰つたやうな顔をして顔を覗視めてみました。

『やあ、出た、出た、特一が出たぞうい、特一だ、特一だ！』

すると

『えつ！ 特一だつて、ほんとかい』

『どれ、どれ、どの人があてたのだ』

といつて店中の人が残つた顔つきで集つて来ました。そし

て世話人の持つてゐる顔を見て

『やあ、ほんとだ、ほんとだ、特一だ、特一だ』

といつて大騒ぎを始めました。

『トクイチつてなんだらう』

あまり人々が大騒ぎするので愛子ちゃんがきよときよとしてゐますと、世話人のお爺さんは、愛ちゃんの頭をさすりながら

『この嬢ちゃんがあてたのだよ』

といひました。するとほかの世話人達も、顔を引きに来た客も、見物人も皆いつせいに愛ちゃんの顔を見ましたので、愛ちゃんは恥かしくてまつ赤になりました。

『お嬢ちゃん、あなたはあの大きな箱があつたんですよ』

世話人のお爺さんはさういひました。

『え、あたしにあのお爺さんがあつたの、まあ、ほんとよ』

さくらんぼのやうに見開いた愛ちゃんの眼に、桐の香ち匂ひたちさうなつや／＼しい三重の大箱がはつきり寫りました。

『後で自動車で送り届けますから、嬢ちゃんの所と番地を教へておいて下さい』

世話役がさういつたので、愛子ちゃんは半分夢中でお家の名前と番地をいひました。

『お嬢ちゃんお芽出たう、今晚自動車で送りますからどつさり御祝儀を頼みますよ』

世話役のおぢさん達のさういふ聲々を後にして、愛ちゃんはほとんどお家の方へ驅りはじめました。ところが途中でふツとあることに気がついて思はず立ち止まりました。それは箆笥のあたつた札がお家のでなくて、お隣のおばさんからこつかつてきた札であつたことです。ハツとおもつた愛子ちゃんは同時にガツカリしてしまひました。せつかく私の隣にあつた箆笥、あんなに多勢の人が欲しがつてゐるのにあつらないで、不思議なほど運よく私にあつたのに、それがお隣の隣であつたとは——自分に恵まれたと思つた大きな幸福は、お隣のおばさまで自分はそのなかつぎをしただけ、自分の手に残されたのは、たつたマツチ一箱だけであつた。あのあとの隣があべこべに私の福引券で引かれてゐたら、箆笥は私が貰ふことが出来たのだ、愛ちゃんは今までの元氣は何處へやら、眼には涙までがチーとわいて來ました。その時、愛ちゃんの頭に、フトある考へがうかびました。私はあの隣

をまちがへて私の名をいつてしまつたのだ、皆も私の隣だと思つてゐるのだから、私さへ黙つてゐたら知れつこないのださうすれば箆笥はお家のものになる。愛ちゃんはおもはずあたりを見まはしました。こんなことを考へた心を誰かどちつと見すかしてゐるやうな氣がしたのでした。すると耳もとで誰かどちつとやうにおもへました。

『嘘つき、そんな狡いことをしてはいけない。はつきりほんとうのことをいはねばいけない』

愛ちゃんは、お家を出る時、おばさんが

『もしおばさんちにいゝものがあつたら愛ちゃん家のものととりかへつこしてあげますよ』

と約束して下さつたことを思ひ出しました。

『おばさんのおつしやつたことはほんとうかしら、でも、おばさまだつて、お箆笥とマツチとはととりかへつこして下さらないわ』

すると又優しくいひきかすやうな聲がしました。

『おばさまを信じなさい、例へおばさまがお約束をお守りなさらなくても、愛ちゃんはほんとうのことをいはねばなりません。誰も知らないと思つてゐても、愛ちゃん自身だけはよ

『ホ、ウ、それはわざ／＼御苦勞だつたのう、ほんとに正直なよい嬢ちゃんぢや嘘』

といつて、愛ちゃんのお河童さんを大きな掌で撫せてくれました。

愛ちゃんはすつかりいゝ氣もちになつて、ほんとうにえらい元氣で馳つて歸りました。

そして、お家へはいる前にお隣のおばさんのお家へはいるなり大きな聲で叫びました。

『おばさん、おばさん、おばさん家のおれは一等があつてよ、とても素敵なお箆笥よ』

『まあほんとう』

おばさまは眼をパチクリせられましたが、やがて笑ひながら

『嘘でせう、愛ちゃんは嘘がお上手ね』

と仰いました。

『あらおばさまほんとうよ、でもねおばさま、あたし餘り嬉しくてうっかりしちやつておうちの名前いつちやつたのよ』

愛ちゃんは赤い顔をして云ひわけをしました。

『まあほんとうなのね、愛ちゃんはいへんなものをあて』

く知つてゐるのですよ、もしそれでも嘘をいへば愛ちゃん自分の良心にいつ迄も苦しめられねばなりませんよ』

愛ちゃんはお母様から教はつた正直な偉い人々の話を思ひ出しました。

『さうだ、私も正直になくってはならない。これからもう一度福引場へいつて、ほんとうのことをいつて來よう』

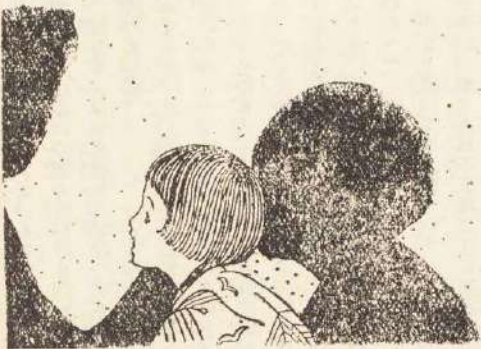
こう心をきめると愛ちゃんは急に氣がせいせいして來ました。で、えらい元氣で、いつさんにかけあしで福引場へとつて返しました。

『あゝ、先刻一等を引いた嬢ちゃんぢやないか。どうかしたのか』

あまり驅つて來たのでハアハアいつてる愛ちゃんを見た世話役のお爺さんは不思議さうに尋ねました。愛ちゃんの顔は思はず赤くなりました。

『えゝ、あたし、先刻はあまり急いだから、お家とお隣のおばさん家の福引券とまちがへて名前をいつたの、歸る途中で氣がついたから又來たのよ、一等はおばさん家だつたのよ』

愛ちゃんは口早にかういつてお隣のおばさん家の番地やお名前をはつきりいひました。お爺さんはすつかり感心して



来てくれたのね。
おぼさんどつさり
お禮いふわ、そし
て愛ちゃんお家は
何があつたの』
『つまんないも
の』
愛子ちゃんは元
氣の無い顔でマツ
チを取り出して見
せました。
『あら、それつほ
ち』
おぼさまは思は
ず聲を立て、お笑
ひなさいました。
すると愛ちゃんは
急に口惜しいやう
な、情けないやう

な、へんにむしやくしやした氣になつたので、黙つたまゝお
家へ歸りました。

今にも泣き出しさうに、しよんほり歸つて来た愛ちゃんを
ごらんになつたお母さまは
『おやお歸り、どうしたの、そんなお顔をして—』

とおたづねになりました。

『だつて、だつて、つまんないんですもの』
愛ちゃんは、蹴るやうにいつてマツチをそこへほうり出し
ました。お母さんは笑ひ出しながら

『まあ、それでつまらないのかい、何が當つたつていゝちや
ないの。聞なんていふものは運ものだよ、悪い物が當つたか
らつて自分の氣まで悪くしてしまふなんてお馬鹿さんよ』
とやさしく愛ちゃんを慰められました。

『だつて母さん、お隣のおぼさん家の一等があつたんで
すもの』

愛ちゃんは、聞をまちがへて歸る道々考へたことなども正
直にすつかり話しました。お母さんは熱心に聞いてゐらつし
やいしましたが、やがて愛ちゃんをぎゅつと抱きしめて頬づり



しながら
『愛ちゃん、よく
ほんとうのことを
いつてお呉れだつ
たね、お母さんは
筆筒よりも何より
も愛ちゃんのその
正直な心が一等嬉
しいのよ、筆筒く
らひはいつでも買
へます。けれど愛
ちゃんのその美し
い正直な心はどん
なに深山のお金を
出しても買へませ
ん。愛ちゃんいつ
までもその美しい
心を失はないで頂
戴ね』

とおつしやいました。そして

『このマツチは記念にとつておきませう、愛ちゃんの美しい
心の光りを秘めた大切な寶物としてね』

といひながらお佛壇の中にしまつて、

『お祖父さまも、お祖母さまも、どんなにか喜んでゐらつし
やるでせう』

とおつしやいました。お母さまにほめられると愛ちゃんの
心はすつかり洗はれたやうにすがすがしくなりました。そし
てお床に入ると晝間のことはすつかり忘れて、すやすやと安
らかな夢路をたどりはじめました。

愛ちゃんの枕もとではお父さんと、お母さんが満足さうな
笑をうかべながらお話をしてゐらつしやいました。

『ごらん、この寝顔を、まるで神さまのやうぢやないか』

『え、ほんとうに神さまですわ、愛ちゃんさへあれば筆筒
も何もほしくありませんわ』

その時、とつぜん外から景氣のいゝ掛聲や、賑な笑聲が
聞えたかと思ふと、がらりと戸があきました。

『今晚は』

はいつてゐられたのはお隣のをぢさんで、その後にはおばさんの白い顔や、三つ四つ提灯が動いて見えまして。

『おや、愛ちやんもう寝ましたね』

をぢさんは、ここにこしながらおつしやいました。

『さあ、お約束どほり箆笥を持って来ましたよ、愛ちやんのマツチととりかへつこしませう』

愛ちやんのお父さんは驚いて

『いつたいどうしたとおつしやるのです』

すると今度はおばさんが

『え、わけはかうなんですの、今日愛ちやんが福引きにいらつしやる前にあたしと約束しましたの、どんなにいゝものが當つても必ず愛ちやんのものとりかへつこしませうつて——すると愛ちやんが一等を引きなまつたので、今箆笥がとどいたのですよ』

お父さまは

『だつてそれは冗談ですよ』

『いえ、いえ冗談ではありません。愛ちやんが正直にいつてゐられたのに私がお約束を守らなかつたりしては恥ぢゆ

ういざんすわ』

おばさんがおつしやると、おぢさんも頷いて

『さうだ、さうだ、それにこの箆笥は愛ちやんの正直な心へ神様の贈物なのですからどうぞ納めておいて下さい』

といひながら外に待つてゐる人々へ聲をかけられました。

『さあ、その箆笥をこちらへ入れて下さい』

すると三四人の若衆にかつがれて——新しい鍔金のおほひ布をかけられた三つ重櫛桐の立派な箆笥がギンギン家の中へ運ばれて、愛ちやんのお父さんやお母さんがうろろしてゐる間に愛ちやんの枕元へちやんと積み重ねられました。でも愛ちやんは何も知らずおだやかな顔をして心地快さうによく寝てゐました。

『さあどうぞ私達にはマツチを下さい』

おぢさんはまじめにおつしやいました。

『まあ』

さういつて微笑みながらマツチを渡さうとしてびつたり合つた愛ちやんのお母さんと、おとなりのおばさんの眸には涙の玉が美しくゆらいでゐました。

(をはり)



とんぼ (賞)

芦澤 秀雄 (山梨)

童 謡

野口雨情選

スイスイとんぼが

すきとほつた

清水の上を

とんでゐる

さはく

吹く風

よく見てた

何盡く

廻つて

お月さんの顔かくの

か申つり。

チヨンチヨン

チ、チオンチオン

深山は秋風

眞赤赤

泥棒用心

日の用心

小さいく

鐘つきは

一日一晩

泣いてみて

山は霜がれ

日が赤い

チオンチオン

チ、チオンチオン

(子供篇)

魚つり (賞)

臺 タキ (埼玉)

父さん

たんぼで

魚つり

一人ぼつちで

こしかけて

トンビ (賞)

後藤 珠江 (岐阜)

とんび ひヨろ ひヨろ

何処かく

びーひよろ廻つて

まる畫くの

トンビ ひヨろ ひヨろ

かねたゝき

板谷 令子 (東京)

お正月

石倉 眞造 (山梨)

私は
お人形の
お母さん
僕は
お人形の
お父さん
よいよい
よゝ子の
お人形は
二つに
なりません
お正月

風によかれて
落ちて来た木の葉
散つてくるくる
うづまる書いた
赤いさもので
うづまる書いた

木の葉はかれる

井上 貞子 (大分)

山の木の葉は
そよ／＼と
風にゆられて
ゐるけれど
今に眞赤に
なつて来て
松をのこして
かれてゆく

こほろぎ

梅田 邑太郎 (秋田)

こほろぎは
啼く蟲は
落葉の下の
こほろぎよ
月夜の庭で
こほろぎと
ふたひらみひら
葉が落ちて
こほろぎひとり
こほろぎと

月夜

鈴田 儉三 (愛知)

外は月夜で
明るいばんだ

かゞし

市川 博江 (京都)

東の道は
白く見え
お池の水は
ひかつて見える
夕やけ 小やけ
もう日が暮れる
うら山たんぼに
立つて居る
一本足かゞしは
さみしかる
村の 百姓が
かへつても
鳥がねぐらへ
かへつても

一人ぼつちで
稲のぼん

月夜

篠崎 保正 (東京)

今夜は月夜だ
白い土蔵は
月の光を
あびてる
大きな大きな
月夜だ

草の中へ
這入つちやつた
かへるの飛びかた
面白い

すゝき

長島 せき (埼玉)

土手の上の
すゝきのほは
水とあそんでる
顔をうつして
あそんでる

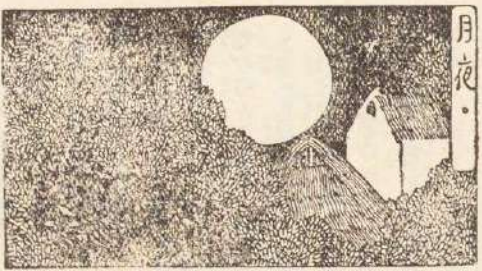
川島喜代子 (東京)

かへるがビョンビョン
飛んでゐた
そこでちつと
見てゐたら

夏の日

前田 佑 (山口)

とやのにはとり
水のんで



月夜

あすは晴れだと
空を見た

畑のほうづき

佐藤よし子 (大分)

はたけのほうづき
うれてゐた
今日もいもとと
行つて見たら
赤いほうづき
うれてゐた

山道

關口さくゑ (埼玉)

日ぐれの
山道通るのは
なんだかさびしく
なりました
ひとりで／＼
かけだして
おつかなびつくり
通ります



一 王國を争ふ

小島政二郎

岡本綺一書

十一
「コルネルだ。若い詩人のコルネルだ。何を歌ふのだらう。」

かういふ大勢の囁きと、どよめきの中に立つて、その青年詩人は歌ひ始めた。人々は水のやうに静かに耳を澄ました。しんとした廣間の中を、青年の和やかな聲が流れ始めた。その唄は、最初優しく夢のやうに、聞いてゐる人々の胸に、我懐しの獨逸の國が呼び起された。豊かな、温い野原の景色や、灰色に霞む町々の姿や、故國の英雄の勳の數々が、次から次へと現れては消えて行つた。

歌は段々進んで行くうちに、不思議な熱を伴つて、強く、鋭く、一句一句、詩句は進軍喇叭の音のやうに高く鳴り響いた。それは、現在の獨逸——自由を縛られ、敵のために叩き潰されてゐる獨逸——それが今や、その永い間の屈辱から奮ひ立つて、祖國の上に加へられた力強い縛めを解かうと努力してゐる

獨逸を語つてゐた。

何が故に人々は生の上に執着するか。
何が故に人々は華々しき死を嫌ふか。
母、我等の大いなる母は、今我々を求めてゐるではないか。
母の吐息は夜の風の中に聞えるではないか。
母は今、助けを我等に求めてゐる。
人々よ、救ひに赴くや否や。
人々よ、救ひに赴くや否や。
人々よ、人々よ。
歌は止んだ。あゝ、佛蘭西人たる僕にとつて、何といふ恐ろしき歌だらう。彼の英氣溢るゝ頬。その鳴り響く聲音……。彼は僕の存在も、——いや佛蘭西も、かの英雄ナポレオンの存在をも眼中に置いてゐない有様である。
人々は叫ぶのではなくて、——叫ぶには餘りに大きな感激だつた。彼等はその代りに喚びた。そのう

ちに、彼等は氣がついたやうに、一時に机や椅子の上へ跳び上つた。兩頬に涙を流して啜り泣きながら踊るものもあつた。抱き合つて跳んでゐる者もあつた。彼等は狂人のやうに興奮してしまつてゐた。コルネルが歌ひ終つて椅子を降りると、仲間は劍を打ち振つて彼のまはりに集つた。——見れば親王の蒼ざめた頬にふと赤い血潮が閃いた。彼は玉座に立ち上つた。さうして僕の方をちつと見た。彼の顔には決心の色が現れてゐた。

「デニール大佐、貴方は皇帝に傳へるべき答を、もうお聞きになつたでせう。——諸君、もう賽は投げられた。余と諸君とは、興亡を共にしようではないか。」

彼はかう云ひ終ると、腰を屈めて挨拶をして、會議の濟んだことを現した。人々は一齊に扉の方へ駆けつけると、事の由を町の人々に話すために、どつと出て行つてしまつた。

僕にして見れば、男として努力出来るだけのこと
 はした後の事なので、人波に採まれながら出て行く
 のを少しも悲しいとは思はなかつた。こんな空気の
 宮殿の中にどうして愚圖々々してゐられよう。僕は
 もう返事を——こんな返事ながら貰つてしまつたの
 だ。僕はもうこのホフの町の人達を、佛蘭西の國旗
 を守つて先頭に入城するまでは、二度と見たくない
 と思つた。そこで、僕は人の列から離れると、馬丁
 が、馬を曳いて行つた方へ、黙々として歩いて行つ
 た。

十二

厩の處は暗かつた。厩番はゐないのかしらと、中
 を覗き込んだ瞬間、僕は後から兩腕を強く捉へられ
 た。あんまり突然だつたので、僕は身構へする隙も
 なかつた。相手は四五人らしい。彼等は僕の手首を
 捻ぢ上げ、喉を扼して來た。その上、僕の耳の下に
 は、ピストルの銃口が、冷然と當てられてゐる。

「やい、佛蘭西の犬。静にしる。」低いが荒々しい
 聲で、彼等の一人が囁いた。

「大尉殿、捕へました。」

「お前手綱を持つてゐるか。」

「はい、持つてをります。」

「それを此奴の首に引ッ掛けろ。」

次の瞬間、冷たい革の輪が首のまはりに掛けられ
 るのを感じた。見ると、提灯を持つた厩番が出て來
 て、その場の有様をちつと眺めてゐた。その薄明り
 で、黒い帽子を被り、黒い外套を着た夜警隊の連中
 の荒くれた顔が、闇の中から、方々に覗いてゐるの
 を僕は發見した。

「大尉殿、此奴をどうなさるまつもりですか。」

と、中の一人が叫んだ。

「宮殿の門のところを繼るのだ。」

「使節を……？」

「使節と云つたところで、身分證明書を持つてゐるな



「奴がなんだ。」

「しかし、親王が……」

「馬鹿な。親王だつて、やがては我々の手の内のものだ。生かさうと殺さうと我々の思ひのまゝだ。現在のところ、まあ明日あたりまでは、親王も今までのやうに、フランスに味方をするか我々に味方するか、どつちつかずでゐられるが……。心變りをして約束を破るなら破つてもいい。その時になつたつてなかに、驃騎兵の死骸の一つ位、問題になりやしなよ。」

「ステルリッツさん、そんなことをしちやいけません」突然他の聲が遮つた。

「してはいけない？ なかに、俺はやつて見せる。」と、云つたかと思ふと、手綱が引つばられ、危く僕は地面の上へ倒れさうになつた。その瞬間、サーベルがピカツと光つたと思ふと、手綱は首から二寸も離れないところで、ぶつつりと斷ち切られた。

中から僕等の前に浮び上つて来るのが見えた。

「何と云ふことです。」彼女はかう云ふが早いか、いきなり僕に近づいて来て首から手綱を解いてくれた。「貴方達は、神懸けて國の爲に戦ふ身でありながらこんな悪魔のやうな仕事を何故するので。この人は私の物です。髪の毛一本揃めても承知しませんから。」

相手を蔑み切つた彼女の瞳の前には、彼等は居堪らなくなつたと見えて、いつの間にか一人去り二人去り——消えて行つた。そのあとで、彼女はもう一度僕の方へ向き直つた。

「デニール大佐、ちよつと話したいことがありますから、妾と一しよに来て下さいませんか。」

云はれるまゝに、僕は彼女のあとに従つて、あの最初通された部屋へ行つた。彼女はうしろの扉を締め、それから狡さうな瞬をしながら僕を見た。

「……あの時、波蘭士のパロット伯爵夫人だと名告

「コルネル、貴様、上官に反抗する氣か。そんな奴をかばひ立てすると、貴様から先に縊り殺すぞ。」と大尉は叫んだ。

「大尉殿、私は軍人として劍を抜いたのです。この劍は、血で塗られるやうなことはあつても、不名譽で穢したくはありません。諸君——君達は唯立つてこの紳士が理不盡に扱はれるのを見てゐられるのか。」これが青年詩人の答へだつた。

すると、忽ち十二人の劍が引き抜かれた。見るとこれで僕の周囲にゐる二十四人のうち、僕の味方と敵とが丁度同數になつた譯だ。が、同時に、これ等の人々の怒聲とサーベルの閃とを聞き傳へて、四方から人々が馳け寄つて來た。

その時、
「妃殿下だ。」といふ聲が聞えた。

「妃殿下がいらせられた。」

さう云つてゐるうちに、妃殿下の美しい顔が暗の

つたのは、お察しの通り、私です。いふまでもなく私はサクス・フェルスタイン親王妃です。」

僕は答へた。
「名前なんか何でも構ひません。僕は唯、難澁してゐるとばかり信じた女の人を助け、その酬ひとして僕の書類と名譽までも盗み去られたに過ぎません。」

「デニール大佐、妾とあなたとは、互に非常に素晴らしい獲物の中に、腕比べをしてゐたのです。妾の魂は飽くまでも獨逸人です。貴方の魂はまた飽くまで佛蘭西人です。私は、祖國の危急存亡を救ふ爲には、人を騙しもすれば、盗みもするやうになりました。あの手紙は、妾のためにも、獨逸國のためにも、必要でした。妾は、あの中に書いてあることを見たら、きつと親王の決心が鈍るに違ひないことをよく知つてゐました。若しあなたの手から、あれを渡されたら最後、もう萬事終ると思ひました。」

「しかし、妃殿下ともある方が、どうしてローベン

スタインの宿屋なんかに入らしつたのでせう。」
「それは、妾が澤山の分隊を出して、あの手紙を送
中で食ひ止めるやうに命じて置いたのです。さうし
て、その結果をあつた村で待つてゐたのです。そこへ
貴方が見えられた。妾はもう絶體絶命です。貴方を
宮殿へやらないためには、このか弱い女手一つでし
とげなければならなかつたのです。」

「口惜しいながら、僕の方が敗けました。では、こ
れで失禮致します。」
「では、貴方はこの手紙を持ってお歸り下さい。」妃
殿下はかう云ひながら、あの銀糸で縛つた封筒を取
り出し、僕に渡した。

「親王は既に最後の決心をしてしまひました。もう
どんなことがあつても、この決心を顧すことはあ
りません。貴方は、この手紙を陛下に、妾達が受け
取らなかつたと云つてお返し下さい。さうすれば、
貴方は、誰にもこの通牒を盗まれたなどと云つて嗤

たやうなもの——が深く深く存在してゐるのを知つ



た。かうした古い、國民から血を以つ
て愛されてゐる國を征服してしまふこ
とは到底出来ないことだといふことを
考へないではゐられなかつた。

僕が、かうして馬を進めて行くうち
に、もう夜は白々と明け始めた。空は段々薄紅く染



はれないで済むでせう。では、左様なら。どうぞ佛
蘭西へお歸りになつたら、そのまゝ國內に留まつて
入らつしやるやうに——。なぜつて仰しやるんです
か。だつて、もう一年もすれば、ライン河のこちら
側には、佛蘭西人などは、一人だつてゐられなくな
るに違ひありませんもの。」

十三

僕はかうして、獨逸一國を賭けて、サクスマフェル
スタイン親王妃と腕比べをしたのだ。ホフの大道を
疲れた愛馬ヴィオレットに跨つて西へ西へと行く
時、僕は深い考へに沈まずにはゐられなかつた。そ
の數々の思ひ浮ぶ出来事の中でも、あの誇らかな美
しい親王妃の顔や、その健氣な才智やあの椅子の上
に立ち上つて歌つた青年詩人コルネルの魂の底ま
で通る聲の響などが、幾度も幾度も僕の胸に浮んで
來た。さうして、僕はこの一致協力した忍耐強い獨
逸には、何か恐ろしいもの——根強い愛國心と云つ

つて、大きなかな陽の光を思はしめた。その時、ふ

と西の空を見ると昨夜あの宮殿の窓か
ら僕が指さした大きな星が、今は蒼白
くその光を消して力なく懸つてゐた。
それを見つけた時の僕の心は堪まらな
く寂しいものだつた。(をばり)

お正月

三木露風

千兩萬兩赤い實が

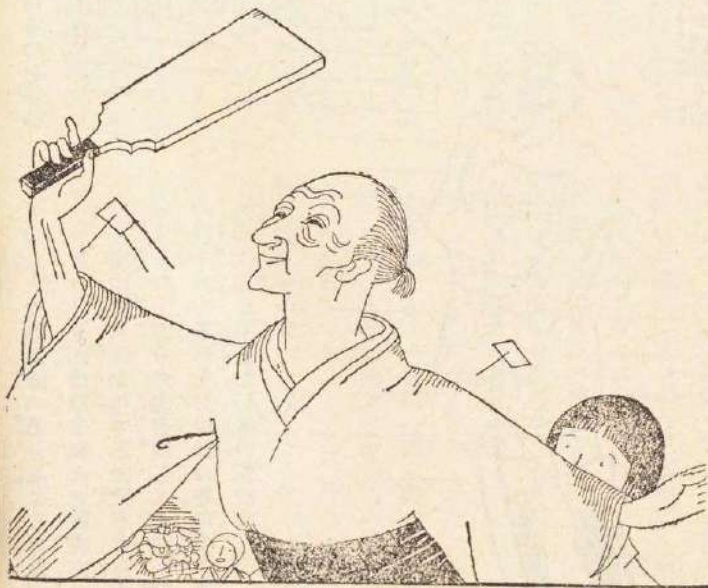
つぶつぶ木になるお正月

赤いさんごの玉のやう

つぶつぶまるい枝の實よ

鎧甲を床の間に

かさつて迎へるお正月



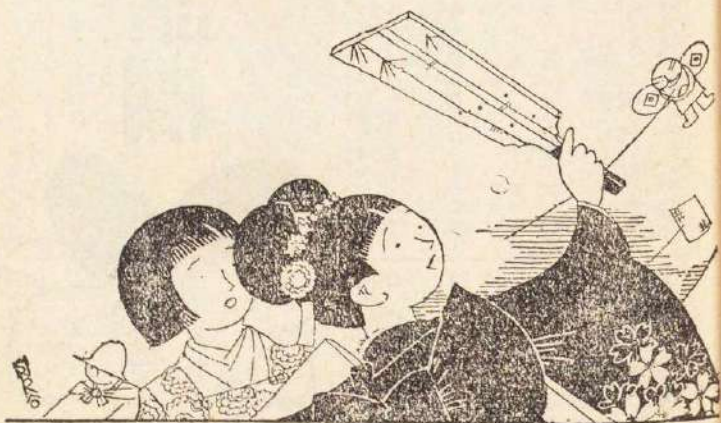
ちちは昔のおさむらひ
ちちの話にききました

庄屋そだちのばあさんは

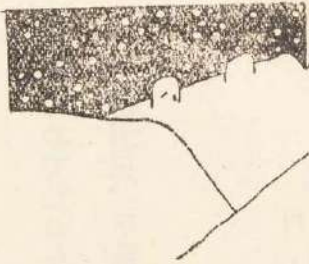
追羽根、手鞠をつきました

めでためてたのお正月

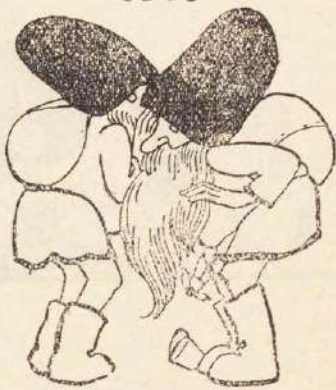
今も追羽根、手鞠つく



川上四郎畫



世界童話欄



行者と輕業師 と齒醫者（日本）

あるところに、行者と輕業師と齒醫者の三人が居ました。三人とも怠け者で、善い行をしなかつたもので、三人とも死ねと地獄へ落ちてしまつて、閻魔大王の前へつれて行かれました。お前たちは人間世界にゐた時

善い行をしなかつた。その罰として此の地獄でおそろしい目にあはせてやるぞ。閻魔大王は、こわい狐をして三人をにらみました。それから、傍に立つてゐる青鬼と赤鬼に向つて、「この三人を大釜に入れて煮殺してしまへ」と、いひつけました。行者と輕業師と齒醫

者の三人は、地獄の釜の中に入れて、上から重い蓋をされてしまひました。輕業師と齒醫者は、すつかりし

「お、熱い。お、熱い。死にさうだ。死にさうだ。」と、輕業師と齒醫者が騒ぎ出しました。しかし、行者は落付いてゐて、「お二人とも、そんなに恐ることはない。私が、今まぢないをしてあげるから。」と、さも自信があるやうにいひました。そして、眼をつぶつて、何やら口の中で唱へことをはじめ



「これはいゝお湯だ。地獄へ来てお湯に入れるとは有難いことだ。」中でも、ひやうきん者の輕業師はすつかりいゝ気分になつて、地獄にゐる事もわすれて、鼻唄をうたひはじめました。外では赤鬼と青鬼が、せつせと釜の火をもしてゐましたが、釜の

中から妙な唄の聲がするので、不思議に思つて蓋をとつて見ると、三人とも、いゝ氣持ちさうに釜の湯につかつてゐるではありませんか。赤鬼も青鬼も、びつくりしてしまつて、閻魔大王のところへ駆けつけて行きました。「大王様、大變でございます。おひつけに従ひまして、三人の亡者を釜に入れ、どん／＼火を焚きましたところ、亡者どもは一向に苦しむ様子もなく、いゝ氣持ちさうに唄などをうたつてゐるのでございます。」と、鬼が訴へるやうにいふのを聞いた閻魔大王は、驚いたやうな怒つたやうな顔をして暫く考へ込んでゐましたが、

「それでは、あの亡者どもを針の山へ追ひ上げてしまへ。如何に平氣な奴でも、針の山へ追はれては苦んで死ぬであらう。」そこで、赤鬼と青鬼は、行者



怒鳴り立てました。行者と齒醫者はすつかりしほれてしまつて、「今度こそ駄目だ。いよく死ぬ外はない。」と思つてゐると、輕業師だけは

そこで、赤鬼と青鬼は三人の亡者のところへ来て、
 「不届な奴だ。喰ひ殺してしまふぞ。」
 と閻魔大王にいはれた通りをいひました。今度は齒醫者が大元氣になると、今度は齒醫者が大元氣です。



「へい、承知いたしました。では、どうぞ、私からお先きにお願ひいたします。」
 といつて、心算さうな顔をしてゐる行者と齒業師に向つて、さも自信があるやうな様子を見せました。
 「よし、では貴様から先きに喰つてやる。」
 と、先づ赤鬼が齒醫者をつかまへて一口に喰はうとしました。ところが、忽ち
 「あ痛！ たた！ た！」と叫んで、齒醫者をそこへ抛り出しました。見ると、赤鬼は涙をたら／＼流して

して、口がきけなくなつてゐるのです。
 青鬼はびつくりして、
 「おい、どうしたんだ。上だ。ど流してゐて、見つともないぢやないか。」といつても、赤鬼は、
 「あわわ、あわわ」と、いふだけです。
 「まるで、噂のやうぢやないか。よし、おれが歯をとつてやる。」
 そこで、今度は、青鬼が齒醫者をつかまへて、頭から喰べてしまはうとしました。ところが青鬼も

また、
 「あ痛ッ！ あわわ、あわわ。」と叫びました。これも歯を抜かれてしまつたのです。
 赤鬼と青鬼は、泣く／＼閻魔大王のところへ行つて「あわわ、あわわ。」を繰返して、手まね足まねで歯を抜かれてしまつたわけを話しました。
 流石の閻魔大王も驚きました。
 「こんな奴をこの地獄へ置いてはどんな償ひをするかわからない。一刻も早く極楽の方へやつてしまへ。」
 と、命じましたので、行者と齒業師と齒醫者三人は、思ひがけなくも極楽世界へ行くことが出来ました。(をばり)



つたぞ。「カンナ、お前の敵の子、シヤクンタラは、ブル族の王ドワシヤクンタと契を結んで、やがては天下を統一する立派な王子を生むぞと。」からいふのだ。どうだ、姫、悲しむことはない。今日こそ

はお前の父君から托されたつとめをはたすことができるのぢや。明日の夜あけを待つて、すぐハスチナプラの都へ旅立ちせよ」と仰いました。
 あくる朝、シヤクンタラ姫は晴いうちから起きて、沐浴して髪を淨めたり、神々にお祈りしたりしてゐました。その間に、尊者は姫



はお前の父君から托されたつとめをはたすことができるのぢや。明日の夜あけを待つて、すぐハスチナプラの都へ旅立ちせよ」と仰いました。
 あくる朝、シヤクンタラ姫は晴いうちから起きて、沐浴して髪を淨めたり、神々にお祈りしたりしてゐました。その間に、尊者は姫

それがすむと、尊者は姫をおよびになつて、
 「王の御殿に住むやうになつたらすべて、王の御心は、御前も尊べて、王の御心に逆らうやうなことがあつても、御前は王の心に逆らうてはならぬ。またたとへば、に仕へる妃があつても、それと寵を争はうなど思つてはならぬ。侍女としてでもまめ／＼しく仕へよ。どんなことがあつても女としての徳を失つてはならぬ。これだけをきつと心にきざんでをけ。」
 からいふ、誠をお傳へになり、二人の弟子を侍者として姫につけて旅立たせました。姫が森の草木の贈物になつた玉のやうな衣裳をつつけて出られると、見ちがへるほど美しくなりました。森を出る時、尊者はもう一度、森の木や草に言葉をかけました。
 「森の木といふ木、草といふ草、聞いてくれ。姫はいよ／＼遠い旅

に出ることになつた。姫はお前たちが可愛いはかりに、喉が渇いて、泉の水も飲まず、お前たちが可愛ばかりに、髪飾りと思つても若葉一つとらなかつたのだ。木も草も、枝も葉も、今日の別れを悲しんでくれ。」
 すると、樹や草は一せいに悲しさを奏でました。
 また森に懐ひ鳥や獣にも同じやうに挨拶されると、鳥や獣もござつて姫のために今日の別れを悲しみあひました。
 姫はこれらの草や木や鳥や獣にいち／＼優しい言葉を奏へて森を出ました。
 神に奉仕へる人は、旅する人へ水のほとりまで送つてゆく習慣になつてゐますので、尊者も姫を小川のほとりまで見送つてゆきました。そこで一度抱き合つて
 『さらば父上』
 『さらば我子』

といふ言葉を交して、尊者は旅路の無事なるやう、姫は尊者のつかへられる神々にさわりりのな



いやう、お互に心の中で祈りながら西と東へ別れました。

五

シヤクンタラ姫は長途の旅路に疲れもなく、二人の侍者に伴はれて、やうやくハスチナブラの都へ参つたのでした。

王様は、お目をお見せなさいませ。その時はどうしてそんなことを云ふのかしらと思つておりましたが、今になつてはじめてそのわけがわかりました。それより他にない。王様の御名の刻まれた指環をお目にかけたらまさか見えがないとは



仰いますまい。姫は一途にさう思つて、指環をとらうとしますと、これはどうしたことでせう。家を出る時しつかり依めてきた指環が

のお室へ通されました。王様の方では雪山に近いカンナ尊者のもとからお使が来たといふので、一體何たらうと思ひながらお會ひになりました。そして仰いました。

「カンナ尊者には如何なる御用があつて、はるばるお使をよこされたことであるか、何か尊者の仕へられる神々にさわりりでもあつたのか、それとも王の國に神の降る兆でもあつたのか。さあ申すがいへ。」

「恐れながら王様に申し上げます。仁徳高い王様の御國にどうして神の降るやうなことがございませう。また尊者のつかへられる神々にどうして御心にそはぬことがございませう。今日はいはるゝ尊者の命をもらして伺候いたしましたのは、他のことではございませぬ。」

ありませんでした。ではあの泉で水を飲んだ時おとされたのかしら。どこまでわたしは不運なのだらう。と、姫は心の中ちでひとり言をいひながら歎き悲しみました。

侍者はこれ以上どうすることもできないので、ひとまづ尊者のもとへ歸ることにしましたが、姫は今歸るに歸れない身になつておりましたので、しかたなく、王様の侍従に預かつて頂くことになりました。幸ひその侍従が賢い方でしたから、いろいろ姫をいたはらした。その上王様にかう申しました。

「陛下に申し上げます。ちかごろ占星者の申しますには、陛下には天下を治められるあつばれた大王の父となされたまふといふこととございませぬ。もしやこの女に生れた子供に、王者の印がありましたら、陛下のお妃となさいますしては

ひますと、王様は言葉をさへぎつて、それでは何と申す」と、せきたてられました。

「恐れながら王様に申し上げます。王様にはいつか御においでになつて、聖の森にお訪ねくださいました。その時、森の主カンナ尊者の教へ子シヤクンタラ姫としたしく言葉を交はされて、姫様を王様の御妃とすることを誓ひ下さいました。それからあらためて迎をよこすから、それまで待つておよとのことで、姫様には毎日々々待つてをられました。一向にお迎へが見えませんでした。カンナ尊者のお許しを得て、今日のはるばる訪ねて参つた次第でございませぬ」と、尊者の弟子は申し上げます。

「何と申す。獨に出た。聖の森でカンナ尊者の教へ子としたしく、言葉を交はした。いやいや更に覺えないことだ。その方のつくりこ

いかでございませぬ。さやうな印がありませんでしたら、その上でこの女をかへすまでのこととござ



ます。王様は何とも返事がありませんでした。侍従は姫のお腹に宿つてゐる子供の生れるまでの世話をはきうけて、姫の侍者には歸つてもらふことにしました。

とに相違あるまい。と仰つて、大へんお氣色をそこなはれませんでした。

「そんなはずはございませぬ。恐れながらよく御思案下さいませ。といつて、いへる王様の御教へをよびおこさうとしましたが、何の甲斐もありませんでした。二たび三たび思ひ返して見たがこの姫と何か言ひ交したなどとはどうしても思ひ出されぬひがごだ。と、王様は申されました。

かうなりましてはなんといつてもしかたがないので、侍者はもしや姫の口から直接何か申されたなら、思ひあたられることもありはしないかと思ひましたが、姫も今更のやうに驚いて何も云ひませんでした。

そのうちにふと義を出る時、侍者のうちのひとりが、

「それではやつぱり怪しいものであつたか」と申されました。ところがこゝろに不思議なことが起りました。といふのはある日王様の家來が、みすばらしい顔師がどか／＼光る指環をもつておりましたので、とり上げて見ますと、王様のお名前が刻んでありました。

「一體どこでこんな物を持つてゐるはずがない。誰んだのだらう。白狀するがよい」と、きびしく顔師をひつぱたいて取ねました。『決してさやうな物ではございませぬ。』

せぬ。これはいつか釣りました魚の腹の中から出てきたものです。さやうに尊いものは存じません



で、身につけてしまつてまことに恐れ入ります。

漁師がかういひましたので、家來もおこることもならず、さつそくそのことを王様に申上げました。

王様には大そうお喜びで、漁師には深山な褒美を下さいました。王様がこの指環をごらんになると、ふしぎなことにダルバアサ

スの呪咀がたちまちとけて、シヤクタンタ姫のことを思ひ出されたのでありました。

それからといふものは、前の日の情ない仕うちを大へん後悔なされて、毎日々々夜も寝も苦しきとほされました。政事も忘れ勝ちになられ、侍従の須さへお忘れになり、侍女をごらんになると、シヤクタンタ姫とよばれて、お氣が狂つたのではないかと思はれるくらゐでした。しまひには姫様の繪像を描かせて、せめてもの慰めにしようとなさいました。それをごらんになると、ますますひどく苦しみ悩まれるのでした。

六

話かはりまして、その頃天界では悪神たちがはびこつて大へん我まゝをはたらいて善神たちを困らせてをりました。善神中の大王である天神インドラは、大そうお怒りになつて、悪神征伐にか

かられました。さうして長い間かゝつて征服してはれました。ところが、これまで悪神が地上の悪い仙人などとたくらんで、いろいろの悪事をはたらいてゐたことがすつかり現はれました。

これには善神たちも驚かれ、なかでも、ダルバアサといふ悪い仙人がこの悪神にたのんで、ドウシヤクタン王に呪咀をかけたことは



一番インドラを怒らせました。なぜかと申しますと、ドウシヤクタン王の一家は遠い祖先にさかのぼり

ますと、天界でたいへんな働きをしてをられますのみならず、代々神につかへて徳をつんでをられるからです。それにまたシヤクタンタ姫は神と人の子であり、その上カンナ尊者の教へ子でありますから、これはさつそく救つてやらなければならぬといふので、天神インドラは尊者にいひつけて地上に降らせました。

尊者は神軍を引いて地上に降り、ドウシヤクタン王を乗せると、どこともなく車を飛ばしました。神軍はきれいな花の咲いたところや、光り輝くところや、かざりのふしぎなめづらしいところをとほつて、とある森の前にとまりました。そこは高い高い雲の上で下界ははるか下の方に小さく見えておりました。

尊者は王様を待たしておいて、ひとり森の中へは入つてゆきました。王様はなんとなく愉快になつ

て、その邊を歩いてをられますと、樹巧なる小さい童子が獅子の兒の髪をとつてひつぱりまわしてゐました。乳母が見かねて離させようとしたがなかく、きゝ入れませんでした。王様は勇敢な子供もあるものだと思心してをられました。子供は獅子に向つて、

『やあ口を開けよ、齒を敷へてやらう。』などといつてをります。王様はたいへんこの童子が好きになつて、

『いゝ兒だ、抱いて上げるから可愛さうな獅子の兒をはなしておやり。』

と申されますと、さつきから乳母がいくらいつてもきかなかつた子供はびたりとおいたを止めて、おとなしく王様に抱かれました。『おゝ、よい兒だ、この兒を見ていると、愉快でたまらぬわい。』といひながら、童子をゆすぶつてあやされました。

『この兒は誰の子ぢや。』

『この獅子の父御は神様のおきめになつたお祀をお忘れになつたのですから、お名を申上げることは神様の前にはできません。』

乳母のさういふ返答をきかれて王様はきざりとなさいました。そして何か云はうとなさいますと、

『神様のお呼びでございます。』とさつきの歌者が出て来て、

『神様はもうお待ちでございますし、入つてゆかれました。』



そこで王様は神様から、自分がダルバアサの呪咀にかゝつてシヤクタンタ姫を忘れたことや、そのシヤクタンタ姫が母神であるメナカに救はれてこゝにゐることをはじめ知りました。シヤクタンタ姫は一人の童子を抱いて、神様のお呼びで出て参り

ました。その童子はさつき王様の抱き上げられた童子でした。そこであらためて、神様の前に王様は姫様をお姫とするを誓はれました。

謎を解く王子

(長篇)

王子アルマスは、六ヶ所の謎を解くために、はるかにココカサスに向つて出發しました。それは苦しい、険しい旅でしたが、何日も何日も道をつづけて行くうちに、何本かの水が見えるところまで来ました。その水は廣い庭の真中に生えてゐて、庭の門の前には色の真黒い一人の黒ん坊が石を枕にして寝ておりました。上層はぐつと鼻のへんまでもそり上り下層はまるで靴靴の底のやうにだれ下つておりました。大きな刀

を傍の黄楊の木の枝に掛け、四つ石でつくつた箱を、傍においておきました。箱は獣の皮を十二枚縫ひ合せたもので、それを敷きつなぐやうな鎖で腰へ巻きつけておきました。

アルマスは、馬をそのへんにつなぐと、足音をしのばせて庭の中へ這入つて行きました。そこには青々とした森や、美しい花壇などがありました。中庭に這入ると、深山の鹿がゐて、目や足で合図をしながらアルマスに歸れ歸れとすゝめました。それは、こゝが魔法使の家なのだからですが、アルマスにはそんなことが解らう筈がありませんでした。かへつて、自分を迎へて挨拶してくれるのだからと思つて、どんどんとかまはず進んで行きました。しばらく行くと、金銀の練瓦で造つた式に立派な玄関のある御殿の前に来ました。八方に一つづゝ入り口があつて、

その入り口の前には又、大理石で作りの池が一つづゝ廻つてありました。御殿の真中は小高くなつてゐて、そこには美しい毛氈を敷いた坐席がつくつてありました。アルマスは、四方に氣配りながら、その周りを歩いてゐました。すると、突然一つの窓が開いて、月をも照くばかりの美しい顔が顔をだしました。姫は、アルマスの様子を惚れ惚れと眺めてゐましたが、やがてお付きの腰元に何か言ひつけました。すると間もなく、腰元はアルマスの前へ出て来て、その勇ましく立派な姿を見て驚きながら、ていねいにおじぎをして言ひました。

「まあよくおいで下さいました。お姫様がお待ち兼ねでございませう。どうぞお通り下さいませ。」アルマスは腰元について、種々御殿のやうに立派な御殿の中へ這入つて行きました。花のやうな姫は



ゆつたりと玉坐の毛氈の上に坐つて待つてゐました。アルマスは立つて、うやうやしく敬禮をしました。すると姫も立ち上つて、アルマスの手を取りながら自分の傍近くに坐らせました。

「よくおいで下さいました。貴方は何とおつしやるお方ですか？どこからおいでになりました？でもよくこの庭にお這入りなれましたこと。獅子や狼でも、這入れるところではないんですのよ。」

で、アルマスは今までの話を始めからしまひまで、すつかり話してきかれました。すると、姫は「まあ、莫迦なこと。そんなことをしてどうなさるの。一生世界中をぐるぐる廻つて歩くだけですわ。罷だつてコーカサスへなんか行けばしません。それより妾と一緒にここでお暮しなさい。玉座にもして上げますし、あなたの欲しいものは、何でも調へてあげますわ。なんならそのキムス王とミール姫もこゝへ呼んであげますわ。さうして皆であなたのお好きなやうにして暮らさせようよ。」

かう言つて熱心に説きすゝめました。アルマスは、いけません。僕はワクタへ行つてすつかり調べあげた上で、ミール姫を勝にするまでは、どんな事があつても、ちつとしてゐないつもりです。さう神様に誓ひを立てゝあるのです。ですか



ら、あなたがそれ程におつしやるなら、僕の仕事がすんでしまつたとき、あらためて王子として供をつれて来ますから、その時正式に結婚して下さい。それまではどうしても待つてゐていただかなくてはなりません。」

アルマスは、深い決心の色を浮かべてから語りました。それでも、アルマスに夢中になつてゐた姫は熱心に説きました。アルマスはどうしてもきかれません。姫はしかたなく、お酌す

る人々を呼んで、酒に酔はした上でアルマスに言ふことをきかせようとした。とたくらみました。透きとほつたきれいな酒がはとばれました。姫はそれをコップに注いでアルマスの前へ出しました。するとアルマスは、

「美はしの姫よ。先づ主人が飲んだ、それから客にさすのが、酒の場の禮儀ではありませんか」とやりこめました。姫はきまり懸げに一寸頭を下げてその酒を飲みました。もう一度コップをみたくしてアルマスに差し出しました。アルマスもそれを一息にぐつと飲み乾しました。やがて、姫は琵琶を出して上手に奏ではじめました。その琵琶はきいてゐるものが誰でも正根をなくしてしまふ魔法の琵琶なのでした。併し、驚く心をきめたアルマスには、それは何の力もありませんでした。



三日の間、姫は宴會をつづけて、手と代へ品を代へ、アルマスを引きとめる工夫しました。しかし、四日目の朝になると、アルマスは

「姫よ、今日はおいとまをしませう。僕は遠い遠いところへ行かなくてはならないのです。それに、あなたがあまり僕の事を思つて下さるので僕も苦しくなつて来ました。僕は是非ともやりとげねばなりません。ですから、それが済んだら、あなたのところへ歸つて来ませう。」

かう言つてアルマスは、別れを告げようとした。どんなにしてもアルマスの決心が變らないのと知ると、姫は腰元に言ひつけて一つの箱を持つて来させました。

「どうしてもおいでになるといふのなら仕方がありませんわ。ではお別れにこれを少し分けてあげませう。これを食べるとお心も清々しくなつて、旅をするには大變いのです。さあ、おあがりなさい。」

ました。するとその時アルマスの
巻を鹿の頸に巻きつけて、鹿の中
に放しました。

鹿にされたアルマスは、鹿の中
をどンドン跳ねて行きました。ど
こか逃げ出せる道はないかと、あ
ちらこちら探しましたが、どこに
もそんな所はありませんでした。



銀細工屋を呼んで来て、鹿の角に
金や寶石で飾りをつけさせました

そして自分が今まで持つて来た
巻を鹿の頸に巻きつけて、鹿の中
に放しました。

鹿にされたアルマスは、鹿の中
をどンドン跳ねて行きました。ど
こか逃げ出せる道はないかと、あ
ちらこちら探しましたが、どこに
もそんな所はありませんでした。

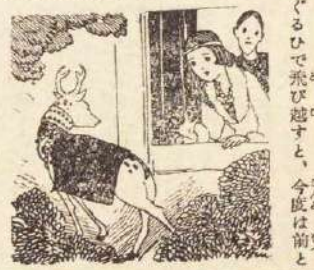
アルマスは鹿に驚いても、
人間の心や性根までなくしては
りませんでした。(このまゝであつ
ても、まあいゝだらう。鹿もずい分
美しい鹿なんだから)とさう思
つて、しばらくの間は他の鹿達
と一緒に、のん気に日を送つてゐ
ました。

しかし、考へてみれば、かうし
てこゝにゐたのでは、これから先

どんなことになるか知れたもので
はありません。第一、大事な自分
の望みが、しとげられるかどうか
も解りません。それを思ふとアル
マスは、どうかして逃げ出さなく
逃げ口を探して歩くことにしまし
た。

宮殿のまはりをかこんでゐる長
い長い堀について行くと、やがて
堀が少し低くなつた場所に來まし
た。こゝだと思つてアルマスは、
この中で神を祈りながらげつと
飛び上りました。しかし、不思議
なことには、下りてあたりを見廻
しても、自分の身体はやはりもと
のところにあるのでした。御殿も

にしておやりと鹿元に言ひつけま
した。
鹿元が長い細をもつて来て、鹿
のそばに近づつてふと見ると、鹿
は目から涙を流して、さきさき悲
しきうな様子をしてゐました。



は異つたところを下りました。御
殿と鹿とはありましたが、鹿はも
うゐませんでした。

丁度その時、お月様のやうに美
しい姫が御殿の窓をあげて細を出
しました。アルマスはその細を一
目みると、その美しさに心の底か
らうたれました。姫も、鹿に見な
れぬ美しい鹿があるのを見つけ
て、大さう喜びました。そして夢
中になつて鹿元に叫びました。
『お前あの鹿を捕まへておくれ。』

それなら妾の装飾りをあげるよ。
あの装飾りについては眞珠はどれ
もこれも、一つだけで主様の領土
よりもつと値打があるんだよ。
さあ早く！』
鹿元はそのパールを大さう欲し
がつてゐたのですが、もう齡が三
百にもなつてゐたので、とても鹿
をつかまへる元氣などはありませ
んでした。が、何とかしてつかま
へてみようと思つて、青草を手に
持つて鹿へ下りて行きました。し
かしやはり駄目でした。鹿元がや
つと鹿のそばまで行くと、鹿はふ
いと向ふへ逃げて了ふのでした。
御殿の窓から一生懸命に見てゐた
姫はちれつたがつて、
『お前、早くつかまへないと殺し
てしまふよ！』とどなりつけまし
た。

姫は鹿元がよろしくしてゐるの
を見たと、少し可哀さうにもなつ
て、御殿から鹿へ下りて行きた
。見れば鹿の角には、金と寶石
とで飾りがしてありますので、
『あら、御殿の飼つてゐる鹿だわ
どこのか御殿にでもゐたのかし
ら』さうつぶやきました。
アルマスは姫が出て来たのを見
て、(この姫もさう魔法使ひなん
だらう。また僕を何かに變へるか
もしれない。でも、つかまへさせ
ておくのが一番いゝだらうな)さ
う思つて、姫のまわりをざれなが
ら歩いておしまひにわざと首をつ
かまへさせました。

『もし、ヤミイラ様、これは妙な
鹿でございますね。泣いてゐるん
でございませうよ。妾、今まで泣く
鹿なんて見たことがございませ
わ』と鹿元は大層で叫びました。
ヤミイラ姫はびつくりして飛ん
で來ました。鹿はヤミイラ姫の足



に頭を振りつけて、いかにも悲し
さうに涙をふるはしました。ヤミ
イラは可哀さうになつて
『お、可愛い鹿ちゃん、鹿ちゃん
は何故泣くの？ 妾がつかまへ
たからなの。どつて妾は命より
もお前を大切に思つてゐるのだよ』
しかし、姫がかう言つてなだめ
ればなだめる程、鹿は余計ひどく
泣きました。
『あ、もしかしたら又妹がいた
づらをして、人間を畜生にしたの
かも知れないわ。あがふかしら』
この言葉が耳に入ると、鹿は何
やら叫び聲をあげて、姫の膝の上
に頭をのせました。
『やつぱりさうなんだわ。それな
ら安心おし、妾がもとの人間にか
へしてあげるから』
鹿はさういつて、先づ自分で體
を清め、鹿にも體を清めさせて、
新しい着物を着せました。
(つづく)

大懸賞事實美談募集

180

皆さんは『母を尋ねて三千里』といふ有名なお話を御存知でせう。あのお話は伊太利のアミチスが作った『クオレ』の中のお話です。『クオレ』の中にはまだこの外に『難破船』だの『少年斥候』だの『少年筆工』などの有名なお話があつて、世界の少年少女に愛讀されて、深い感動を與へてをります。しかし、かういふお話は、探したら日本にも必ずあるに相違ありません。『金の星』で発表した沖野岩三郎先生の『歸つて來た與志喜』などは、たしかにさういふ種類に入る立派なお話でした。

そこで、私もは廣く皆さんからさういふ實際にあつた美談を募集することにしたしました。日本全國には、少年少女のかくれた美しい美談が澤山あるに相違ありません。さういふお話を知つてゐる方は是非書いて送つて下さい。上手に書いてゐて、そのまゝ雑誌に出せるものは一番結構ですが、書き方は拙くとも、お話しへよければ結構です。選者の先生方がそのお話を書き直して紹介しますから、直し、本當にあつたお話を送ればいけません。

かういふ方法で、私共の考へてゐる通りのことが出来たら、有名な『クオレ』にも劣らない立派な本が出来るとすから、その本は立派に作り上げて出版し、全國の小學校へも一冊づつ頒布して兒童圖書館に備へたい希望です。

少年少女の方々だけでなく、全國の小學校の先生方にも是非寄稿していただきたいと思ひます。選者及規定は次の通りです。

選者

沖野岩三郎先生、野口雨情先生、立石美和先生、齋藤佐次郎先生

賞金

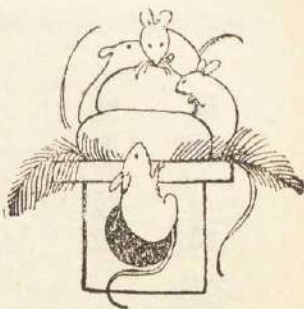
一等(二篇)金參拾圓・二等(二篇)金拾五圓・三等(三篇)金七圓

原稿枚數

尙、選外の作に對しても掲載分には稿料を差上げます。二十字詰二十行原稿紙拾貳枚迄。(金の星社内)事實美談係り宛に送る事

締切

二月廿日



通信

編輯室より

◇新年號の編輯を終へばつきました。御覽の通りこれまでとは大分に變つたものになりました。今後ますます「金の星」を立派な雑誌にして行きますから、どうぞこれからの「金の星」を御覧下さい。◇久振りに沖野先生の苦心の作をはじめ、大作を澤山に集めました。三井稻荷先生は「新ぼろ博士」で大活躍をされます。水島先生の挿話と共に、大評判です。◇三島翁川先生の長篇大傑作「舞天丸王子」は爲朝一代記の續篇ともいふべき作で、爲朝の子舞天丸が琉球國を舞臺として、魔法

使や妖惑を向うに運して大活躍をやるのであるから、全くスバラシイ物語です。二回三回進むにつれてますます面白くなります。◇立石英和先生は暫くの間事實大冒険談を書いて下さる事になりました。今月はナイヤガラ大瀑布の奇談です。次號は「海賊の子」さいふ冒険と涙の一大雄篇を書かれます。いよいよ面白くなります。◇新年大附録の「世界偉人家族合せ」は日本にはじめての高尙で面白い家族合せといふので、大層評判です。新年の遊びにおやりになつたら、ごんごんに面白いです。尙昨年新年大附録として大評判だった「童話いろはかるた」は廣告で御覽の通り、箱入りの立派なかるたに作り上げましたので皆さんにおわけいたします。御入用の方は大至急に御申込み下さい。◇昭和三年の「金の星」はますます光りかがやきます。編輯部一同今や大活動をしてまいります。齋藤生

童話の選後に

齋藤 佐次郎

◇いろ／＼面白い作がありました。一郎さんの知らない話(小牧昌徳)朝比奈豊さんの「白痴の妹」大島知恵子さんの「春の芝居」新倉しげるさんの「春さんの話」川地榮一

さんの「百貨店と少年」阿部和子さんの「幸福な童話」小林秀雄さんの「三吉君」などい、作でした。◇例によつて讀後感を述べて見ます。朝比奈豊さんの「白痴の妹」は、非常に傑出してゐました。おはれな白痴の妹に對する兄の氣持には胸を打たれました。殊に水に溺れて死に、それを吊ぶために河原へ行つて線香をたくあたり、非常な感動を覺えました。

◇小牧さんの「二郎さんの知らない話」は明るい氣持ちを覺える作で、童話でなくては現れない面白い世界を見せてくれました。たくまらずに、輕妙に、まことに面白い作でした。

◇大島知恵子さんの「春の芝居」は力のこもつた作です。電報の間違ひから、叔母さんが死んだと思つて行くが、實は春の芝居を見に行かうと誘ひの電報だったといふ喜劇を書いたものですが、大島さんの筆は、滑稽味をあらはすには得意でなく、しみみりとした氣分を現す事に役立つてゐるので、父親と少年が叔母さんが死んだものごばかり思つて、悲しみに閉ざされて出かけて行く途中を書いたあたりが最も優れてゐました。丁寧に、細なところまで行きこゝり書いてありました。

◇川地榮一さんの「百貨店と少年」はいはゆる創作の味のある作でした。それだけに

童話としての味が乏しく、もつとなだらかな調子があつてもよいと思ひました。中で終りの邊り場面は藝術味のあるものでした。だん／＼此の人の書くものが童話を離れて行くやうに思はれますが、しかし、此の人のために寧ろ喜ぶべき事と思ひます。將來を期待してゐます。◇新倉しげるさんの「春さんの話」は、書き方にまだ力の足り無いやうな點が見えますが、しかし、作意には非常に敬服しました。人生の批評がや派に出てゐるのに感心

しました。◇阿部和子さんの「幸福な童話」は、この作者獨特の境地は出てありますが、しかし、この人としては上出来の作とはいへないでせう。◇以上の諸作が佳作の中でも、特に優れた作であります。入選作として次の三つの作を挙げ、小牧昌徳さんの作を今月の推薦作とします。白痴の妹 朝比奈 豊 春の芝居 大島知恵子

春さんの話 新倉しげる ◇終りに一言、私はずぶん長い間皆さんのお作りになる童話を拜見して來ました。創刊以來ですから約九年になりました。よくこんな長い間、一ヶ月も缺かすずに續けて來たものと、自分ながら思ひます。しかし、立石英和先生が私に代つて選をやつて下さることになりました。先生は童話の大豪でありますから、必ず皆さんに喜んでいただけること信じます。私は、これで暫く休養させていただきます。

『金の星誌友』に歳の暮プレゼントを差上げます

『金の星』誌友の方々に、平生の御後援に酬ゆるため、本社より歳の暮プレゼントとして、金の星社發行の圖書を一冊づつ差上げます。十二月十五日に一せいにお送りいたしますが、萬一着かないやうな場合がありましたら本社へお知らせねがひます。尙、十二月の中にお入りになつた誌友の方には同様のお取扱ひをいたしますから御希望の方は、此の際、至急にお申込下さい。

金の星社營業部

童話掲載外佳作

- 青木 正雄(英 城) 甘利 實宏(京 京)
鈴木 和子(京 京) 前田 修兵(京 京)
加藤 政一(京 京) 磯貝金之助(京 京)
飯塚 幸一郎(京 京) 鹿野 吉助(京 京)
豊原 園子(京 京) 村上 清治(京 京)
小宮山 卓二(京 京) 櫻川 正明(京 京)
狩野 忠信(京 京) 松井 俊郎(京 京)
濱本 隆(京 京) 河合英太郎(京 京)
中村 正義(京 京) 竹内虎之助(京 京)
島本 夫二(京 京) 松尾 文雄(京 京)
村上 正一(京 京) 内田みわ路(京 京)
梅田 福治(京 京) 保坂 卓朗(京 京)
山門 信雄(京 京) 青木 正雄(京 京)
後藤 英二(京 京) 高橋 八郎(京 京)
堀玉 新一(京 京) 遠崎 美子(京 京)
新倉しげる(京 京) 小島 春男(京 京)

童話掲載外佳作

- 土屋 静文(京 京) 柴島 善郎(京 京)
中村 正道(京 京) 若野 民三(京 京)
四浦 幸一(京 京) 渡邊 直(京 京)
河合英太郎(京 京) 根岸 清夫(京 京)
吉川 行雄(京 京) 島本 夫二(京 京)
コスマス(京 京) 関口 草人(京 京)
大島 清正(京 京) 佐藤 勇吉(京 京)
田中秋夜詩(京 京) 土屋 寛(京 京)
種田 實(京 京) 深浦善美緒(京 京)
小出 露生(京 京) 島村 伊彦(京 京)
藤村つとむ(京 京) 牧野 誠一(京 京)
不可止(京 京) 石川十三子(京 京)
鈴木 敏夫(京 京) 野坂おさむ(京 京)
中野いつ路(京 京) 稲垣 秀坊(京 京)
小牧 昌徳(京 京) 榎垣 八代吉(京 京)
村田 賢蔵(京 京) 香曾 我部山(京 京)
伊藤 益平(京 京) 小林 直次(京 京)
波多野正信(京 京) 小宮山卓二(京 京)
宗木街三郎(京 京) 櫻井 潔(京 京)
小林金次郎(京 京) 村山俊太郎(京 京)
南小路 慎(京 京) 矢崎 三郎(京 京)
石川 潤(京 京) 篠原真砂雄(京 京)
一の 潤(京 京) 小椋 直次(京 京)
金子 風洋(京 京) 福水 利平(京 京)
由井房造作(京 京) 柿沼 喜一(京 京)
菅原 哀人(京 京) 濱口 春穂(京 京)
村山 泰(京 京) 瀧田 望月(京 京)
最野 晶水(京 京) 朝比奈 豊(京 京)

一四四

【子供篇】

- 大澤 静子(京 京) 大野ユキエ(京 京)
龜山 富子(京 京) 筑紫千代登(京 京)
山村 カエ(京 京) 鈴木 雄子(京 京)
河越サエ子(京 京) 足立アツ子(京 京)
望月 秀野(京 京) 萩野 はま(京 京)
中里 素行(京 京) 田中 幹枝(京 京)
竹内虎之助(京 京) 山口 宗平(京 京)
村上 清治(京 京) 河野 青雨(京 京)
安藤 武蔵(京 京) 重田ヒア子(京 京)
豊原 園子(京 京) 山本 保雄(京 京)
宮川 龍飛(京 京) 山田 次郎(京 京)
田口 富美子(京 京) 柴本重之助(京 京)
渡邊 千代(京 京) 黒田 ヲカ(京 京)
森 利信(京 京) 黒田 静枝(京 京)
高橋留次郎(京 京) 古藤 純夫(京 京)
小澤喜代明(京 京) 矢田 武山(京 京)
林 善介(京 京) 和田 タツ(京 京)
佐藤 厚平(京 京) 櫻井八重子(京 京)
大坪美津子(京 京) 櫻井千鶴子(京 京)
阿瀬見ハナ子(京 京) 梅田 福治(京 京)
伊能 龍粉(京 京) 成瀬 鏡二(京 京)
横山 寛二(京 京) 酒田 源三(京 京)
相谷 明治(京 京) 野田 洗(京 京)
相川マナ子(京 京) 齋藤 沈(京 京)

童話掲載外佳作

金の星誌友大募集

昭和三年は『金の星』が大活躍を期してある歳であります。それで此の際誌面の大改良を加へると同時に誌友の大募集を行ふ事になりました。従つてこの機会にお入りになつた誌友には、非常な特典が設けられてあります。その特典は未だ嘗て何處の社でも設けたことのない破天荒の誌友優遇であります。

新誌友規則書はお申込み次第お送りいたします。

係り

新誌友名簿

- 茶木 七郎(京 京) 山本 保雄(京 京)
早田 裕夫(京 京) 渡邊 菊次(京 京)
宮田 君子(京 京) 前田 修兵(京 京)
川島 雪江(京 京) 梅川 正久(京 京)
池田 緑生(京 京) 大關 清一(京 京)
中野 省吾(京 京) 松本 十九(京 京)
津田 直(京 京) 若山 泰(京 京)
牧野 一郎(京 京) 川口 常雄(京 京)
熊田 幸一(京 京) 畑 松太郎(京 京)
清水 伴雄(京 京) 池田 高章(京 京)
山岡 一男(京 京) 神原 竹雄(京 京)
片山たか緒(京 京) 宇津 享(京 京)
八十島 楓北(京 京) 畑 英次郎(京 京)
齋藤 漁(京 京) 山田日出雄(京 京)
加藤 晩水(京 京) いとうすゐ(京 京)
岡本 憲一(京 京) 寺西 謙雄(京 京)
M. U(京 京) 南波源治郎(京 京)
中里 素行(京 京) 山本 時風(京 京)

一四五

- 綿貫 博(京 京) 後藤 英二(京 京)
松本 秀穂(京 京) 村木 良三(京 京)
金子 豊(京 京) 大島 清正(京 京)
衣野 國明(京 京) 土屋 松雄(京 京)
早川 貞久(京 京) 多治見行蔵(京 京)
小島五兵衛(京 京) 名古 剛二(京 京)
松平 道雄(京 京) 佐藤 幸之(京 京)
伊藤 忠治(京 京) 白杉 政治(京 京)
多谷 孝次(京 京) (以下次號)



讀者だより

皆さん！ あげましてお芽出たうございませう(給仕)
これこれ！ お前は後へ退つておいで！ 先生より先へ出るといふ法がありませんか！ さて皆さん。あげましてお芽出たうございませう。(記者一同)
先日當市縣公會堂に、野口雨情先生が御見になりましたが(いばらき新聞社の少年少女大会で)、主人に仕へて居る私は、仕事のついで、先生の御話の有る前に歸へる事になつて、御話を聴く事の出なかつたのが残念でたまりませう。併し先生の御話を聴いて来た女達から話してもらつたので、残念な内にもうれしく思つて居ります。先生は黒板に繪をかいて童話

を作られたと書いてくれ。友達からきたまゝ、書いて見ませうね。蛙が御池へ飛びこんで、さんぶりさんぶりさんぶりが、御池の目高がおどろいて、おつちこつちへつーつーつーつー
それから童話は幾つ出してもよろしいでせうか？(水戸市上市泉町廣小路一〇〇小泉旅館方 川又幸雄)
△どうが澤山だして下さい(保里)
△スターコスタコスタコスタコスタコスタコスタコスタ
今晚の子供の時間はこれでおしまひ。聞き終つて、お風呂には入つてからも、なんだか、スターコスタコスタと水くみに歩いてゐるやうな気がしてなりませんでした。その調子でスターコスタコスタコスタコスタの星を買ひに出掛けました。今月は大入筒の中に映が出ました上、と枝先生の挿畫もありましたので大變うれしく思ひました。最後にTK機が私の「お空とお池」に長も心をひかれましてご贖みまして、自分の作にもこうし

たごひ評がいたゞけた事を心うれしく存じました(東京 柴野氏三)
だん／＼冬らしい氣に満ちて来ます。記者先生御變りはありませんか。誌友諸兄中へ童話誌発行の方がおどろきましたなら、一部御見せ下さいませんか。御願ひ申します。それから私の好きな石川英一君、平生の御無音を謝します。君是非もう一度金の星に御ふる下さいな。大阪天王寺區東平野町三の三六 竹屋方 兼松竹夫)
△野口先生。子供の作品をお目にかけます。こんなによさめて、お目にかけますのはこんどが初めてです。いゝものか、わるいものか、伝へたうのことは、私、ちつともわからぬのです。めんどうですが、見てやつして下さい。(別府市 藤田小學校 矢田篤三)
△十二月號の岡本先生の表紙、とてもすてきです。阿部さんの「月夜の人影」笑しい詩です。大出しました。(鎌倉 茶木七郎)
△冬がやつてきました。北國に住

む私達は雪が四五尺も降つて外へ出られぬ時、おこたにはいつて金の星を讀むのが嬉しみます。十二月號は葉藏の出来栄でした。新年號が待望してたまりません。十一月に投書した僕の拙い童話が、入選してゐるが否か、それが良いたいのです。一番感心して胸をうたいたのは、子供寫板屋令子さんの「うま／＼」です。それから推薦作は推薦作だけあつて上出来でした。(富山 村上清治)
△初めて金の星のお仲間入りになりました。これから長く愛讀してゆくつもりです。先生、誌友の皆様どうぞよろしく。先生、投書のかきかたこれでいいでせうか。又大人は、大人編ごっこにかくのですが、お教へ下さい。(秩父郡金澤村 持田マササ)
△原稿紙の右肩の所に大きく書いて下さい。記者先生は近眼ですから。(給仕)
△またよけいな事をいふ。持田さん、投書の仕方はいふで結構です。(記者)
△記者先生。佳作發表の氏名の下に和活字でもよろしいです。それから作品の題名を書添へて下さらないで

せうか。三編位宛出してありますと、どれがよかつたのかわかりません。題名を書いて頂けると非常に研究に便利なんです。(佳作界浮浪人)
△佳作界浮浪人には驚きました。御越の趣、ごもつてもございませう。佳作欄の頁をもう少し増して是非さうしたいと考へてあります(記者)
△十二月號の口繪カリスマスの歌實にすてきです。僕あ、いふのたいです。記者さま、それから赤い鳥のやうに幼年讀物の募集をしては如何ですか？ 僕一時都合上、北原まさなと改名しましたがまたもとの名にかへります。(横濱 石川雪花)
△十月十五日、第七回金の星童話句會を醍醐君の家で開きました。集つた人は小林先生、醍醐君、藤井君、加藤政一君、田中君、松井君、入江君と僕です。(東京 後藤賢三)
△三日來の秋雨が漸く晴れて雨の爲に急に咲いて匂ひ出した木犀の香にとけて行く中秋の色をみながら金の星を聞いてみます。親友の大阪の兼松兄の御紹介で誌友に加

へて頂いてやつと今第一回の選本をうけたばかりです。自信なんかとてもありませんけど、これから毎月投書させて頂きますから記者先生給仕君よろしくおれが嬉しみます。兼松兄の御後援を得て童話誌「乳母車」を出してあります。先聲諸兄姉の御投稿をお待ちしてあります。兵庫県西宮市外大社村六軒 前田修(記者)
△僕、前田さん大好き！(給仕)
△金の星の皆様、私も今月からお仲間入さしていただきます。どうか浅智の私に童話初歩からおしへて下さい。青柳花明さん、あなたの作品は時々拜見しています。何か機關雜誌でも発行していらつしやるんですか。私も小さい集りで童話誌を出して居ります。お差支へなくば御住所をお知らせ下さいませ。(名古屋郵便局私書函 第四十號 深原春路)
△東京も日毎に寒くなりました。地方に住む方々にはもつと早く冬が来た事と存じます。これからは温い室内で勉強する季節です。御互に童話道に進ませう。十二月號の童話では篠崎さんの(米崎さぶ)古川さんの(稻刈り)が好き

です。童話句では安文さんのが良いと思ひます。巻頭の童話小山先生(乞食をよして)は面白く讀みました。私の「なで」が皆様の原稿を御待ちしております。機拙い私に御下り下さい。東京市外大久保町西大久保四七九 天野方 稻垣秀坊)
△童話の投書は二三回致しました。がだめで、野口先生を困ませる様な作品ばかりです。これから大いに精選して童話を作りませう。そして「金の星」永久の愛讀者となる事を誌上でお誓ひします。終りに誰か童話研究誌を發行して居られる方がありましたら、無言で私に御知らせ下さいませんか？ 諸兄姉の活躍を祈る。(岐阜市外芥見村八幡神社前 後藤英二)
△金の星のみなさん九月から誌友の御仲間入をした者ですが今日迄無言の内になつてしまひました。今後共よろしく御願ひいたします。昭和三年一月より童話の主とした雑誌「青い鳥」を發行する豫定です。みなさまの御玉稿を賜れば幸甚です。みなさまの御座在を祈ります。宋筆作ら記者様週日は美服

な繪葉書有り難う存じました。(東京市外玉川村頼田亮三 小川達三)
△北國には冬が早く来て、もう林檎が色づいて来ました。お友達と林檎高へはいつてゆくと、皆年の顔が紅くなつて見えます。今年は例年より餘ほご安いらつて、編輯部の皆さんに差上げようと思つて、一箱お送りしようと思ひましたが、ふと考へた事は、給仕さんが讀まないよと云ふことでした。讀がなくてはお駄目です。ですからやめました。弘前市富田 前谷やすし)
△ですからやめましたか！ ナアんだ。(給仕)
△先生、私は本文の挿畫も好きですが、通信欄や童話欄の一番はじめに小さい繪があるでせう。あれが大好きです。毎月読書しみにして原畫を頂くわけにはゆかないでせうか。(東京 藤谷鐵彌)
△カットをかまれるのは、岩間さんと枝先生です。原畫を頂けるか、お願ひしてみませう。(記者)
△この頃投書の中で、原稿紙に住所氏名を書いてないのが時々参ります。御注意下さい。(保里)



金の星社 新年號

出版だより

出版部より

○昭和二年は出版界にさつぱり、實に變化の多い年でありました。それと同時に金の星社の出版部が、大活躍をした年でもあります。一圓本が發行になつてから出版界は一大變化をしました。成功をした人もあれば、破産した人もあり出版を中止した人もあるといつた有様で、全く目が廻るやうな變化でした。

○その間にあつて、金の星社が毎月平均五冊の本を發行し、少くとも三冊以上の新刊書を發行して奮闘した事は、出版界の驚きとして評判されてゐました。そして、この本も相當の成績を擧げて行くことの出発点は、實に皆様の御後援にあつた爲めでありました。厚くお禮申上げます。

○意味で本社出版部が大活躍をする年であらうと思ひます。少年少女圖書として本社出版部は各書店で非常な信用があるばかりでなく、發行に於ても第一位をしめてをりますので、今後の出版は非常に樂なものであります。これから「優良な本を出版します。これからの星社の本でなければならぬ」といふやうに必ずや御意に入れる決心をもつて、社員一同大に努力いたしてをります。

○尙、この外に世界名作童話大系の第十四篇として、發行の後れてなつた「沙漠の魔女」も十二月中の出版決定に入つてをります。

近刊書報告

○沙漠の魔女

（大月喜一郎先生譯述）

美しい王女を、小人がさらつて行つてしまひます。それを王女が行つておた王様が救けに行つて様々のかんなん辛苦をします。小人には沙漠の魔女がついてゐます。そして沙漠の魔女は、王女を助けに来た王様があまり立派な人だつたので、どうかして自分のものにして下さいと云つてゐる。この魔術がいよいよ面白くなり、息もつかせぬ興味を皆さんに與へます。御愛讀を待つ。（定價金六十錢）

○少年發明家物語

（久米敏一先生著）

發明に興味を持つ人達は是非この本をお読みになる必要がありませぬ。偉い發明家となつた人達とはどんな人であるか。又どんな苦勞をいふこと、すべて此の本をお読みなればわかります。得がたい本であります。（定價金壹圓廿錢 送料十錢）

本社の出版書

『日本圖書館協會』

より推薦さる

金の星社の出版書が常に優良な本であつて、出版界の第一位を占めてゐる事は皆さんの御存知の通りであります。毎年一回、日比谷圖書館で最も多く兒童に愛讀された本の中で、優良な本を推薦することになつてゐる日本圖書館協會は、左の通りの本社の出版書を優良圖書として推薦しました。

- 十五少年漂流記
- アーサー王騎士物語
- 黒馬物語
- 勞働の少年
- 笛吹川

茗溪會推薦書十六種

東京高等師範學校では○漢會といふのを設けて讀物の調査をし、普通教育振興のために努めてゐますが、今度本社の出版書六種を推薦して、各學校に審査の報告をなしました。

○海を越えて(特選書)

右の六冊はどれも小學程度の讀物として推薦されたのであります。中でも沖野岩三郎先生の著になる「海を越えて」は特に優れた本として推薦されました。次に審査評を掲げます。

○利口な驢馬(推薦書)

○魔法の小人(同)

○大勇士(同)

○ピーター・パン物語(同)

○アラビヤ航海の巻(同)

○パイナット航海の巻(同)

○海を越えて(沖野岩三郎著)

【評】集められた「要さん、辨さん」以下六篇とも皆取材が事實である。従つて興味も仲々に深い。しかも、いづれの話も誠に内容の深いよいものばかりで感銘される點が多い。わけもなく見過されてきた割合に童話化されて子供に與へられるといふことは誠にうれしいことである。兒童讀物としてよるこんで推薦する。

○利口な驢馬

（關口野誓著編）

【評】集められた「要さん、辨さん」以下六篇とも皆取材が事實である。従つて興味も仲々に深い。しかも、いづれの話も誠に内容の深いよいものばかりで感銘される點が多い。わけもなく見過されてきた割合に童話化されて子供に與へられるといふことは誠にうれしいことである。兒童讀物としてよるこんで推薦する。

一四八

日本歴史實傳物語叢書(8)

○南朝新田義貞

（三島崑川先生著）

南朝のために奮戦した新田義貞の一生は、大楠公と共に忠烈悲壯な物語として歴史にながく残つてゐます。しかし、此の忠臣にして武勇に優れた新田義貞の一生を少年少女の爲めに書いた本はほとんどありませんでした。三島先生の此の苦心の名著は大歓迎を受けるに相違ありません。（定價一圓 送料十錢）

【評】世界名作童話大系の九。

兒童讀物として推薦してよい。

○アラビヤ航海の巻

（山野虎市編）

【評】内容はアラビヤン・パイナットの中にあるシンドバッドの航海記のアラビヤの話を書いたものであります。

【評】世界名作童話大系の七。

英國の英雄詩「ビョウワウ」を子供に讀ませるやうに書かれたものである。内容は面白い。小学校兒童の讀物として無難なものである。

○大勇士

（久米敏一著）

【評】世界名作童話大系の八。原作はドラマになつてゐるのを元來が童話のやうなもので今は方々の國語に童話として傳へられてゐる。劇として英本國では非常な人氣をひいたものである。やさしい心持があふれてゐて、その空想の獨創的なこと、子供心の美しさが畫かれてゐて、子供に讀ませたい物語である。

○魔法の小人

（榊山千代編）

【評】世界名作童話大系の九。兒童讀物として推薦してよい。

一四九

録目著名行發社星の金

13 魔 女 の 鳥	12 幽 靈 船	11 荒 野 の 勇 士	10 人 買 物 語	9 魔 法 の 小 人	8 ビー ター パン 物 語	7 大 勇 士	6 利 口 な 噓 馬	5 アラ ビヤ ン 航 海 の 巻	4 親 指 ト ム	3 盗 ま れ た 王 女	2 ほ ら 博 士	1 魔 法 の パ ラ	世界名作童話大系 定價六十錢・送料十錢	少年文學名著選集 定價壹圓廿錢・送料十錢	5 夢 と	6 子 守	7 あ 人 形 さ ん の 夢	8 ベ ン ベ ン 鳥	9 あ の 町 こ の 町	10 名 所 め ぐ り	11 夢 の あ ら び 國	12 俵 は ご ろ く	13 し ゃ ん こ く あ ら び 馬	金の星童話讀本 定價壹圓・送料十錢	岩三郎野童話讀本 定價壹圓・送料十錢	1 赤 い 船	2 一 つ あ ら び 星 さ ん	3 青 い 空	4 赤 い 靴	5 海 を 越 え て
---------------------	----------------	--------------------------	---------------------	-------------------------	----------------------------	---------------	-------------------------	-------------------------------------	--------------------	------------------------------	--------------------	-------------------------	------------------------	-------------------------	----------	----------	-----------------------------------	-------------------------	------------------------------	--------------------------	-------------------------------	--------------------------	--	----------------------	-----------------------	---------------	--	---------------	---------------	-------------------------

集募作創賞懸

【意注】童童童 【意注】童童童

懸賞は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにして下さい。
用紙は童心句はハガキ、童話や童謡はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次稿締切は十二月廿八日(その以後は次稿へ廻る)発表は二月號、宛名は東京市外田三三三番地金の星社。

童話は十五行以内、童謡は二十字語二百行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として発表いたします。推薦の場合には童話には五圓、童謡には一圓づつ、特選の場合には童話には拾圓、童謡には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、発表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所氏名を記して下さい。原稿はお返ししません。

（一般讀者の創作）
野口雨情先生選
齋藤佐次郎先生選
野口雨情先生選

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
半年分六冊(送料共)貳圓四拾錢
一年分十二冊(送料共)四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五九六番

【意注】金の星社
マ御注文は必ず前金で御拂込み下さい
マ送金は振替が一番便利で御座います
マ切手代用は(壹錢切手)一割増しです
マ第何巻第何號よりと書いてください
マ住所姓名はつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

昭和二年十二月三日印刷(納本毎月一回)
昭和三年一月一日發行(日發行)

編輯兼發行人 齋藤 藤 保
印刷所 三賞印刷合資會社
東京市外田三三三番地
電話小石川五三三八七番

しなのもるゐてれさ唱愛ごほ集譜曲の社本

集譜曲謡童星の金

錢六金料送・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第十三輯	しやんこくお馬	野口雨情作譜	(目曲)	しやんこくお馬、おめ、とおて、お留守、子供は風の子、因幡の白兔、秋の夜
第十二輯	倭はごろく	野口雨情作譜	(目曲)	倭はごろく、歌の中、寓の夜廻、狐の提灯、つまらない、小石
第十一輯	夢のお國	藤井清水作曲 野口雨情作譜	(目曲)	夢のお國、鬼が来い、赤い櫻ンぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の数
第十輯	名所めぐり	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	長柄の橋、坪、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳餅、石山寺の秋の月
第九輯	あの町この町	中山晋平作曲 野口雨情作譜	(目曲)	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小豆さん、段蔵寺の狸囃
第八輯	べんべん鳥	小松耕輔作曲 野口雨情作譜	(目曲)	べんべん鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蛸、さみだれ
第七輯	お人形さんの夢	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、おの穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱
第六輯	子守唄	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、意坊主、藪の下道
第五輯	夢ごり	小松耕輔作曲 野口雨情作譜	(目曲)	夢ごり、おしやれ橋、つげ子、十と七つ、雲雀の水波、雀の機織
第四輯	赤い靴	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝計船、鼠、眠り龜の子
第三輯	青い空	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	青い空、燕、雨夜の傘、てんてん鳥、雀の酒盛り、呼子鳥
第二輯	一つお星さん	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	一つお星さん、七つの子、鼈と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬
第一輯	人買船	本居長世作曲 野口雨情作譜	(目曲)	人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、露る燕、十五夜お月さん

録目著名行發社星の金

少年少女名著大系	14 西遊記	29 ロミオとジュリエット
定價九十錢・送料十錢	15 ローマ英雄物語	30 竹取物語
16 聖書物語	31 ジャンバルジャン	
17 奴隸トム物語	32 みなし兒	
18 ギリシヤ英雄物語	33 平家物語	
19 アンデルセン童話	34 フランダースの少年	
20 小公子	35 ジーグフリード王子物語	
21 母を尋ねて三千里	36 トルストイ童話集	
22 不思議國めぐり	37 支那英雄物語	
23 青い鳥	38 ワグネル物語 白鳥の騎士	
24 爲朝一代記		
25 ハムレット		
26 新ロビンソン漂流記		
27 ボムベイ最後の日		
28 少年鼓手		
	少年少女偉人傳大系 定價九十錢・送料十錢	
	1 ジャンヌ・ダルク	
	2 英雄シーザ	
	3 ネルソン	

新年お目出た
 う御座
 いませ
 相變らずお
 引立を願ひ
 上げます。



ライオン歯磨本舗
 本店 東京市本所區外手町
 大阪支店 大阪市東區博野町三丁目
 名古屋倉庫 名古屋市西區桑名町四丁目

